

小高町文化財調査報告第2集

# 小高町内埋蔵文化財調査報告Ⅰ

2001年3月

福島県相馬郡小高町教育委員会

小高町文化財調査報告第2集

# 小高町内埋蔵文化財調査報告Ⅰ

2001年3月

福島県相馬郡小高町教育委員会







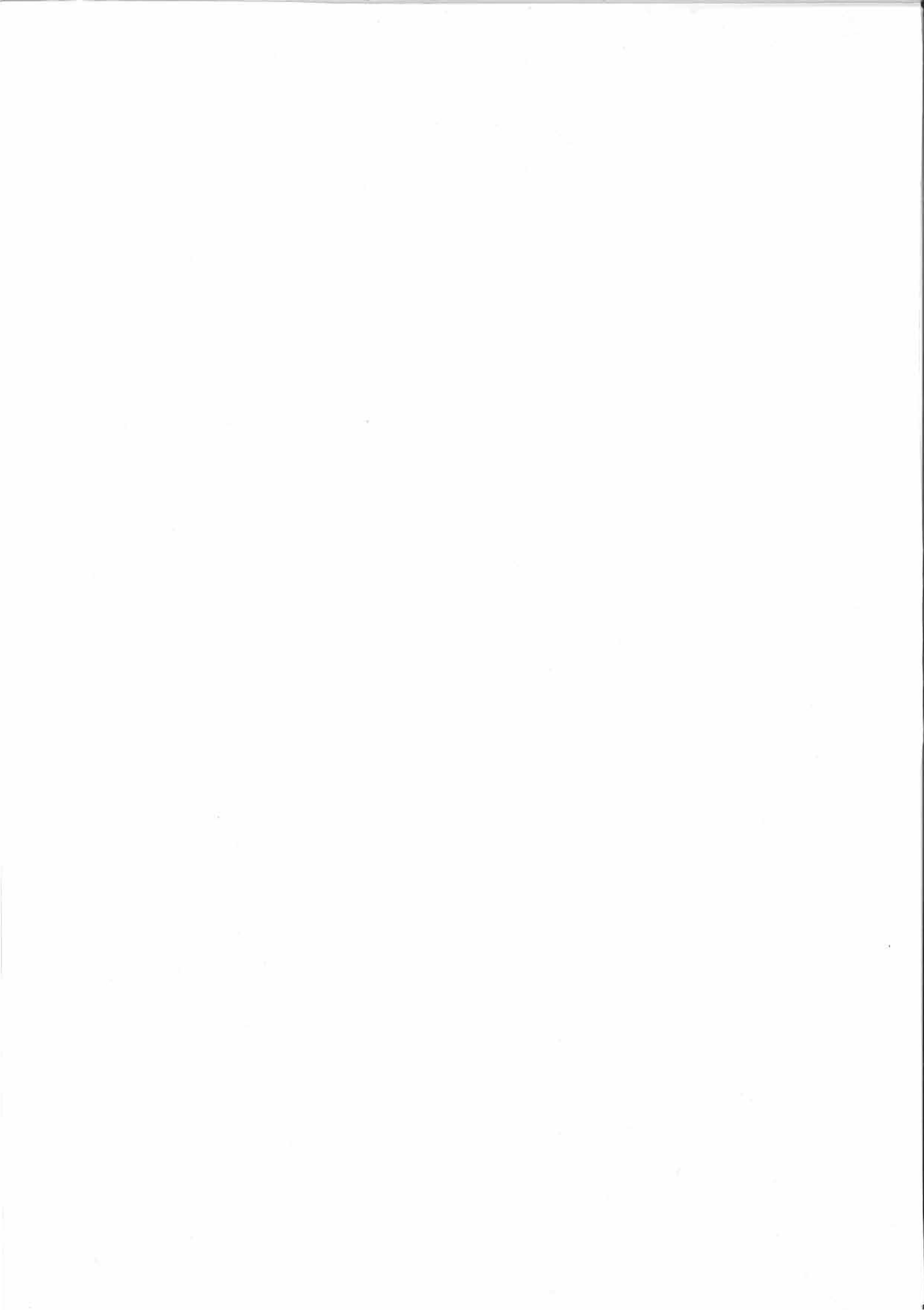


中村平遺跡出土状況



浦尻貝塚38T貝層





# 目 次

原色図版

目 次

例言・凡例

はじめに



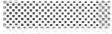
I 一里段古墳群 1号墳 .....	2
II 中村平遺跡 .....	13
III 北原貝塚遺跡群 .....	18
IV 浦尻貝塚 .....	21
V 加賀後貝塚 .....	29
VI 東広畑B遺跡 .....	34
VII 角部内南台遺跡 .....	37
VIII 大田和広畑遺跡.....	39
IX 浦尻貝塚・一里段古墳群の自然科学分析 .....	41
X 加賀後貝塚ボーリング調査報告 .....	44
XI 加賀後貝塚出土の動物遺存体 .....	48
出土土器観察表 .....	57
加賀後貝塚動物遺存体一覧表 .....	61

写真図版

## 例 言

1. 本書は平成11・12年度の2カ年に福島県相馬郡小高町で実施された埋蔵文化財調査報告である。
2. 調査は国・県補助金対象事業として小高町教育委員会が実施した。
3. 調査した遺跡は巻末の報告書抄録に記載してある。
4. 本書の執筆はⅪを山崎京美（いわき短期大学）、Ⅸ・Ⅹをパリノサーヴェイ株式会社が行い、それ以外と編集は川田強が担当した。
5. 本書の調査において以下の項目を委託した。  
放射性炭素年代測定 樹種同定 ポーリング調査：パリノサーヴェイ株式会社  
動物遺存体同定および分析：山崎京美（いわき短期大学）
6. 調査および報告書作成にあたり次の方々よりご協力・ご指導を賜った。  
磯村幸雄 大塚初重 岡村道雄 小川長導 奥山誠義 小林雄一 坂口隆 佐藤啓 嶋村一志  
新海和広 鈴木文雄 玉川一郎 中島広顕 長島雄一 堀耕平 山元出 松本茂 森幸彦 吉田陽一  
(敬称略 50音順)

## 凡 例

1. 本書で掲載した挿図の縮尺は各挿図に記してある。
2. 遺構等の平面図におけるトーンによる表現は各図にその内容を記してある。
3. 図示した遺物については観察表にその内容を記してある。出土土器観察表の法量は上段：口径、中段：器高、下段：底径であり、( ) 表示は復元値である。
4. 遺物実測図の表現は次のとおりである。  
赤色塗彩：塗彩部分   
黒色処理：部分   
繊維土器：断面 
5. 写真図版の遺物の縮尺は不同である。
6. 遺物写真の番号は挿図番号に対応している。

# はじめに

本報告は平成11・12年度の2カ年に福島県相馬郡小高町で実施された埋蔵文化財調査報告である。調査は小高町教育委員会が主体となり、国・県補助対象事業として平成11年5月24日～平成13年3月30日まで実施した。

調査は各開発事業に伴う試掘調査ならびに緊急に保全を図る必要がある遺跡の発掘調査である。調査地点は図1に示す8遺跡である。このうち、1・2は発掘調査、3～8は試掘調査である。なお、平成11年度以前に同一地点および隣接地での調査が実施されている時は、適宜参考資料として図等に示した。



- 1 一里段古墳群（荒神前遺跡） 2 中村平遺跡 3 北原貝塚遺跡群 4 浦尻貝塚
- 5 加賀後貝塚 6 東広畑B遺跡 7 角部内南台遺跡 8 大田和広畑遺跡

図1 調査遺跡位置図 (S=1/50000)

## I 一里段古墳群 1号墳

調査地点	小高町片草字一里段7-1
調査内容	発掘調査
調査期間	平成12年2月24日～平成12年7月14日
調査面積	約400㎡
調査理由	宅地内にあることにより、個人による土砂の採取が行われていたため。

**遺跡の概要** 一里段古墳群は小高川の支流前川を南に望む下位段丘上に位置する。遺跡の所在する台地は標高約30mあり、幅約200mをもって舌状に南東方向にせり出している。段丘面全体が埋蔵文化財包蔵地となっており、北西側を片草南原遺跡、南東側を荒神前遺跡と称する。いずれも縄文～奈良平安時代の複合遺跡である。

一里段古墳群は荒神前遺跡西端の台地縁辺部、台地が低地に突出する周辺にある。これまでに約300mの範囲に3基が確認されており、うち2号墳は径約2.5m、高さ約4.5mをもって現存している。3号墳は消滅して、墳丘は確認できない。今回の調査対象である1号墳は損壊がはなはだしいが、小高町埋蔵文化財調査カード（昭和46年調査 調査員 竹島国基）には「高さ約4m×径約2.5m」と記されている。

また、片草南原遺跡には一里段古墳群と同じく低地を望むように台地南側縁辺部に片草南原古墳群



図2 荒神前遺跡（一里段古墳群）位置図（S=1/10000）

が所在し、8基の円墳が確認されている。荒神前遺跡にも一里段古墳群から約300m西方に、径約6mの円墳である荒神前古墳があったとあるが、現在は消滅している。このようなことから、この下位段丘上には南側の低地を見下ろすように約1kmにわたり、帯状に10数基の古墳が分布していることが指摘できる。なお、この台地先端には縄文時代前期の片草貝塚が存在する。

**調査方法** 調査は墳形と規模の確認のため、現存する墳丘周辺に調査区とトレンチを設定し、周溝の確認を目指した。また、残存する墳丘の測量を行った上で、トレンチを設定し、主体部の確認と現状の墳丘の記録保存を図った。

## 1. 1 号 墳

### (1) 周溝について

墳丘残存部周辺を精査したところ、墳丘部は裾周りもすべて削平されており、残存する墳丘の形状から墳形・規模の確認は困難であった。また、墳丘を中心に設定した調査区からは周溝と考えられる遺構は検出されなかった。よって、周溝は墳丘残存部から離れて存在することを予測し、宅地内という事情により不規則となったが、トレンチを6本設定し、周溝の確認を目指した。

### 1 T (図5)

墳丘残存部の南側に位置する。このトレンチから周溝と考えられるSD01が検出された。SD



図3 一里段古墳群(荒神前遺跡)位置図 (S=1/3000)



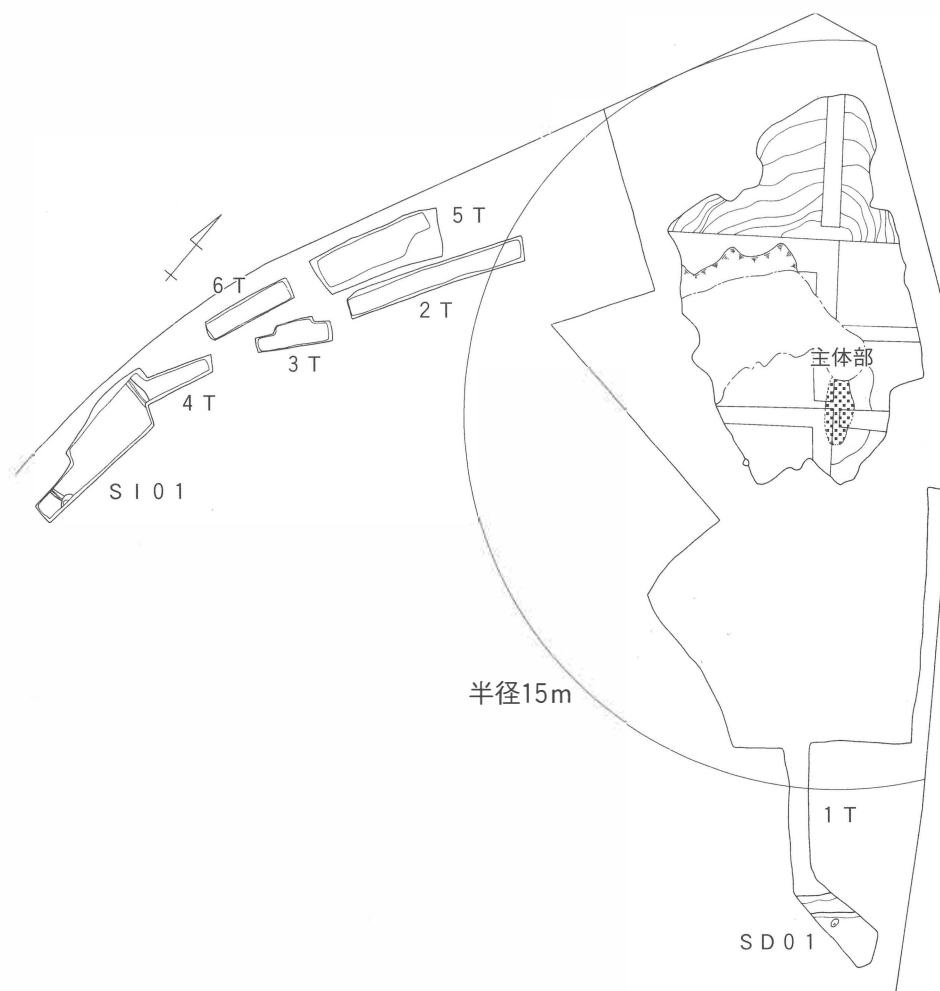


図4 一里段古墳群 1号墳調査状況図 (S=1/300)

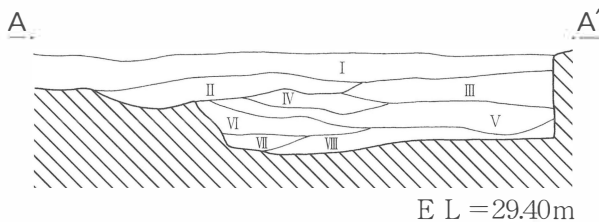
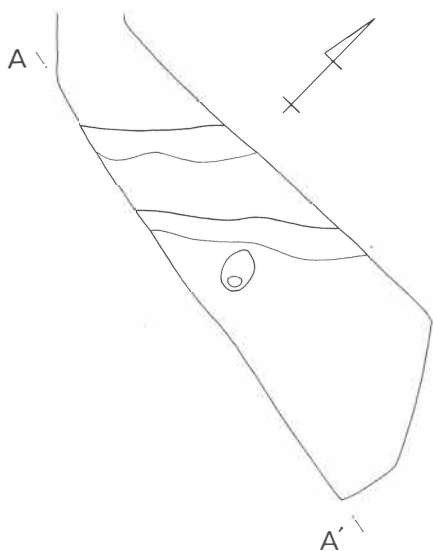
01は幅2.2m以上を計る。上位はSD01に平行する浅い溝によって削平されており(Ⅱ層)、Ⅲ層以下がSD01に伴う覆土と考えられる。黒褐色土のⅢ層と暗～明褐色土のⅣ層以下に2層に大別することができる。深さは確認面より約50cmを測る。墳丘側の立ち上がりは比較的鋭角的で、底面はわずかながら墳丘側の方が低い。底面のピットは深さ5cmほどの浅いものである。土師器片が出土したが、図示することはできなかった。

2・3・5・6T (図6)

2・3Tにおいて、周溝の可能性のある土層が確認された。Ⅲ層以下が該当する。黒褐色土(Ⅲ層)と明褐色土(Ⅳ・Ⅴ層)に大別される。検出範囲は2～3Tで約5.0mを測る。上位は削平されており、溝状を呈するかどうか、確認できなかった。隣接する5・6Tでは削平が激しく、検出できなかった。しかし、2Tではわずかながら立ち上がりが確認され、3Tでは墳丘側に底面が傾斜していること、また土層堆積状況はSD01と類似しており、周溝の可能性が高いと考えられる。

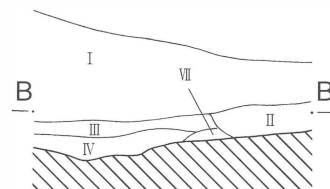
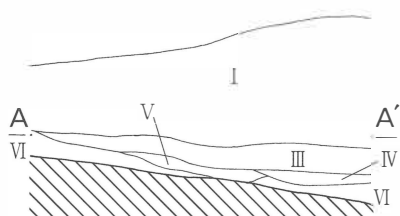
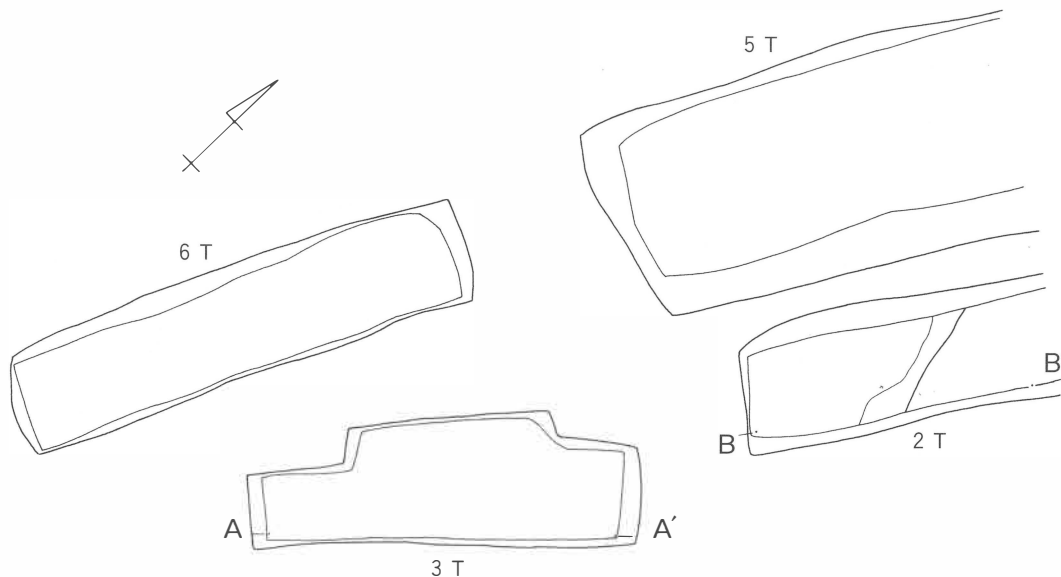
(2) 墳丘について (図7・8)

残存する墳丘は調査当初20×15mほどのものと考えられたが、精査の結果、約15×10mであった。残存墳丘にトレンチを6本設定したが、墳丘南側は大部分が近代に掘削した土を再度盛り上



- I 表 土
- II 暗褐色土 粘性やや有。締り無。ローム粒少量。
- III 褐色土 粘性・締りやや有。ローム粒微量。
- IV 褐色土 粘性・締りやや有。ローム粒微量
- V 暗褐色土 粘性・締りやや有。ローム粒・ロームブロック少量。
- VI 明褐色土 粘性・締りやや有。ローム粒多量。ロームブロック少量。
- VII 明褐色土 粘性やや有。締り無。ローム粒・ロームブロック多量。
- VIII 褐色土 粘性・締り有。ロームブロック主体。

図5 SD01実測図 (S=1/60)



- I 表 土
- II 褐色土 粘性・締り無。ローム粒少量。
- III 褐色土 粘性・締りやや有。ローム粒微量。
- IV 明褐色土 粘性・締りやや有。ロームブロック多量。
- V 明褐色土 粘性・締りやや有。ローム粒・ロームブロック多量。
- VI 褐色土 粘性やや有。締り有。ロームブロック主体。
- VII 褐色土 地山

図6 2・3・5・6 T実測図 (S=1/60)

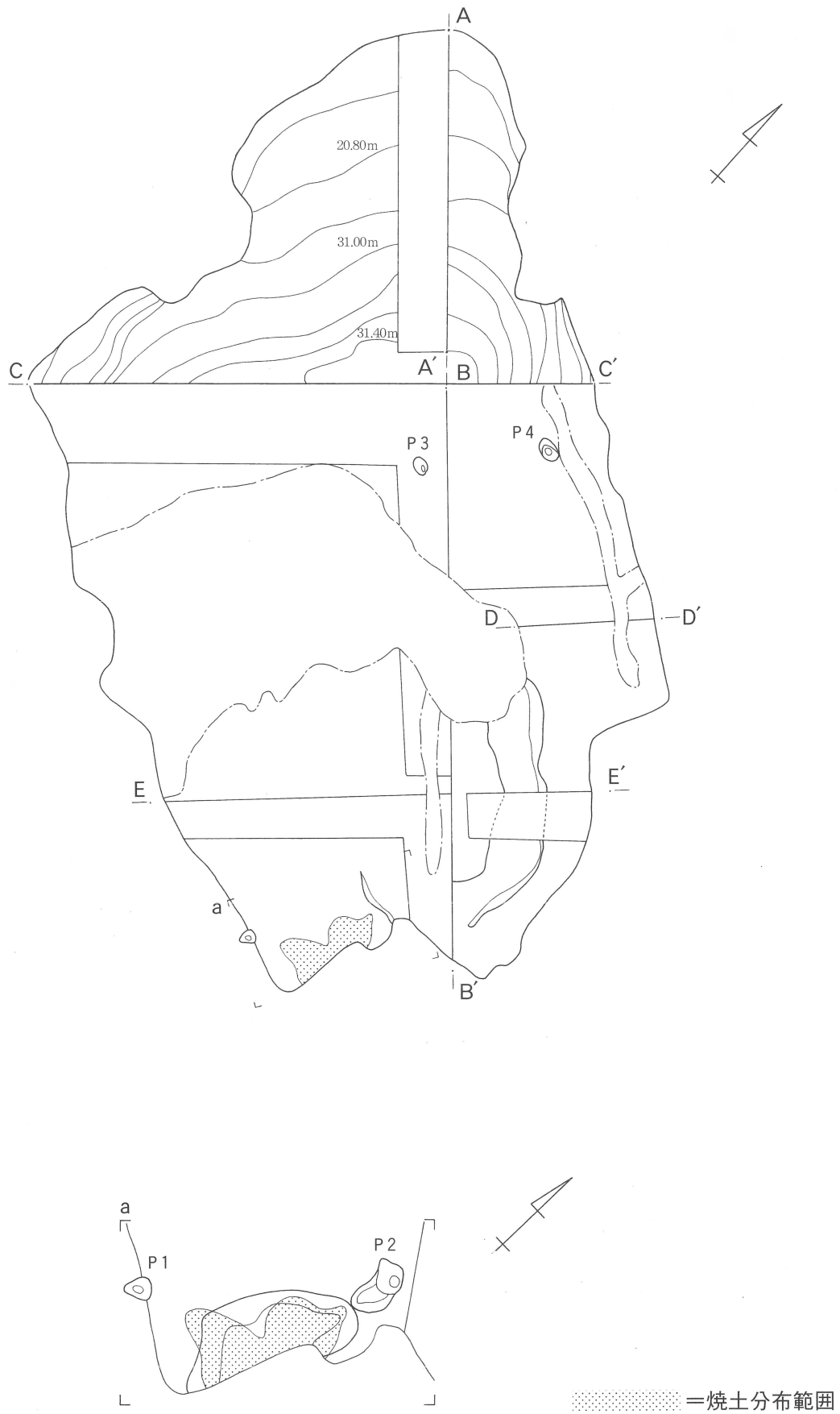
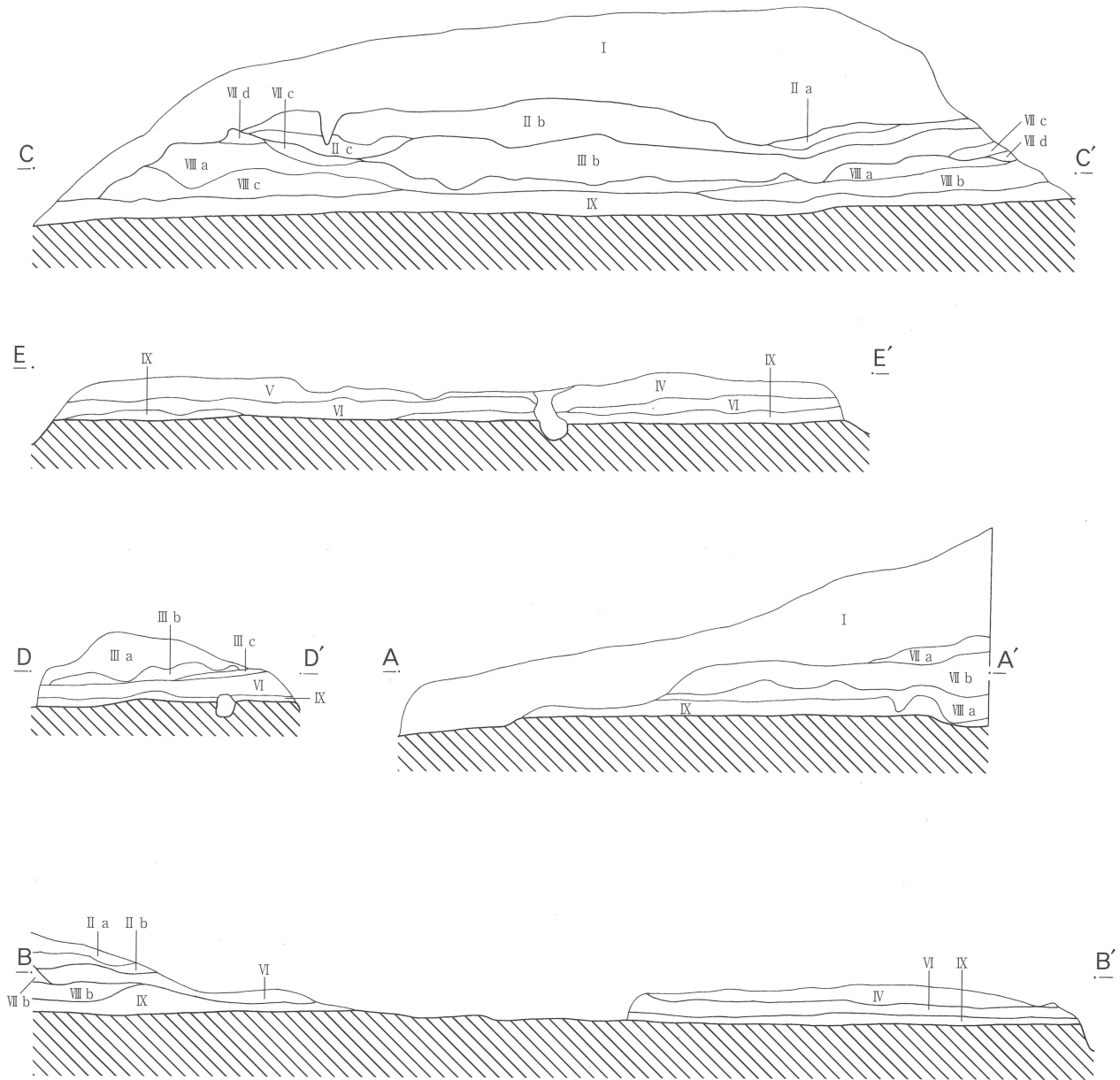


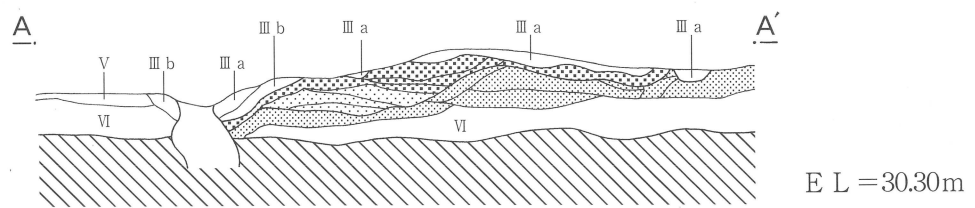
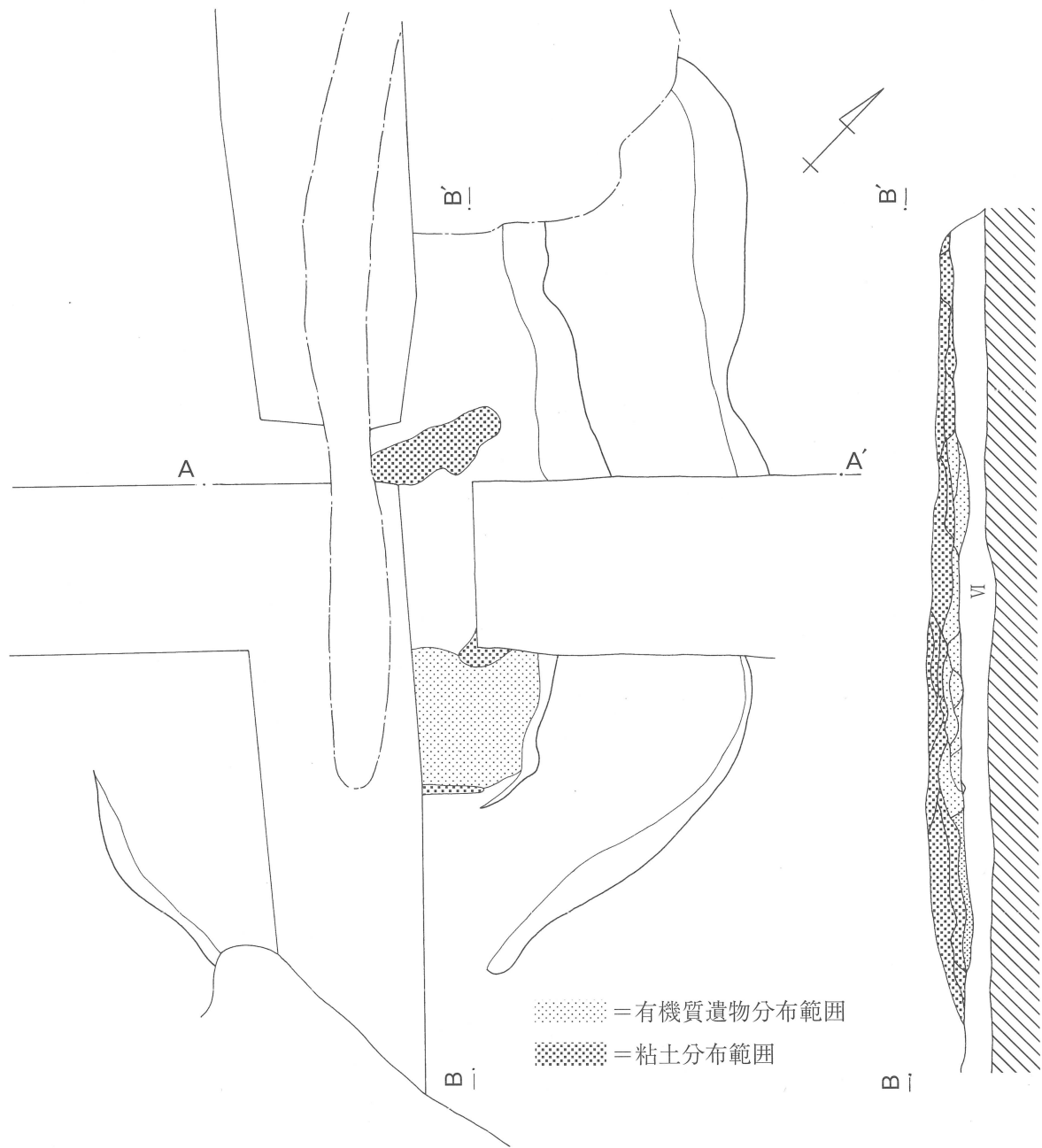
图7 一里段古墳群 1 号墳实测图 (S = 1/100 · 1/60)



E L = 30.30m

- I 表 土
- II a 黒褐色土 粘性・縮りやや有。テフラ・ローム粒少量。
- II b 暗褐色土 粘性・縮りやや有。ローム粒・ロームブロック少量。
- II c 黒褐色土 粘性・縮りやや有。テフラ・ロームブロック多量。
- III a 黄褐色土 粘性・縮り有。ロームブロック主体。
- III b 黒褐色土 粘性・縮りやや有。テフラ・ローム粒少量。
- III c 白色粘土 粘性・縮り有。
- IV 主体部覆土 (褐灰色粘土を多く含む。)
- V 褐灰色土 粘性有。縮りやや有。テフラ少量・灰色粘土をブロック状に多量。
- VI 黒褐色土 粘性・縮りやや有。テフラ・ローム粒少量。
- VII a 暗褐色土 粘性・縮りやや有。ローム粒・ロームブロック多量。
- VII b 黄褐色土 粘性・縮り有。ロームブロック主体。
- VII c 黒褐色土 粘性・縮りやや有。テフラ・ローム粒微量。
- VII d 黄褐色土 粘性・縮り有。ロームブロック主体。
- VIII a 黒褐色土 粘性・縮りやや有。テフラ・ローム粒・ロームブロック少量。
- VIII b 黒褐色土 粘性・縮りやや有。テフラ・ローム粒少量。炭化粒多量。
- VIII c 黒褐色土 粘性・縮りやや有。テフラ・ローム粒少量。
- IX 褐色土 粘性・縮り有。

図8 一里段1号墳断面図 (S = 1/60)



- |  |  |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li><span style="display: inline-block; width: 1em; height: 1em; border: 1px dotted black; margin-right: 0.5em;"></span> = IV a</li> <li><span style="display: inline-block; width: 1em; height: 1em; border: 1px dashed black; margin-right: 0.5em;"></span> = IV b</li> <li><span style="display: inline-block; width: 1em; height: 1em; border: 1px solid black; margin-right: 0.5em;"></span> = IV c</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>IV a 褐灰色土主体。白色・褐灰色粘土・テフラ。</li> <li>IV b 白色・褐灰色粘土主体。テフラ。</li> <li>IV c 黒灰色土。白色・褐灰色粘土、テフラ。</li> </ul> |
|--|--|

図9 一里段1号墳主体部実測図 (S = 1/30)

げられている攪乱層であることが確認された。よって、墳丘南側では上位の攪乱層をすべて取り払い、調査を実施した。

墳丘はⅡ～Ⅲ層が主体部構築後の盛土、Ⅳ層が粘土を含む主体部覆土、Ⅴ～Ⅷ層が主体部構築前の整地層、Ⅸ層が地山と考えられる。整地層は主体部付近を中心にやや窪みをつくるように堆積しており、墳丘北側では厚さを増している。黒褐色土を中心としているが、北側では黄褐色土との互層となっている。墳丘北側のⅧb層では炭化物が集中的に認められ、土師器杯・鉢が4点まとまって出土した。鉢には二次焼成が顕著に認められた。整地層にはテフラが全体に多く認められ、特に主体部下のⅥ層と炭化物集中層であるⅧ層に特徴的であった。このテフラは分析により、榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)であることが確認されている。

整地層下には墳丘南西端で浅い窪みがあり、覆うように焼土が分布している。この窪みと前述のⅧ層周辺には整地層下にピットが検出されている。ピットはいずれも深さ約10cmである。墳丘構築前に住居址等の遺構があった可能性がある。

主体部構築後のⅡ～Ⅲ層は黒褐色土と黄褐色土の互層であり、テフラも含まれている。

### (3) 主体部について(図9)

主体部が想定された地点は大きく削平されており、明確な掘り込みは平面的には確認が困難であった。白色・褐灰色粘土がブロック状、帯状に認められる層位(Ⅳ層)を基に主体部を考えた。Ⅳ層がやや落ち込むように検出された箇所を埋葬施設と推定した。整地層上に構築されており、木棺直葬と考えられる。主軸を北西方向に向け、長軸2.5m以上、短軸約1.2mを測る。底面はほぼ平坦であり、有機質遺物や白色・褐灰色粘土が薄く堆積している箇所が認められた。Ⅳ層の堆積状況から埋葬施設を囲むように長軸4.5m以上、短軸3.0mをもった浅い掘り込みが確認された。

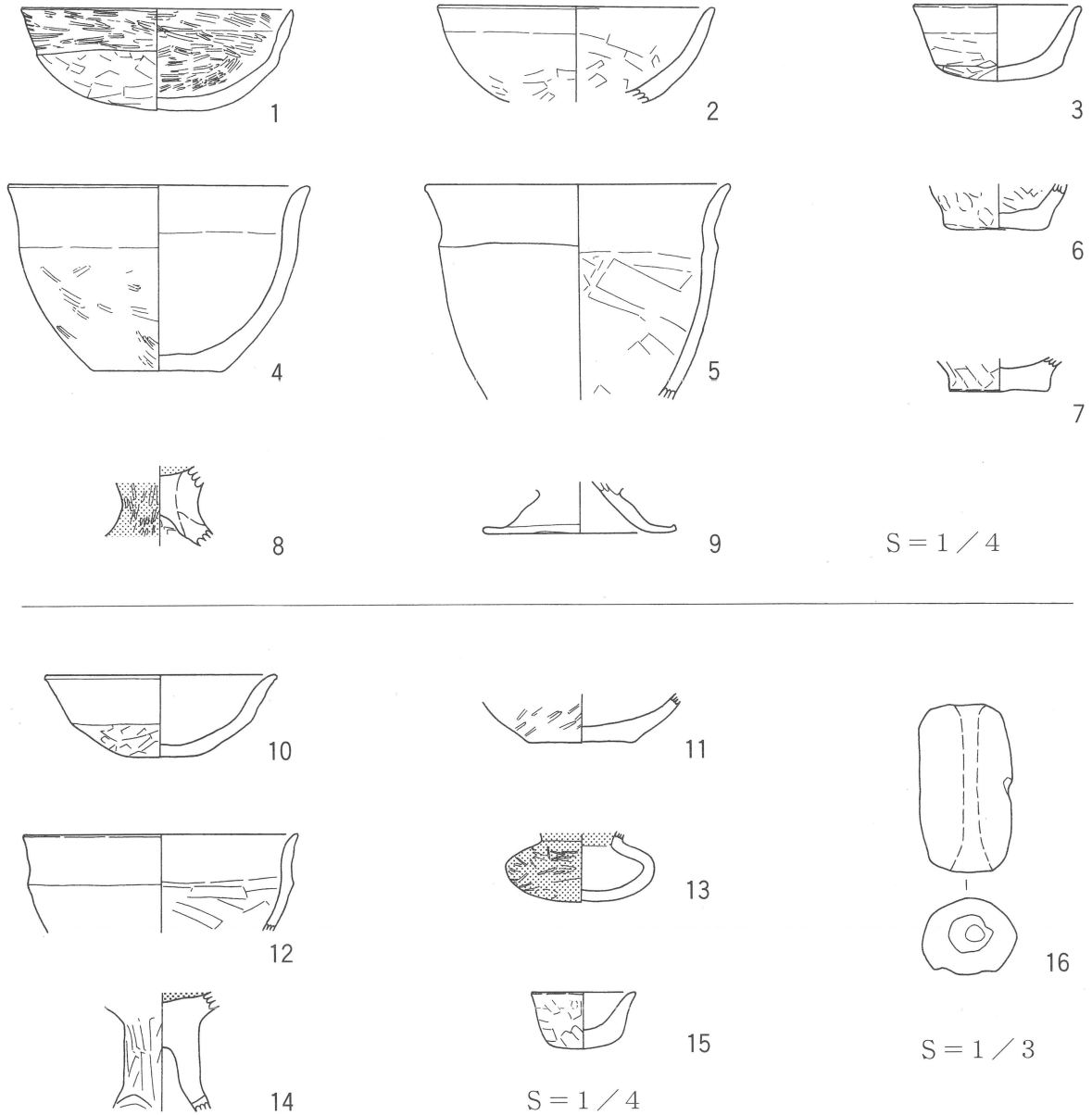
Ⅳ層からは比較的多量のテフラが検出され、集中的に分布している箇所も認められた。遺物はまったく出土しなかった。

### (4) 出土遺物(図10)

1～9は墳丘出土遺物、10～16は上位攪乱層および墳丘周辺部の攪乱層から出土した遺物である。1・2・4・5はⅧb層の炭化物集中層から一括して出土した。その他の墳丘出土遺物はⅡ・Ⅲ・Ⅷ層から出土したものであり、墳丘構築時の流れ込みと考えられる。

1はいわゆる須恵器模倣杯で半球形状の体部に段を持ち、口縁内面直下に稜線をもつ。口縁外面及び内面は丁寧なミガキ調整が施される。2は半球形状の体部で口縁は横ナデ調整である。4・5は緩やかに外反する口縁をもつ鉢である。いずれも二次焼成を受けており、口縁は横ナデ、体部はミガキ・ナデ調整が施されている。3はミニチュア形の杯で口径9.6cm、口縁は横ナデ調整である。8・9は高杯で、8は赤彩が施され、9はハ字状に開く脚部である。

10は口縁を横ナデ調整し、体部が屈曲し外反する形態の杯である。11は鉢か壺の底部である。12は鉢で調整不明瞭だが、口縁は横ナデが施されている。13はミニチュアの壺で、指ナデ調整後ミガキ、外面体部と内面底部のみ赤彩が認められる。15もミニチュアの杯であり、粗いヘラ削り後指ナデ調整である。14は高杯で細長い柱状の脚に透かし孔をもつ。杯部内面は黒色処理が施されている。16は土錘で最大長7.1cm、最大幅3.9cmを測る。



上段=墳丘出土遺物 下段=攪乱出土遺物

図10 一里段1号墳出土遺物① (S=1/4・1/3)

(5) ま と め

周溝はわずかな検出にとどまり、墳形、規模等を明確に捉えることができなかった。主体部から周溝検出地点を中心として復元すると、径30mを超えるものとなるが、定かではない。過去の記録等を考慮し、径25m以上の大型の部類に入るものと推定される。また前方後円墳の可能性も指摘できる。墳丘は主体部付近を窪ませるように整地した後、主体部を構築したことが確認された。埋葬施設は木棺直葬で、墓壙の有無は明確でなかった。

Hr - FPは墳丘整地層や主体部に特にみられ、周溝としたSD01覆土には見られない。墳丘出土遺物は舞台式・住社式の範疇に含まれるものと考えられる。これらのことから、Hr - FP降下後、6世紀後半の構築と考えられる。

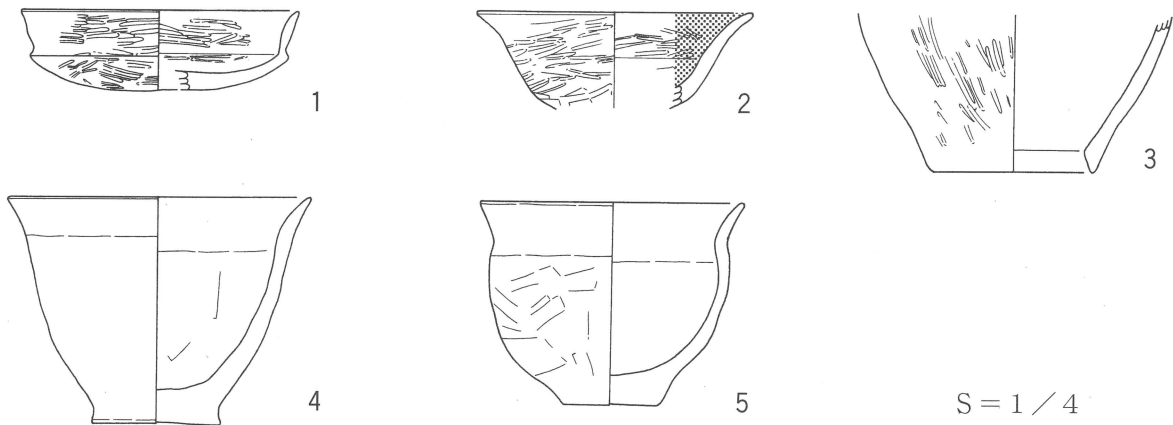
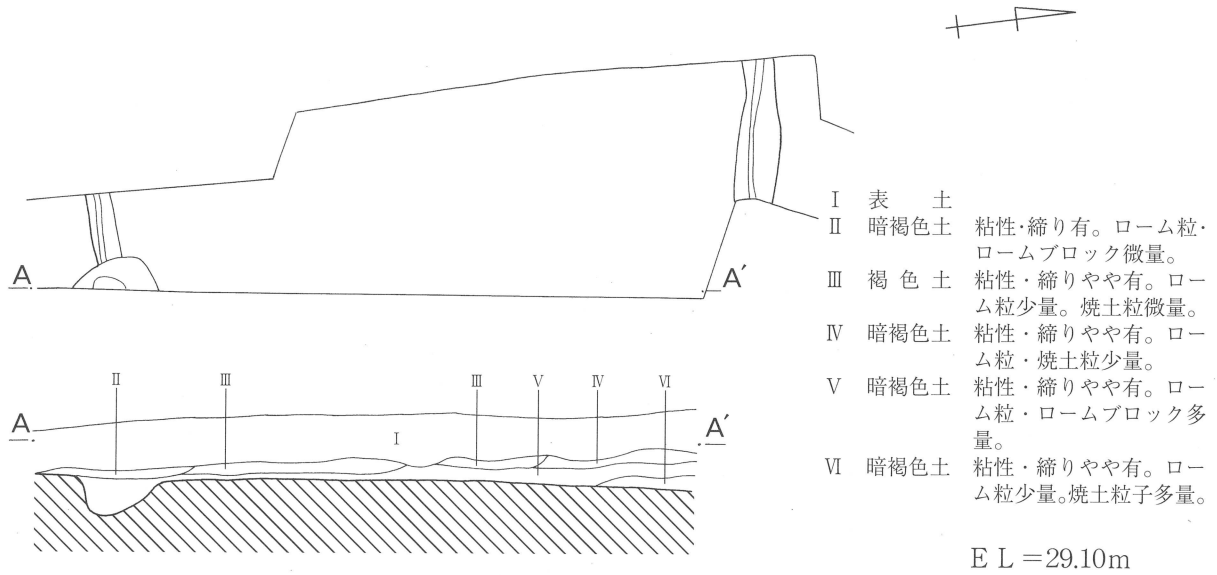


図11 S I O 1 実測図・出土遺物 (S = 1 / 60 · 1 / 4)

## 2. S I O 1 (図11)

4 Tから検出された。長軸5.5 mを測る。上部は削平されており、覆土は約20 cmで、褐～暗褐色を基調とする。テフラは検出されなかった。周溝は約5 cmの深さをもつ。床面は貼床で比較的よく締まっている。ピットおよびカマドは確認されなかった。

遺物はほぼ床面直上から出土したものである。1は体部外面に稜をもつ須恵器模倣杯で体部内外面に丁寧なミガキがほどこされている。2は明瞭な稜をもたず緩やかに外反する形態を示す。口縁のミガキは内外面とも上位まで施され、外面に横ナデが認められる。内面は黒色処理が施される。3は甌で外面ミガキ、内面はナデ調整である。4・5は鉢でいずれも口縁を横ナデしている。体部外面はナデ調整である。4は緩やかに外反し、5はやや屈曲をもって胴部が膨らむ形態をしている。これらの遺物は舞台式・住社式に相当するものと考えられ、6世紀後半に位置づけられる。





図12 一里段1号墳出土遺物②

### 3. その他の出土遺物 (図12)

調査区内から弥生時代中期の土器がわずかながら出土した。1は口縁に連続キザミを施し、1本のヘラ描沈線により、並行・弧状沈線内に充填縄文が施されている。沈線の交点部には短沈線によるスリットがあり、内面には口唇直下に並行沈線文が認められる。2・3は沈線間1mm未満の平行沈線文を施す桜井式である。2は縦走沈線、3は重三角文が施されている。

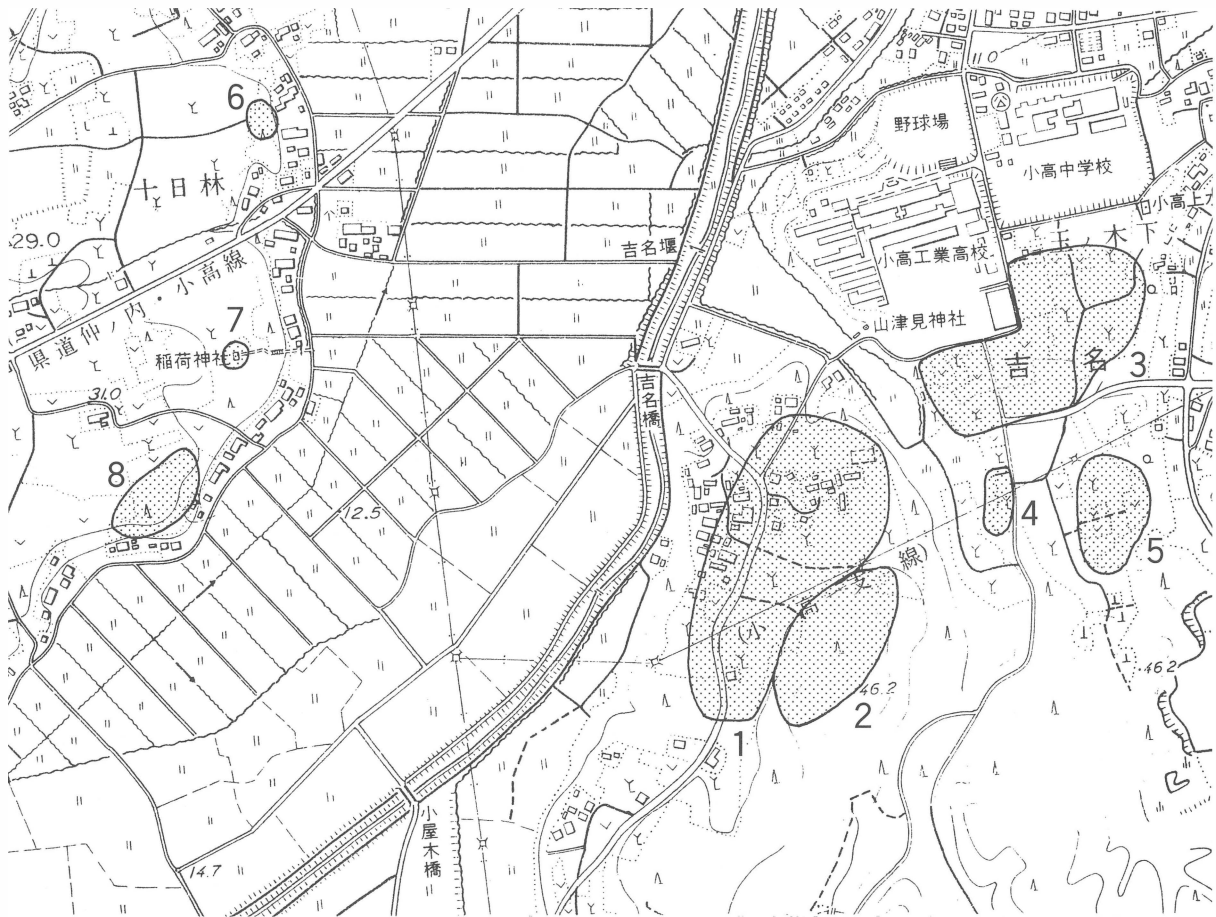
### 4. ま と め

本調査により一里段1号墳は6世紀後半につくられた大型の古墳であることが確認された。また、4Tより検出された住居址もほぼ同時期の所産と考えられた。小高町内で古墳の本格的な発掘調査は初めてであり、これまで漠然と後期の所産とされていた片草南原台地の一連の古墳群に大きな成果が得られた。埋葬施設は隣接する原町市の桜井古墳群や荷渡古墳群では後期の古墳は地山を掘り込んで構築されるものが主体だが、当古墳は整地層内に構築するという異なる構築法が認められた。

また、6世紀代の住居址の検出も小高町内では初めてのことであり、この台地上には古墳群とともに同時期の集落が存在していることが明らかとなり、当時期の主体となる地区であると推察される。

## II 中村平遺跡

- 調査地点** 小高町小屋木字一本松58-6
- 調査内容** 発掘調査
- 調査期間** 平成12年8月21日～平成12年8月23日
- 調査面積** 約10m<sup>2</sup>
- 調査理由** 住宅敷地内にて軽微な建物を建設中、土器が出土したため、発掘調査を実施した。
- 遺跡の概要** 中村平遺跡は小高川右岸、沖積低地を西に望む下位段丘上（第3段丘）に位置する。遺跡の所在する台地は標高約25mあり、150～200m幅の平坦面をもつ。
- 遺跡は弥生中期後半・古墳後期～奈良・平安時代のものとされている。平成8年に町道工事に伴い小高町教育委員会により、試掘調査が実施されているが、遺構・遺物はまったく検出されていない（図14）。これまでに本遺跡で発掘調査は実施されていないが、現在、遺跡内の畑からは主に土師器を表採することができる。遺跡東側の上位段丘には7基の円墳からなる中村平古墳群があり、本遺跡と有機的な関係にあるものと考えられる。
- 調査方法** 宅地内の土器出土地を中心に掘削可能な範囲を調査区に設定し、実施した。



1 中村平遺跡 2 中村平古墳群 3 玉ノ木平A遺跡 4 玉ノ木平B遺跡 5 玉ノ木平C遺跡  
6 観請内古墳 7 十日林古墳 8 杉平古墳群

図13 中村平遺跡位置図 (S=1/10000)

1. S101 (図15・16)

北東コーナーを中心に検出した。上部は削平されており、覆土は約20cmである。北壁を中心に山砂の分布があり、また3~5cm程度盛り上げた袖部が認められるので、カマドと考えられる。周溝は約8cmの深さがあり、ほぼ全周するものと推定される。P2・3は深さ20~30cmを測り、柱穴であるかどうか定かではない。P1は土坑状の掘り込みで、深さ約20cmである。床面は貼床で比較的良好に締まっている。

本住居址からは覆土下層、カマド脇のP1周辺から多量の土器が出土した。

1~4はいずれも内黒の杯である。外面にわずかに段を残し、内面は形骸化した稜が認められる。すべて口縁外面横ナデ、内面ミガキ調整が施される。やや内湾して立ち上がるもの(1・2・4)

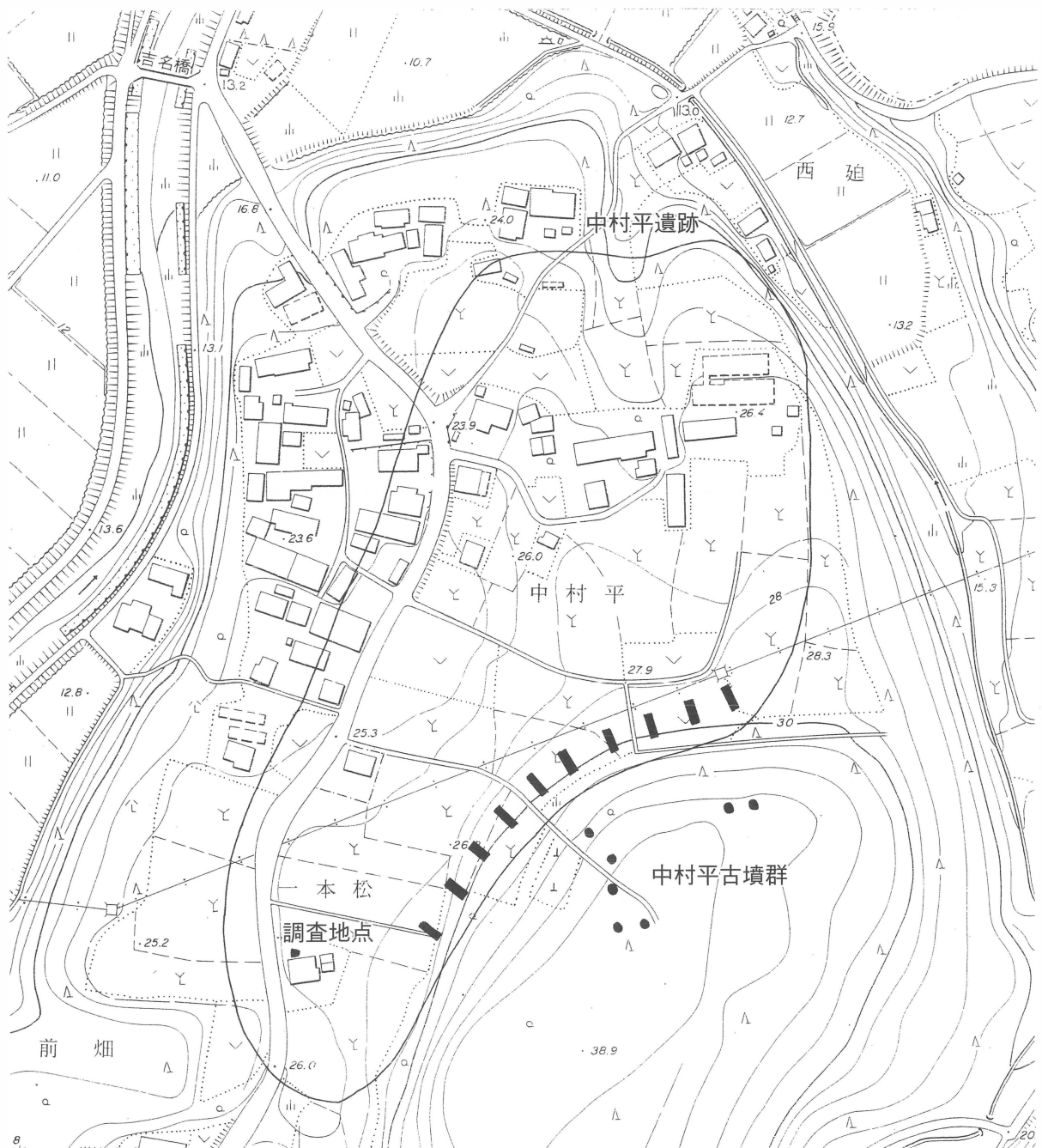
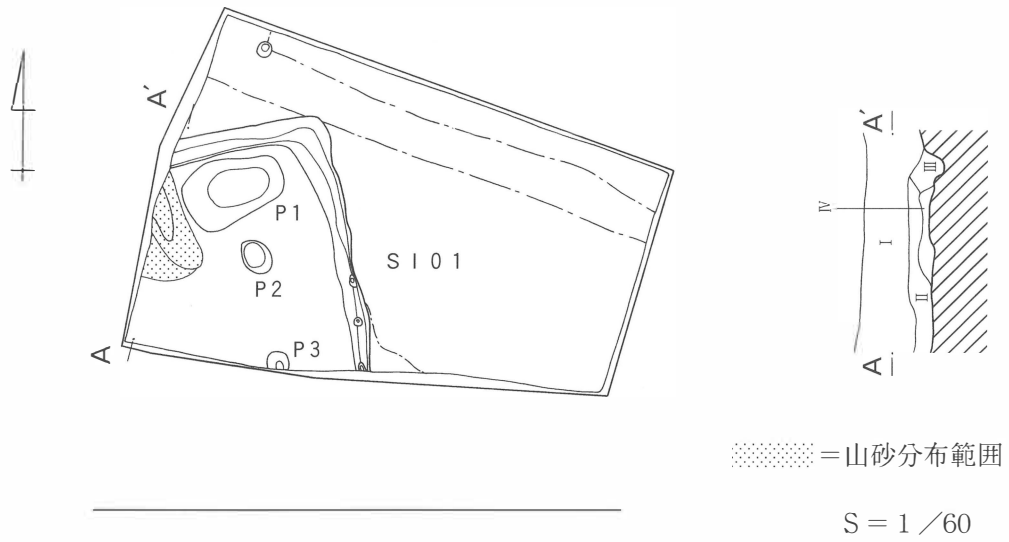


図14 中村平遺跡調査状況図 (S=1/3000)



- I 表 土
- II 黒褐色土 ローム粒微量。
- III 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。攪乱
- IV 白色砂質粘土（山砂）

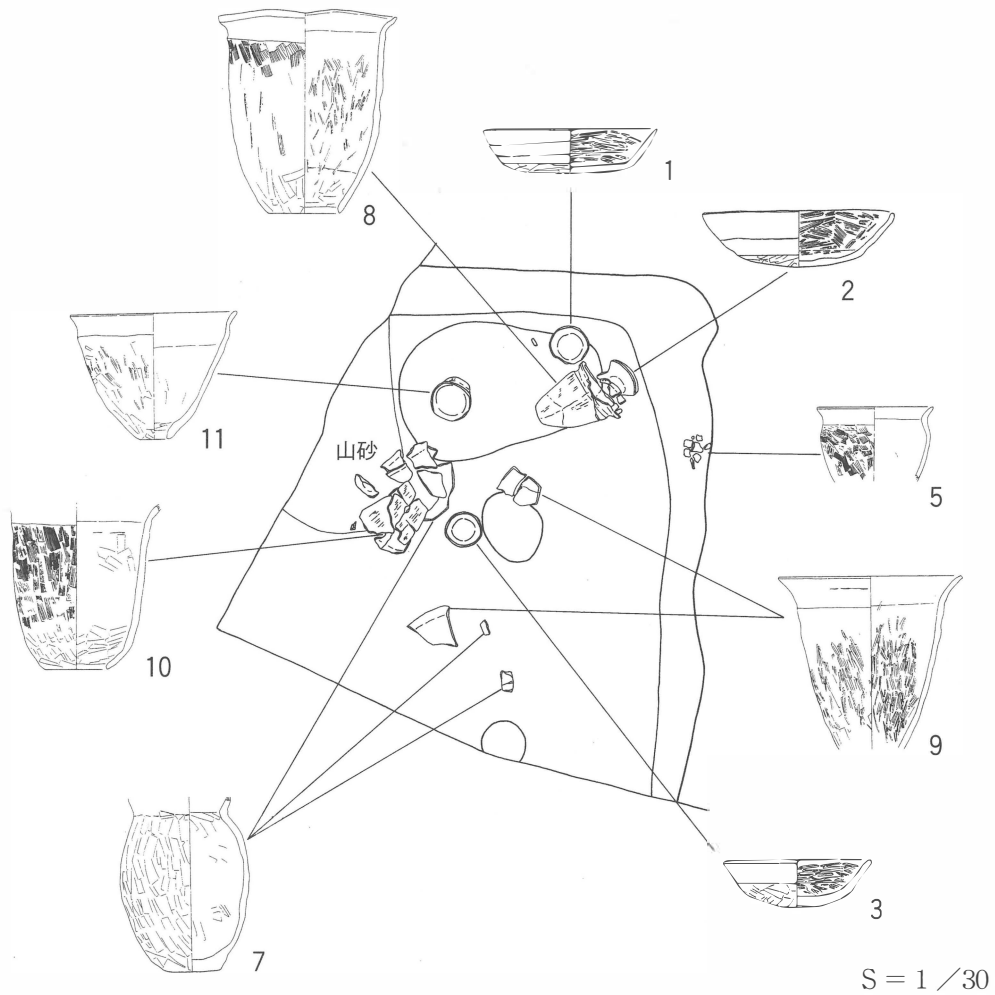


図15 中村平遺跡 S 1 0 1 実測図 (S = 1 / 60 · 1 / 30)

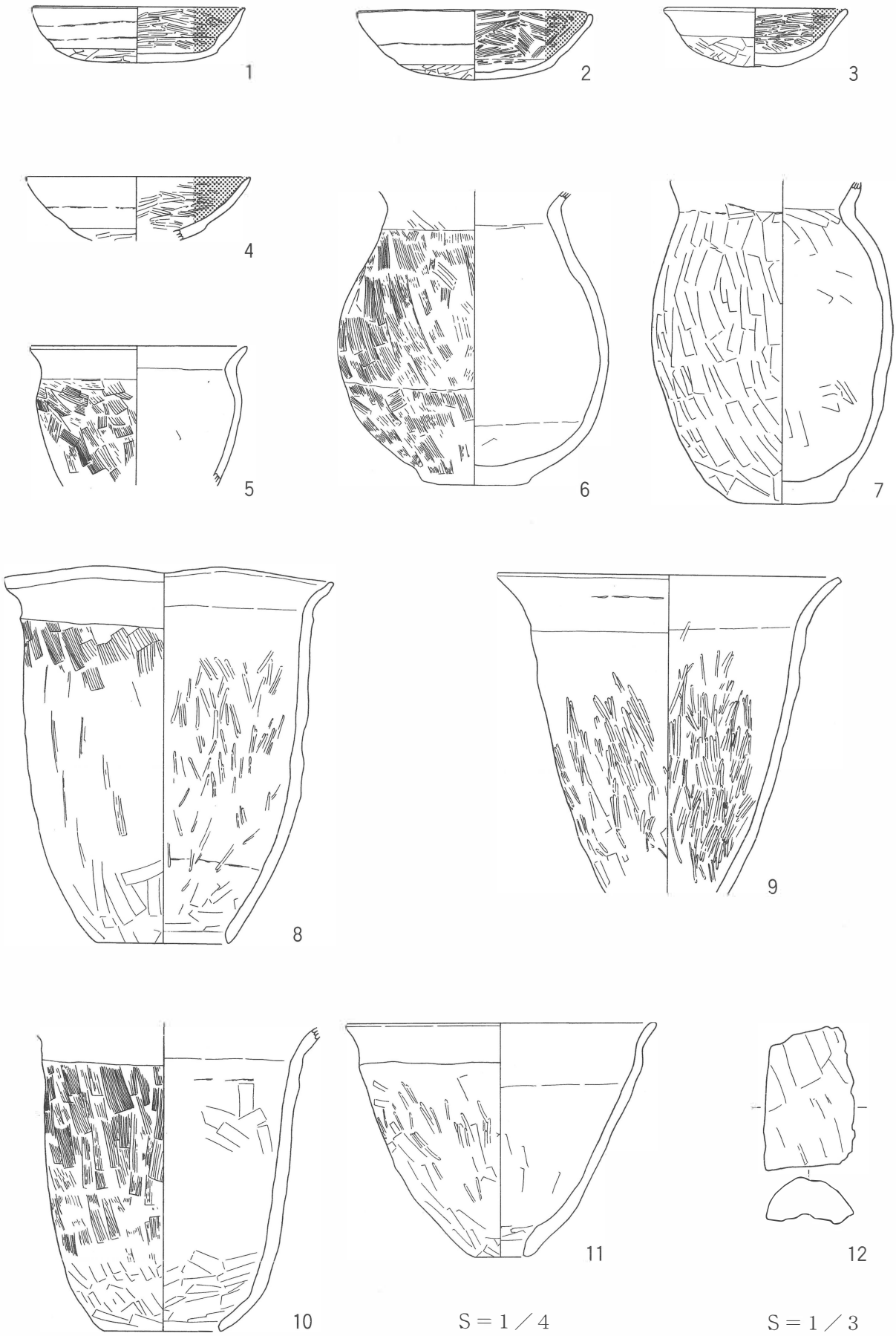


図16 S I O 1 出土遺物 (S = 1 / 4 · 1 / 3)

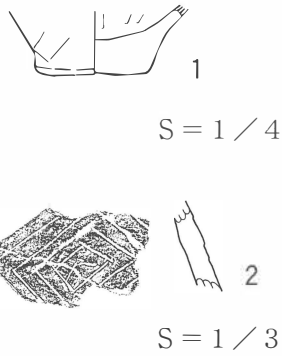


図17 中村平遺跡出土遺物  
( $S = 1 / 4 \cdot 1 / 3$ )

と外反するもの(3)が存在する。5~7は甕である。ハケ目調整(5・6)とケズリ調整(7)がある。6は下膨れの形態に特徴があり、5は体部上位に、7は体部中位に最大径をもつ。いずれも頸部の段は不明瞭である。8~11は甑である。底部にむかって急速にすぼまり、外面にヘラ削り後ミガキ調整を施すもの(9・11)と、体部上位にハケ目調整を施すやや寸胴形の形態のもの(8・10)が存在する。内面はミガキまたはナデ調整である。12は支脚で粗いヘラ削りが施されている。

このような特徴は栗圀式の新しい段階を示しており、所属時期は7世紀後半と考えられる。

## 2. その他の出土遺物(図17)

遺構外から出土したものとして、1の土師器の甕底部と2の桜井式がある。2は線間1mm未滿の平行沈線による重四角文が認められる。

## 3. ま と め

今回、7世紀代の住居址が検出されたことにより、中村平遺跡に古墳時代後期の集落があることが確認され、隣接する中村平古墳群との関係を示唆させる重要な成果を得ることができた。また、わずかな調査面積でありながら、比較的多量の土器が出土したことが特筆される。当地方の土師器研究に有効な資料と言えよう。

### Ⅲ 北原貝塚遺跡群

調査地点 小高町浦尻字北原  
調査内容 試掘調査  
調査期間 平成11年9月9・10日  
調査面積 約150m<sup>2</sup>  
調査理由 県道建設

遺跡の概要 北原貝塚遺跡群は旧井田川浦を眼下に望み、現海岸線に隣接する下位段丘上に位置する。遺跡の所在する台地は標高20mを測り、北西方向に舌状に突出している。

この遺跡群には北向・神ノ前・北原・北原西と名づけられた貝塚がある。貝塚からは縄文早期～中期の土器が表採されているが、主に前期を中心とした遺物が集中的に採取できる。

支谷を隔てて約300m西には縄文前期～晩期まで営まれたと推定されている浦尻貝塚があり、その中間には弥生～奈良平安時代の中林崎遺跡がある。東には海崖に製塩土器を伴う縄文晩期の遺物包含層がある磯坂遺跡が隣接している。

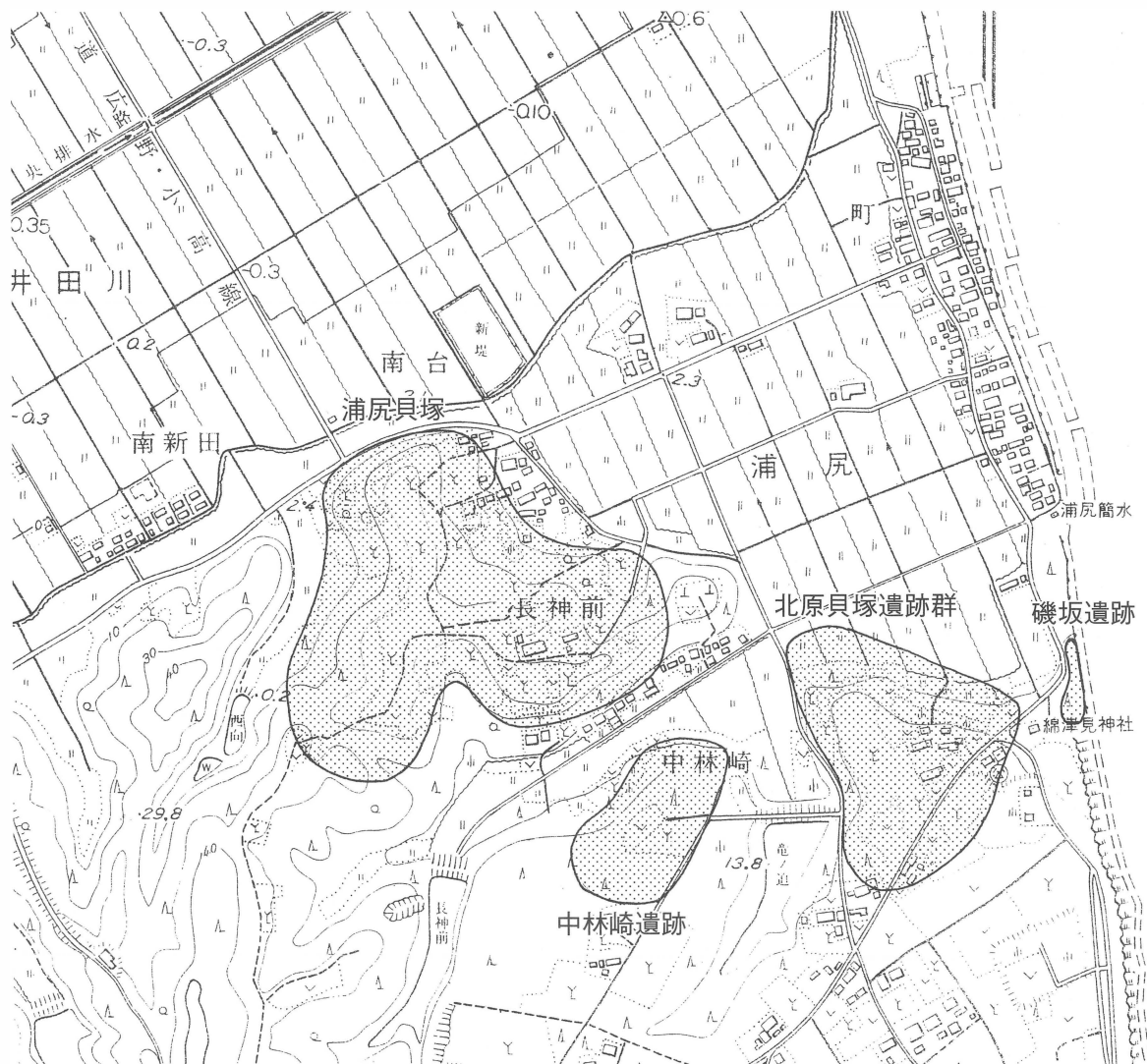


図18 浦尻貝塚・北原貝塚遺跡群位置図 (S = 1 / 10000)

### 1. これまでの調査 (図19)

平成10年に北原西貝塚で小高町教育委員会により発掘調査が実施されている。調査は斜面貝層を対象に行われ、厚さ約40cm、キサゴを中心とし、前期前半に形成されたことが確認された。また、同年に小高町教育委員会により、ほ場整備に伴い北側の低地部で試掘調査が実施された(1~7T)。1~3Tにおいて縄文時代前期の遺物を含む砂層が表土下に検出された。

### 2. 平成11年の調査 (図19)

調査は遺跡北東縁にあたる開発対象区において6本のトレンチを設定し、実施した。トレンチ番号は平成10年に実施したトレンチ番号の続き番号でつけた。

設定したトレンチの多くは台地斜面に相当する。8・9・11・12Tは削平されており、黄白色・青灰色粘土層が検出された。10・13Tでは粘土層の上位に黒褐色土が検出された。縄文土器が数片出土したが、小片のため時期等は不明である。本調査対象区では貝層や隣接する磯坂遺跡の遺物包含層は存在しなかった。

### 3. 出土遺物 (図20)

平成10年度に実施した試掘調査で得られた資料を参考資料として図示する。すべて低地部砂層上

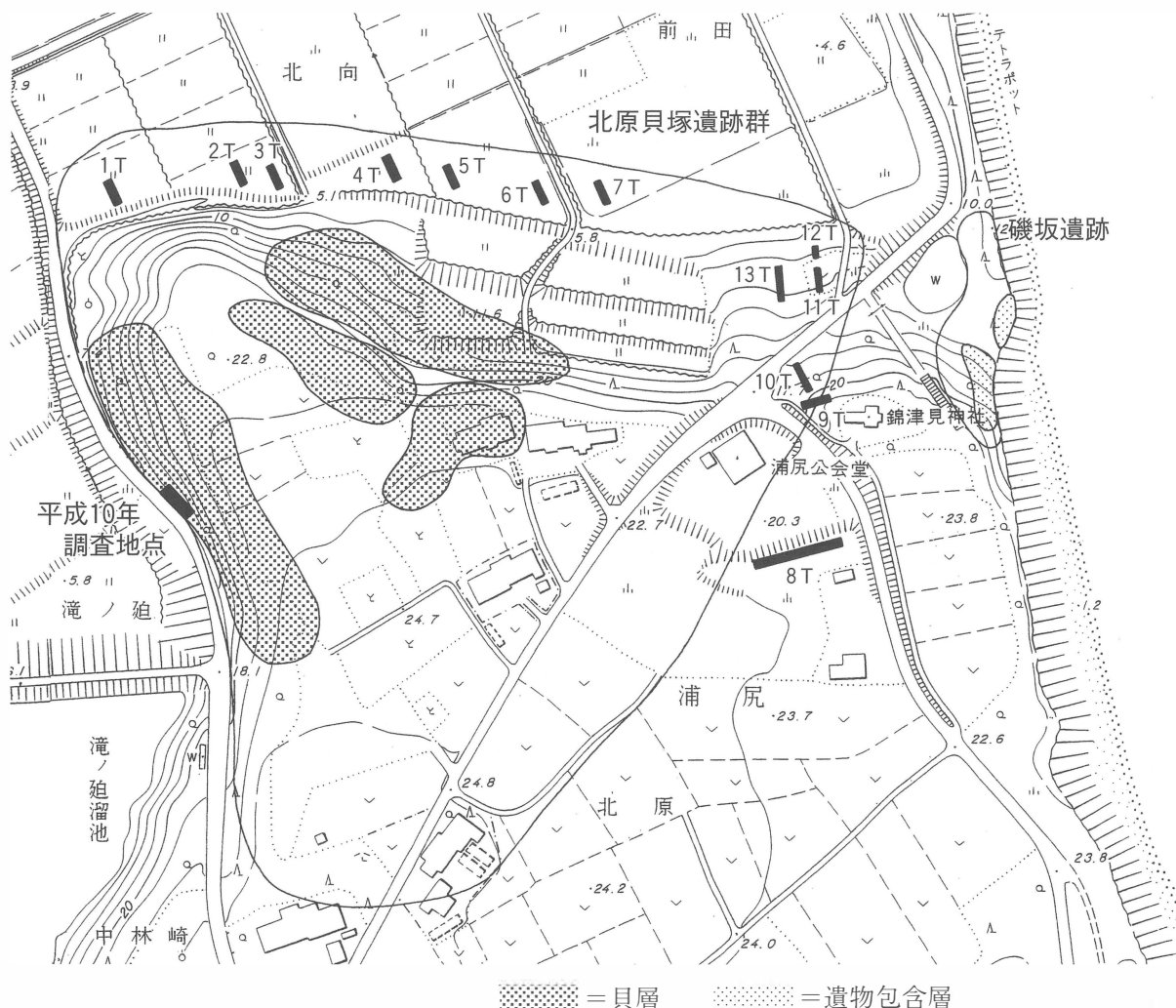
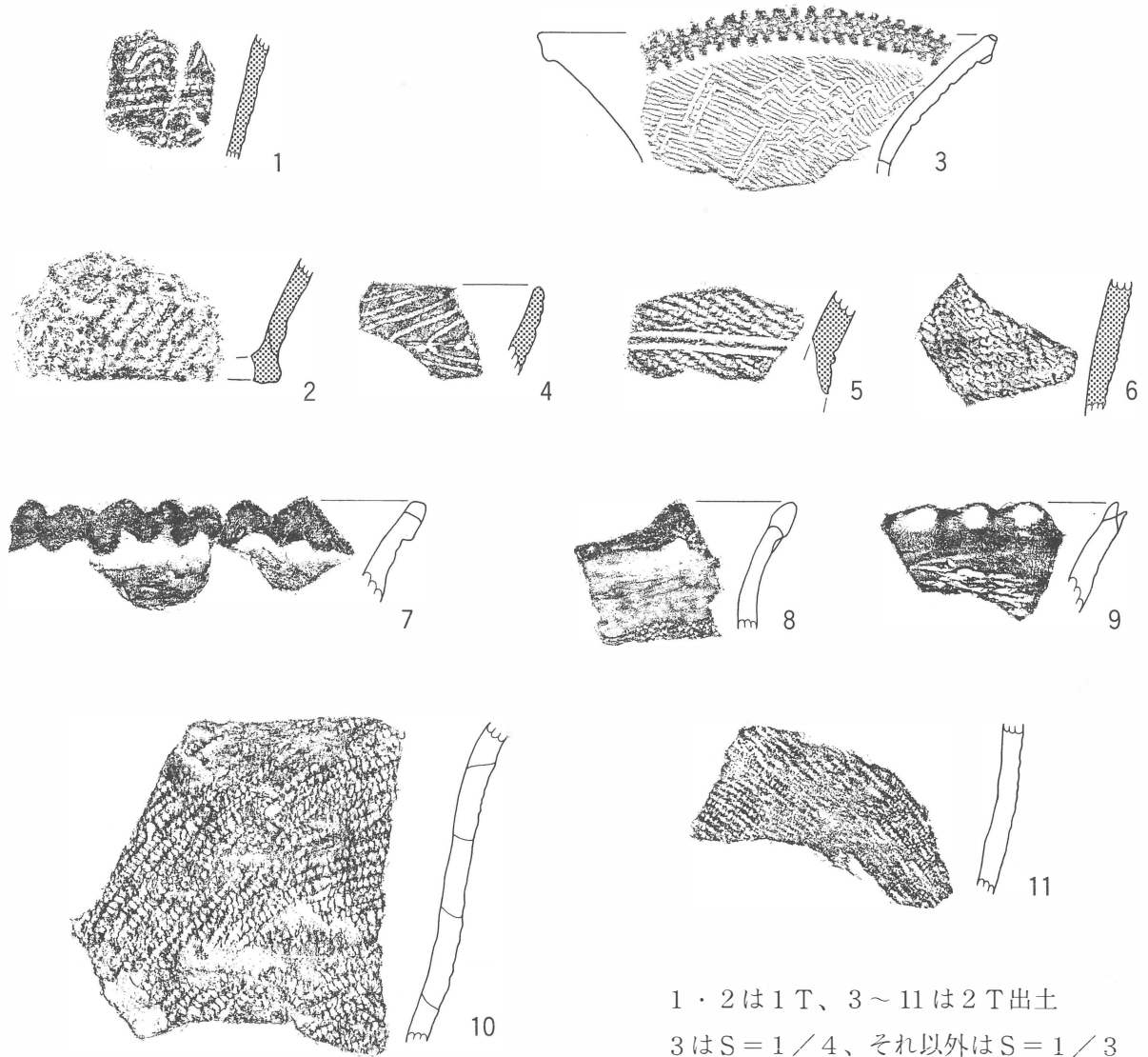


図19 北原貝塚遺跡群調査状況図 (S = 1/3000)





1・2は1T、3～11は2T出土  
3はS=1/4、それ以外はS=1/3

図20 北原貝塚遺跡群出土遺物 (S=1/4・1/3)

面から出土したものである。

出土土器は縄文前期が中心である。1・2・6が宮田Ⅲ群、4・5は大木2a式、3・7・8・10・11は大木5式に相当する。

#### 4. ま と め

平成10年の調査においてわずかな面積でありながら、砂層から縄文前期の土器が出土した。台地上で貝層が形成されていたころ、低地部でも積極的な活動がなされていたことが想定できる。また、4T～13Tにおいて遺構・遺物等がほとんど見られなかったことから、遺跡範囲は北東部で縮小でき、貝層の分布する舌状の台地を中心に低地部までを含めたものと考えられる。縄文時代の遺構等の分布としては磯坂遺跡と北原貝塚遺跡群の間に空白域が存在するとできよう。

## IV 浦尻貝塚

調査地点 小高町浦尻字南台・大塚・台ノ前・西向・小迫地内

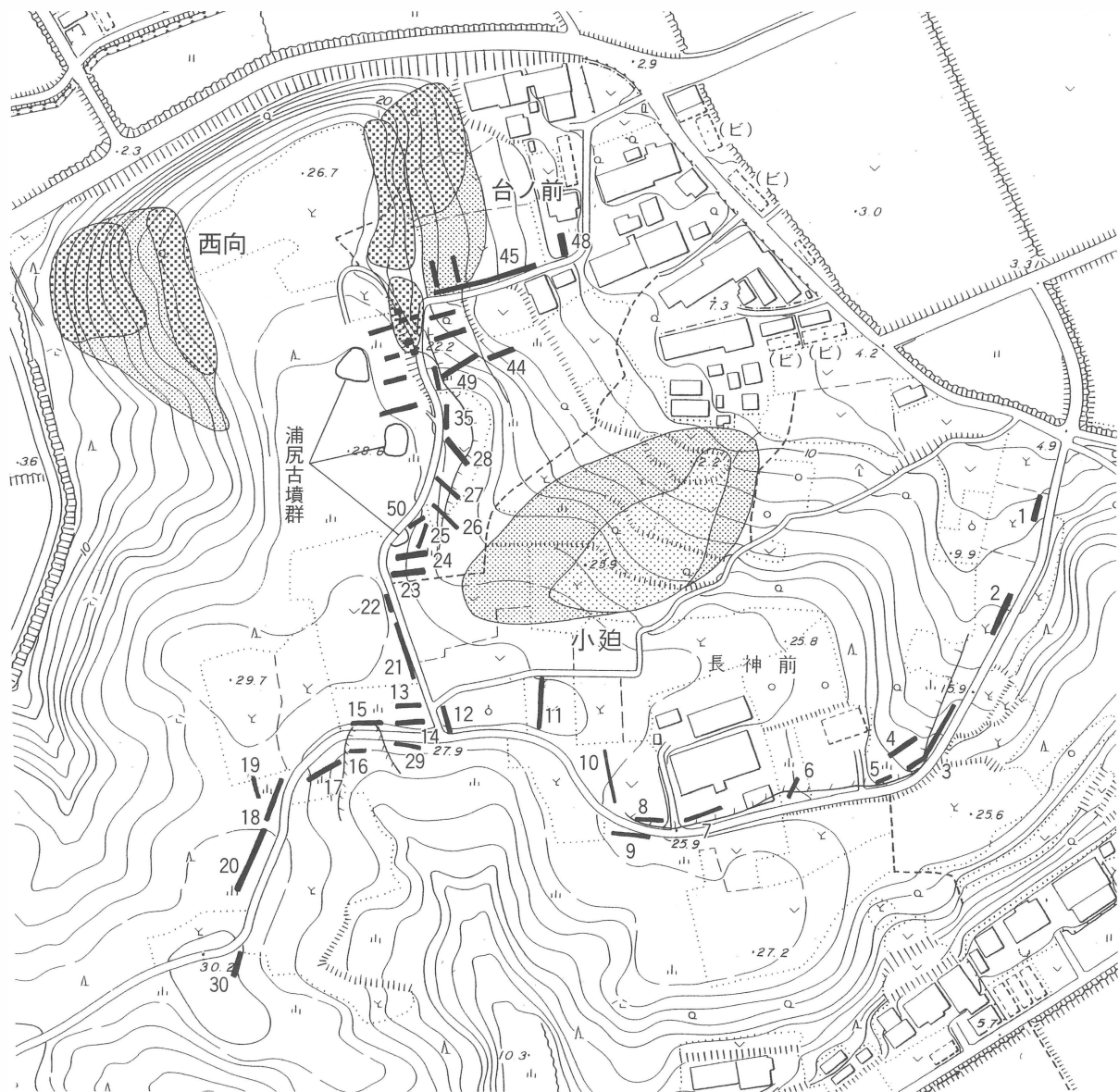
調査内容 試掘調査

調査期間 平成12年8月31日～平成12年12月20日

調査面積 約1500㎡

調査理由 町道建設

遺跡の概要 浦尻貝塚は旧井田川浦を望む標高25mを測る第3段丘に位置し、「浦尻南台貝塚遺跡群」とも言われ、その範囲には台ノ前・西向と称される貝塚、製塩土器を含む貝層をもつ小迫貝塚、3基の古墳が現存する浦尻古墳群がある。昭和40年にこの古墳群の1号墳が半壊され、刳拔舟形石棺が露出し、直刀等が出土した。昭和45年には西向貝塚で福島大学考古学研究会による発



= 貝層    
 = 土器集中分布範囲    
 = 土器分布範囲    
 番号はトレンチ番号

図21 浦尻貝塚調査状況図 (S=1/3000)

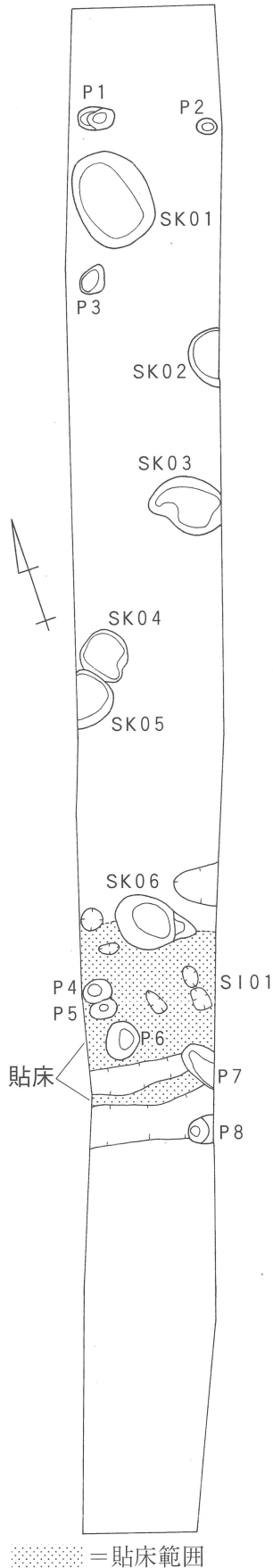


図22 11T実測図  
(S = 1/100)

掘調査が実施され、大木10式の複式炉をもつ住居址が検出されているほか、貝層の一部が確認され、大木7式を中心とした土器等が出土している。平成9年には西側の低地部で、小高町教育委員会により、ほ場整備に伴う試掘調査が実施され、縄文中～後期の土器が多数出土している。その他、古くから格好のフィールドとして数多くの表面調査が実施されており、縄文前期～晩期の土器が採集されている。また、中世の館跡の推定地でもある。

支谷を隔てて約300m東には縄文前期を中心とした北原貝塚遺跡群があり、その中間には弥生～奈良・平安時代の中林崎遺跡がある。

### 1. 調査の概要(図21)

町道予定地に沿い、トレンチを50ヶ所設定した。

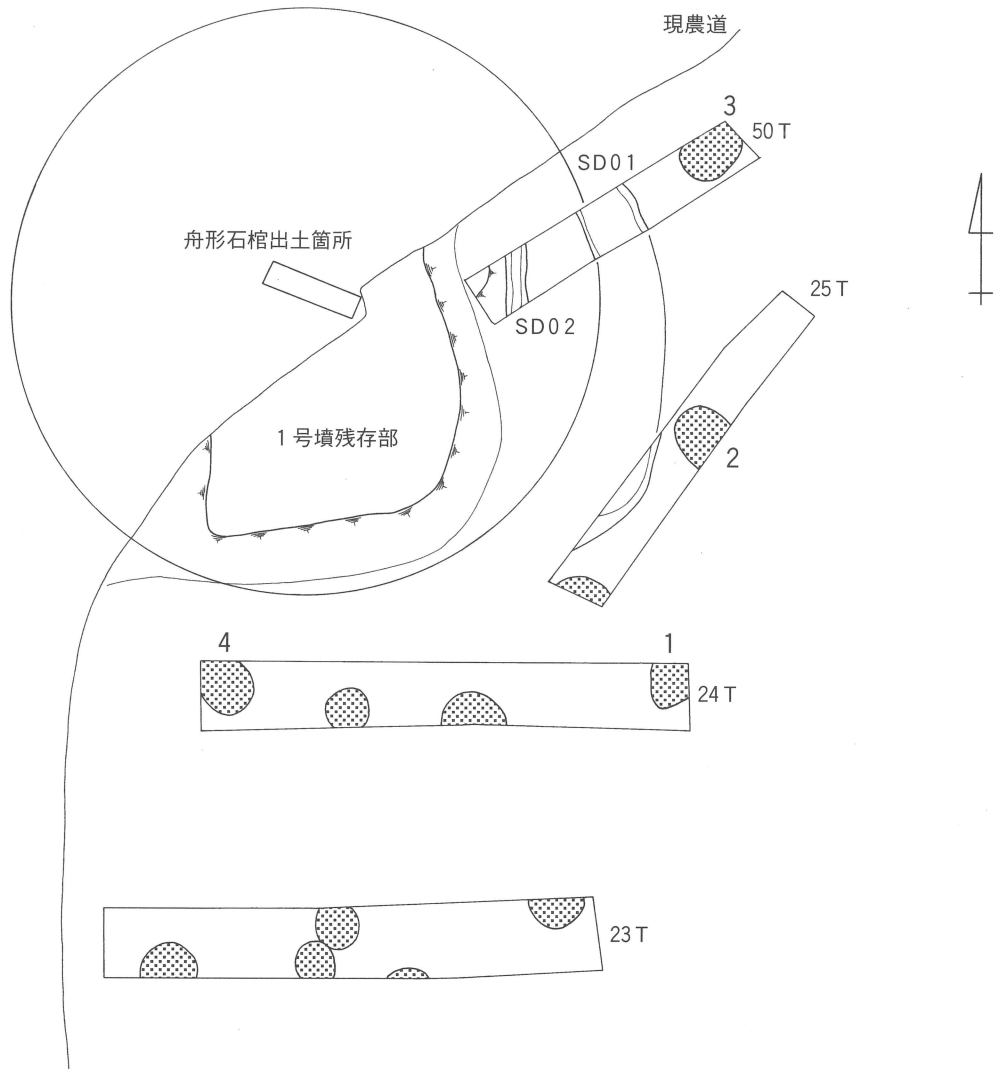
遺跡南側に位置する1～20・29・30Tでは埋没谷に相当する4～8・15Tから縄文中後期・古墳時代後期～平安時代の土器がわずかながら出土した。谷部への流れ込みと考えられる。1～3・9・10・12～14・16～20・29・30Tは削平されており、遺構・遺物は検出されなかった。11Tからは平安時代と推定される住居址と縄文時代の土坑が検出された。

台地のほぼ中央に位置する21～25・50Tからは縄文時代と推定される土坑が20基検出されたほか、24・50Tからは浦尻古墳群1号墳の周溝が確認された。台地の東谷斜面に位置する26～28Tでは谷覆土である黒色土中より、縄文中後期の土器が多数出土している。31～49Tが該当する台ノ前貝塚南端部は貝層を中心として多量の遺物が出土している。

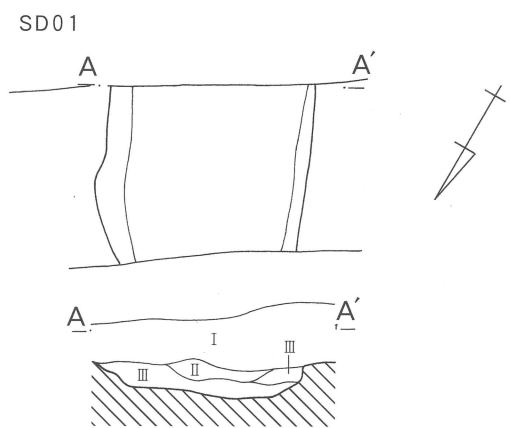
また、あわせて台地縁辺の斜面を中心に表面調査を実施した。図21に貝層等の範囲を示した。台地上の土器分布は概ね21Tより北側において認められるが図示しなかった。台ノ前の貝層は斜面上位に顕著に認められる。西向の貝層は館に伴うと推定される平場をはさみ斜面上位、下位に分かれて存在する。小迫では過去に確認されたヤマトシジミを中心とした貝層は明らかにできなかったが、製塩土器を中心とした土器が極めて多量に分布する範囲が確認された。貝層等の範囲は現在の表面での分布範囲であり、実際は二次堆積等の可能性もあることを指摘しておく。

### 2. 11T (図22)

縄文時代の土坑と平安時代の住居址が確認されている。SK01～05は褐色土を基調とした覆土をもち、径1m前後、深さ約10～15cmの浅い土坑である。縄文土器をわずかに含むことから、縄文時代の所産と考えられる。同様の覆土をもつP1～3も同時期



- 1 SK01
  - 2 SK02
  - 3 SK03
  - 4 SK04
- = 土坑



- I 表土
- II 黒褐色土 粘性・締りやや有。ローム粒少量。
- III 暗褐色土 粘性・締りやや有。ローム粒多量。
- IV 黄褐色土 粘性やや有。締り有。ロームブロック主体。

E L = 28.90m

図23 23~25・50T実測図 (S=1/200・1/60)

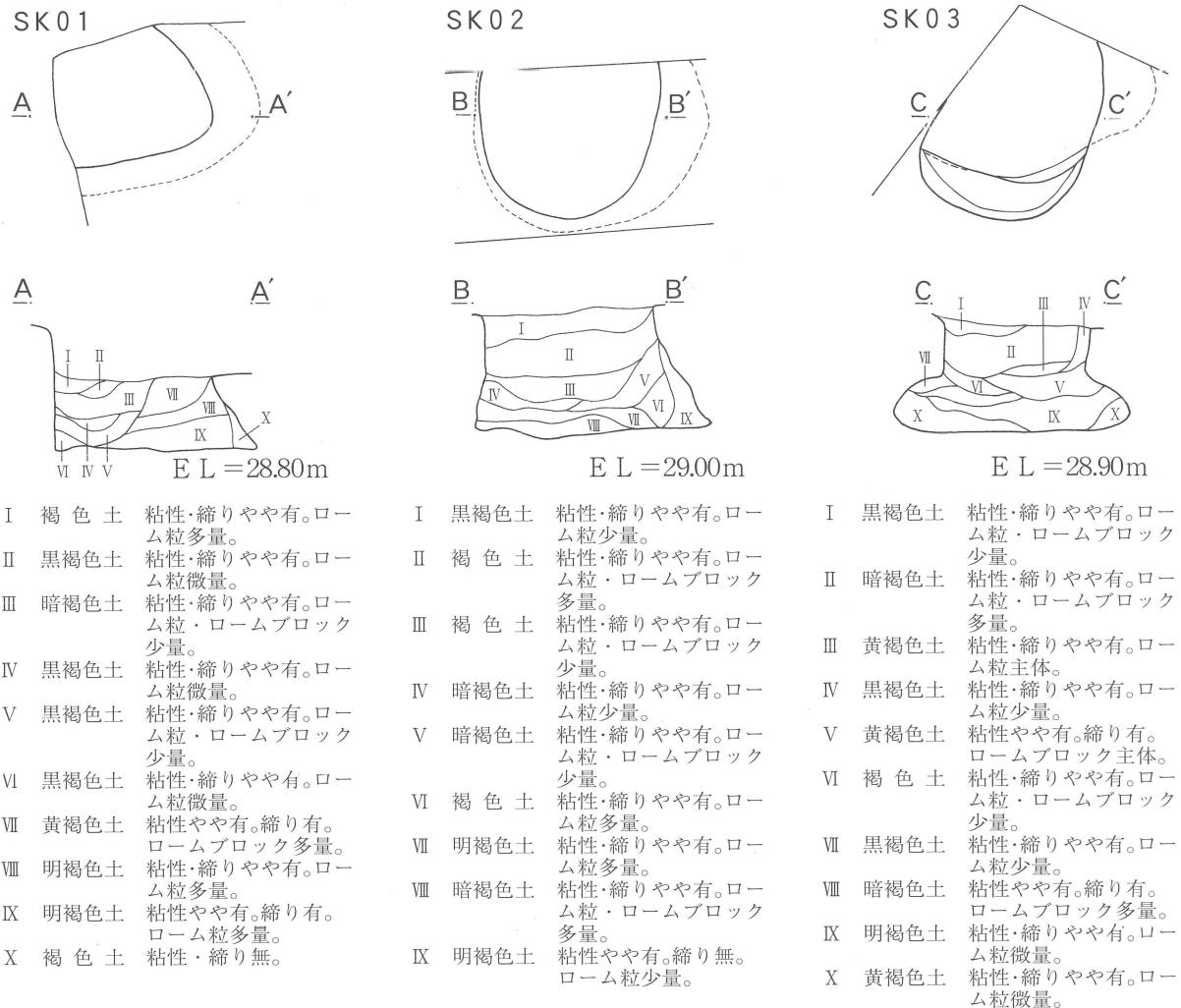


図24 SK01～03実測図 (S=1/60)

と考えられる。S I 0 1は貼床のみ検出されたものである。周辺よりいわゆるロクロ土師器が出土したことから、平安時代と推定される。黒褐色土の覆土のSK06およびP4～8は住居址に伴うものと考えられる。

### 3. 23～25T・50T (図23・24)

縄文時代の土坑と浦尻古墳群1号墳の周溝が確認されている。SD01は浦尻古墳群1号墳の周溝で50Tと25Tでわずかながら検出されている。上位は削平されているが、上端幅は1.6mを測る。断面形が墳丘側でやや急な立ち上がりを示していることと位置関係から1号墳の周溝と考えた。1号墳は径約15mを測る円墳が想定される。

縄文時代の土坑は多数検出されたがSK01～04のみ完掘した。SK01～03はいずれもフラスコ状の形態を示し、大木9・10式を伴う。SK01は堆積状況から2つの土坑が切り合っている。SK03は中位にテラスを持っている。SK04は褐色土を基調とし、覆土は上記の土坑と類似するが深さは約10cmと浅いものである。これらの土坑群について、フラスコ状のものについては貯蔵穴と推定される。形態が異なるものについては用途、時期等の差異があるものと考えられるが、縄文時代の所産と考えられる。周辺の調査成果より舌状に伸びる台地の付け根辺りを中心として土坑群が存在するものと考えられる。

## 4. 31～47T

## (1) トレンチ調査状況 (図25)

遺跡の北東部にあたる台ノ前貝塚と称されてきた周辺のトレンチで遺物・遺構が検出されたのは、31～34・37～39・41～43・46・47Tである。35・36・40・44・45Tは削平されており、遺構・遺物は検出されなかった。47Tも削平されているが、倒木痕より縄文土器がわずかに出土している。46Tは近世～近代の遺物をもつ拳大の石を敷き詰めた湧水がある溝が検出された。この溝の上位には貝層が崩落したと考えられる褐色土が見られ、前期後半～中期前半の土器とともに獣骨等が多量に出土した。

41・42・49Tからは谷を埋める黒色土(Ⅱ層)を検出した。41Tのみ深堀を実施した。縄文後期～晩期・平安時代の土器が出土し、また木組遺構であるSX01を検出した。33TはⅡ層下に遺構を確認したが、わずかな検出であり、詳細は不明である。34Tは縄文時代と考えられる土坑1基を検出した。

貝層は31・37～39・43Tで確認した。また、貝層と類似する遺物包含層は斜面上位の31・32Tで確認された。38・39・43Tでトレンチ内にサブトレンチを設けて、31Tはトレンチ全面の断ち割り調査を実施した。

図25は各トレンチの土層を大別し、模式断面図を示した。Ⅱ層は縄文後期～平安時代、Ⅲ層は縄文前期末～中期後半、Ⅳ層は縄文前期前半～後半の土器を主体的に出土している。

## (2) 貝層および遺物包含層 (図25)

貝層(Ⅲ-2)は31-43Tラインで、幅10～12m、高低差約7mの斜面貝層であることが確認された。斜面上位にある31Tの貝層は遺物包含層(Ⅲ-1層)の最下層で確認され、数cmの厚みを持つ。貝層は斜面中位にあたる38Tで約80cmの厚さを持ち、43Tでは上部削平がなされているが、30cmほどの厚みで検出され、収束する。38Tの貝層は、出土遺物から上下2層に大別され、上層から大木9～10式、下層から大木5～7a式が主に出土する。

31T遺物包含層は最大厚約1.5mを測り、大木5～7a式の土器を多量に出土する。大形破片が多く、多量の獣骨が出土し、炭化物が多く含まれることや上下土層と明らかに異なる褐色を呈していることなどから、人為的な埋土と考えられる。特に7a式が顕著にみられ、中期後半以降の土器を含まないことから、中期前半に形成されたものと考えられる。

このようなことから、31T遺物包含層は38T貝層の下層部分とほぼ同時期と考えられ、未調査部分で38T貝層上層部が遺物包含層の上位に位置することが推定される。

39Tでは貝層は斜面上位でのわずかな検出であり、ほぼこの地点で貝層が収束するものと推定される。貝層は39Tより北側の斜面に分布するものと考えられる。

また、上位の遺物包含層と異なり、黒褐色を呈する31・38・39TのⅣ層からは縄文前期後半の土器が主に出土し、中期の土器はほとんど見られない。前期前半の大木2a式も確実に存在する。31TⅣ層では10cm程度の広がりをもつ貝ブロックが検出されており、この時期の貝層も他地点で検出される可能性が指摘できる。

ここでみられた貝層はアサリを中心とし、ハマグリ・オキシジミ・マガキ・オオノガイ等が認められる。獣骨・魚骨が多量に含まれ、炭化した種子なども認められる。遺物としては土器の他に糞石・貝輪(アカガイ・アカニシ製)・貝刃(ウバガイ?製)・土製珠状耳飾等が出土している。

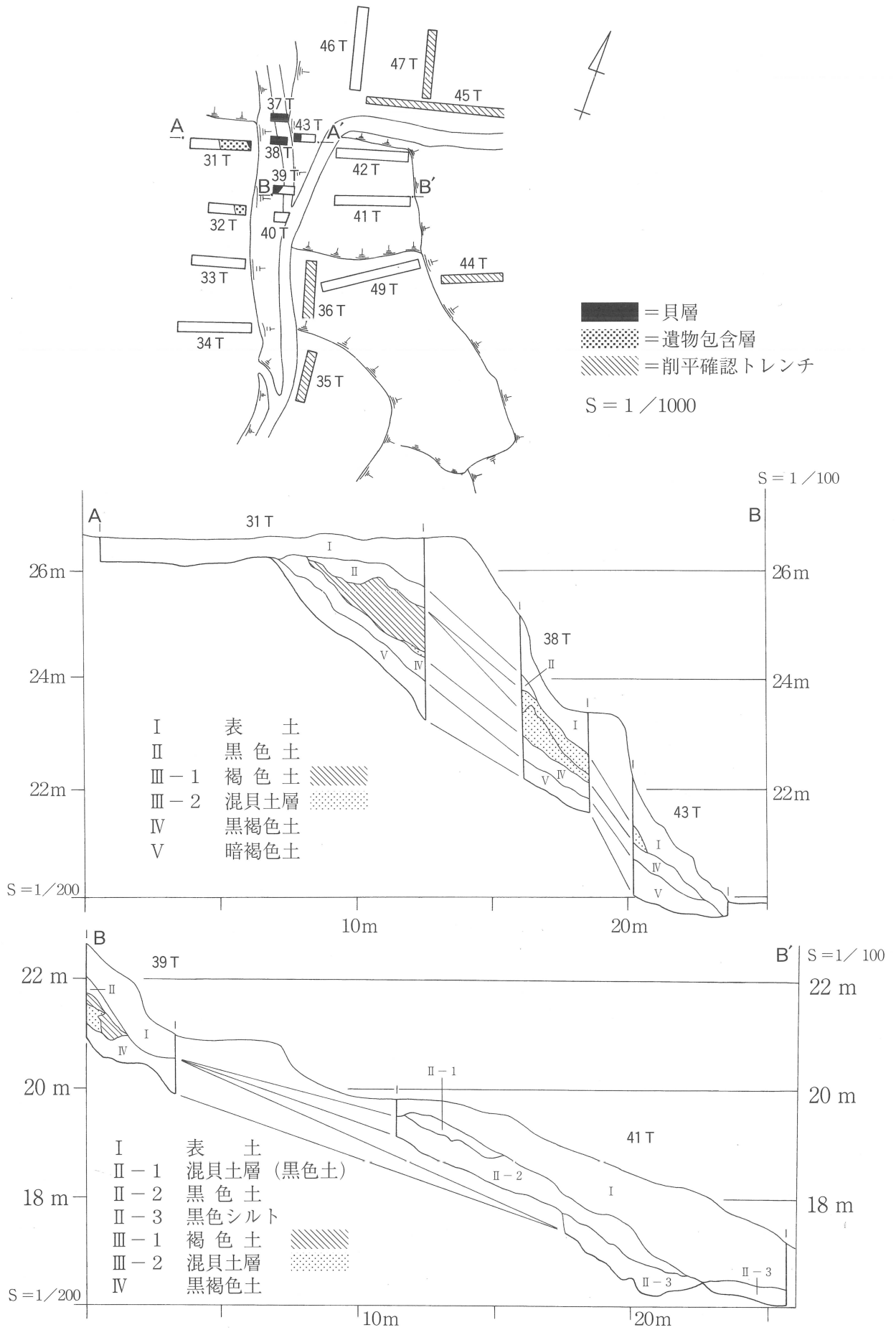
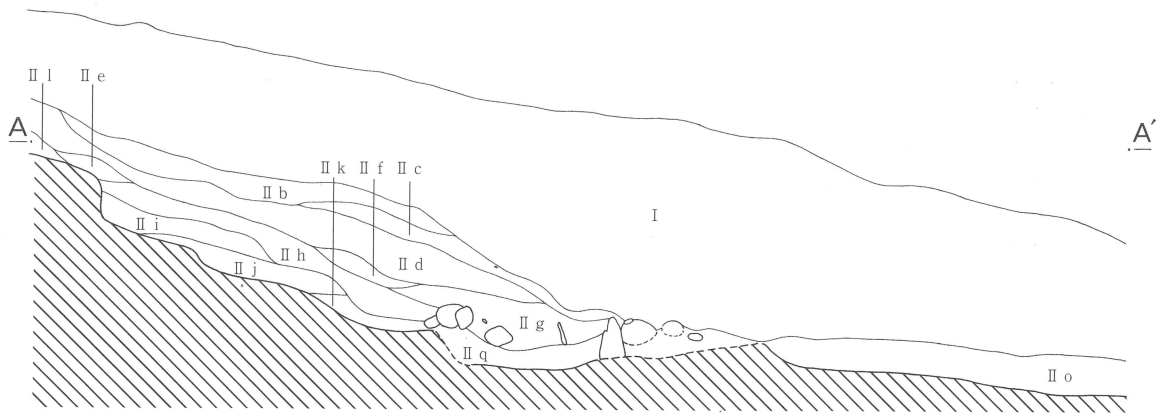
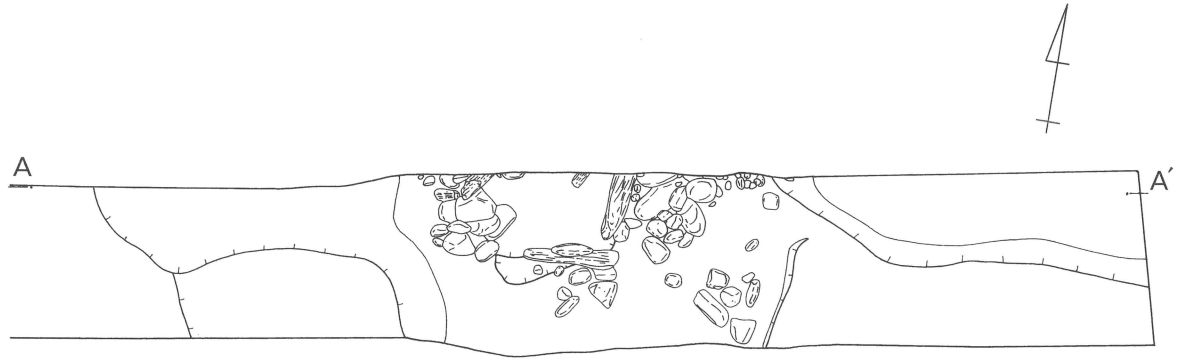
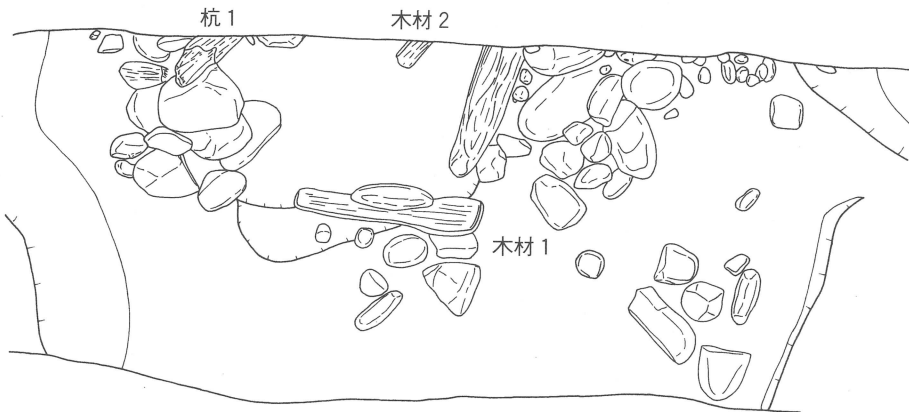


図25 台ノ前貝塚調査状況図・断面模式図 (S = 1 / 1000 · 1 / 200 × 1 / 100)



E L = 18.00m

S = 1 / 60



S = 1 / 30

- |      |        |                |      |         |           |
|------|--------|----------------|------|---------|-----------|
| I    | 表土     |                | II h | 黒色砂質シルト | 粘土ブロック少量。 |
| II b | 黒灰色土   | 小礫少量。          | II i | 黒色シルト   | 粘土ブロック少量。 |
| II c | 黒色土    | 小礫少量。          | II j | 黒色シルト   | 粘土ブロック多量。 |
| II d | 暗黒褐色土  | 小礫多量。          | II k | 黄白色粘土   | 粘土ブロック主体。 |
| II e | 黒色土    | 小礫微量。          | II l | 灰黒褐色土   | 小石・小礫微量。  |
| II f | 暗黒褐色土  | 小礫微量。粘土ブロック多量。 | II o | 黒褐色シルト  | 小石・小礫微量。  |
| II g | 黒褐色シルト | 小礫微量。有機質遺物多量。  | II q | 黒色シルト   | 小石・微量。    |

図26 41 T実測図 (S = 1 / 60 · 1 / 30)



## (3) 41T〔SX01〕(図25・26)

II層は斜面上位の31・32・38・39Tでは縄文中期後半～後期の土器が出土している。斜面下位に位置する41Tでは縄文後期～晩期および平安時代の土師器・須恵器が出土する。特に縄文後期前半に相当する土器が主体的である。41T II-1層(図25)は混貝土層である。41Tの掘削は斜面上位では暗褐色土、谷底に位置する部分では地山と考えられる青灰色粘土まで行った。斜面上位の暗褐色土はその上層から縄文中期の土器が認められる。

41Tからは木組遺構であるSX01が検出された。湧水点を掘削し、木組に導水するように溝があり、木組内に水が溜まる構造である。遺構周辺は平場をつくり、人頭大の石が散乱している。木組は導水部に石を組み杭で補強し、裏込め石を伴って板材(南側)と炭化材(東側)で囲う升状の掘り込みである。深さは約30cmである。水量は豊富であり、調査中、湧水が途切れることはなかった。

調査当初、最下層である図25 II-3層(図26 II h以下)からは平安時代の遺物が含まれず、縄文時代後期前半の土器を出土することから、縄文時代の所産と考えた。しかし、放射性炭素年代測定法により、SX01の構築材を分析したところ、中世～近世の年代が得られたことにより、SX01は中世～近世のものと考えられる。

41T II層はSX01が利用されなくなった後、近世～近代にかけて堆積したものと考えられ、41T II-1層(図25)は上位貝層の二次堆積と考えられる。

## 5. ま と め

今回、得られた資料は出土遺物で天箱約30箱、貝類は土嚢袋約150袋である。これらの遺物の報告は、本報告では時間的な制約もあり、内容も多岐にわたることから見送ることとした。また、各トレンチの詳細も機会を改めて報告するものとした。

今回の調査で特筆されるのは浦尻貝塚の「台ノ前貝塚」と称されてきた貝層の内容が初めて具体的に捉えることができたことである。現段階では、縄文前期後半からの形成が伺え、中期前半を中心として、中期後半まで存続していると考えている。また、その違いが貝の有無だけと言える遺物包含層が貝層と同一地点で確認されたことは重要な成果であろう。

集落の縁辺部には貯蔵穴と推定される土坑群が存在することが予測され、浦尻貝塚の集落構造の一端を示すものといえる。また、今回調査した部分の南側にあたる地区では遺跡が主体的に分布していないと考えられ、浦尻貝塚の範囲をある程度把握することができよう。

その他、流れ込みではあるが、41Tを中心として各谷部のトレンチにおいては縄文後期前半の土器が多く出土している。該期の貝層・遺構は未検出だが、過去の表採資料にも多くあることから、この台地上に該期の何らかの生活痕跡が認められる可能性が高い。製塩土器が出土し、晩期に想定される「小迫貝塚」を含め、浦尻貝塚が縄文前期以後の多様な情報を内包する遺跡であると改めて位置づけられた。

縄文時代以外では、浦尻古墳群1号墳の周溝、平安時代の住居址が認められた。また、谷部に構築された木組遺構であるSX01は中世～近世のものとして位置付けられた。この台地上に「館跡」が推定されており、中世の「館跡」に伴う可能性が指摘できよう。

## V 加賀後貝塚

調査地点	小高町上浦字加賀後
調査内容	試掘調査
調査期間	平成11年12月13日～平成12年2月1日
調査面積	約310m <sup>2</sup>
調査理由	県営ほ場整備

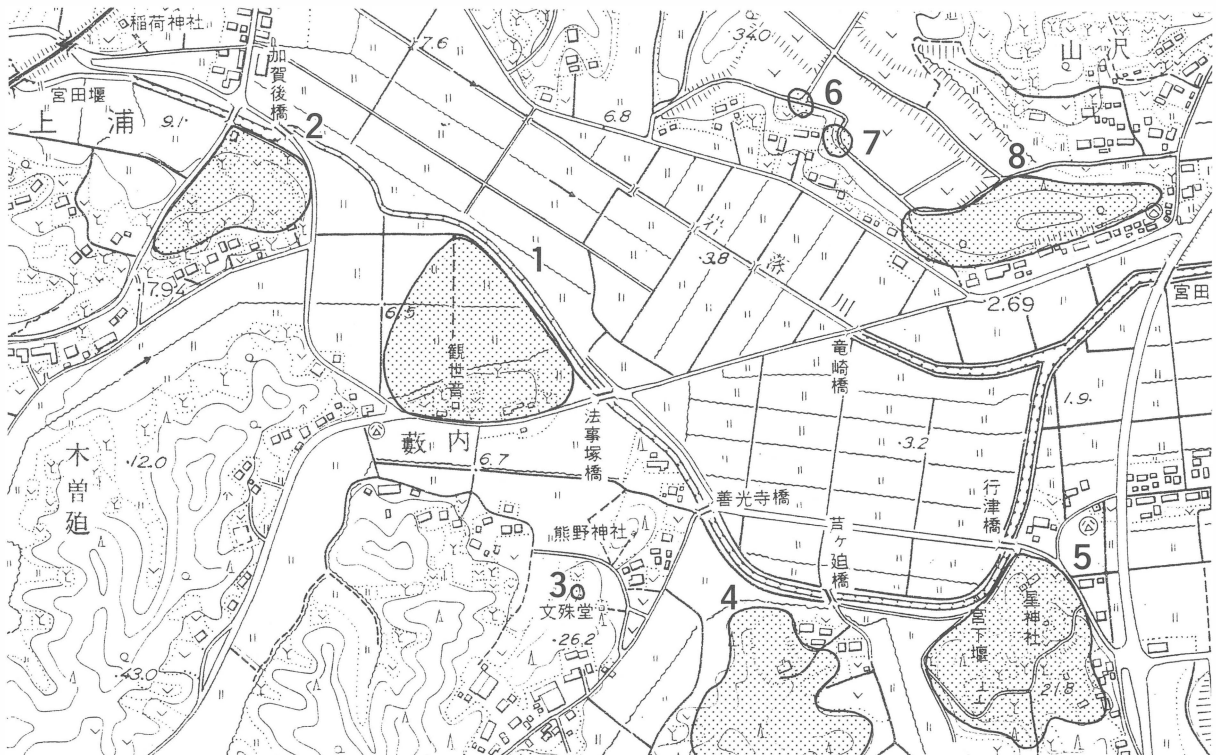
**遺跡の概要** 加賀後貝塚は現海岸線より約5km 内陸の宮田川沖積低地の奥部にあり、その範囲は独立した低位段丘および低地部を含めたものである。低位段丘は標高10m前後、低地部は標高5m前後を測る。東に250m離れた丘陵上には当遺跡を見下ろすように学史上著名な縄文時代前期の宮田貝塚がある。

平成6年に小高町教育委員会により河川改修に伴う試掘調査が実施されている。

**調査方法** 平成6年に実施された試掘調査を補う形でトレンチを設定し、実施した。水田に所在するため、耕作上の問題により、掘削は80cm以下にとどめた。それより下位の層位を確認するため、民間調査会社に委託し、ボーリング調査を実施した。

### 1. 平成6年の調査 (図28・29)

1～9Tが相当する。2Tで深堀を実施している。遺物が比較的多く出土しており、主にⅡ・Ⅲ層が平安時代、Ⅳ・Ⅴ層に弥生時代中期後半、Ⅵ層以下に縄文時代前期前半の遺物が含まれる。また、南側



- 1 加賀後貝塚 2 宮田貝塚 3 文殊堂古墳 4 上浦館跡 5 鹿島館遺跡 6 小泉横穴墓群  
7 小泉古墳 8 山沢古墳群 (山沢館跡・表横穴横穴墓群)

図27 加賀後遺跡位置図 (S=1/10000)

の段丘より地表下1.4 mのところ、イボキサゴを中心とした貝層（Ⅶb層）がわずかに検出された。

## 2. 平成11年のトレンチ調査（図28）

トレンチ番号は平成6年の続き番号でつけた。10～20Tが該当する。平成6年の調査を基に層位を求めた。19・20Tは削平されており、表土下に地山の黄白色粘土層が確認されるだけである。

13～15Tで地表下20～50 cm に平安時代の遺物包含層であるⅡ・Ⅲ層が検出された。12T以北、16T以西では検出されなかった。よって、平安時代の遺物包含層は1～9・13～15Tの位置する範囲に存在するものと考えられる。

15～18Tでは地表下50～80 cm に泥炭層が検出された。弥生時代の遺物包含層であるⅣ層に対応するものと考えられるが、遺物はまったく出土しなかった。西側の15T以西には弥生時代の遺物分布は広がらないものと考えられる。

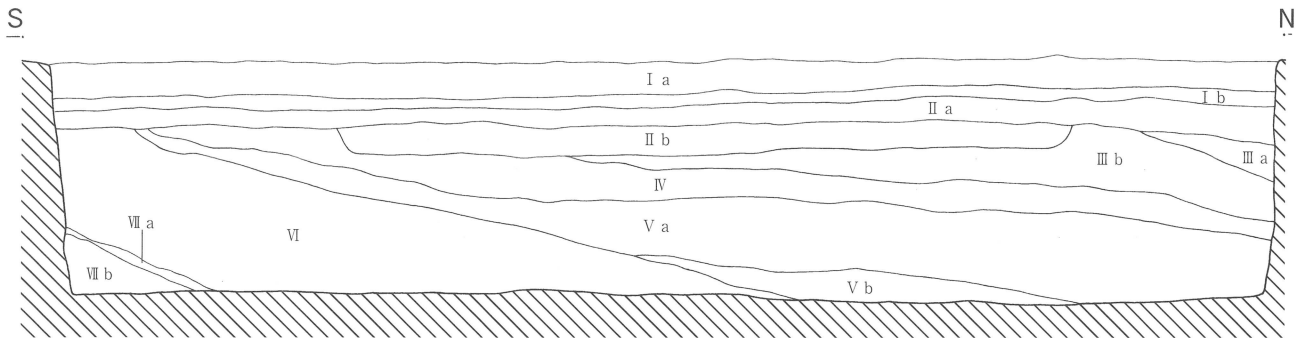
## 3. 平成11年のボーリング調査（図28）

貝層の有無および1 m以上の深度の層位を確認するため、ボーリング調査を実施した。調査は8T以東の段丘側を中心に実施した。

詳細は後述するが、2Tで検出された貝層は低地部に広がりを見せず、2T付近に局所的に存在す



■ = 平成11年試掘調査    ● = 平成6年試掘調査    ○数字 = ボーリング調査地点  
 図28 加賀後貝塚調査状況図 (S = 1/2000)



- |       |                      |       |             |
|-------|----------------------|-------|-------------|
| I a   | 褐色シルト (表土)           | I b   | 暗褐色シルト (床土) |
| II a  | 青白色砂質シルト             | II b  | 青灰色砂質シルト    |
| III a | 暗黄褐色シルト              | III b | 青白色砂質シルト    |
| IV    | 暗黒褐色シルト (有機質遺物多く含む。) |       |             |
| V a   | 青白色砂質シルト             | V b   | 青灰色砂質シルト    |
| VI    | 黒色シルト                |       |             |
| VII a | 黒色シルト (破砕貝を含む。)      | VII b | 貝層          |

図29 2 T断面図 (S=1/60)

ることが推定された。縄文時代前期の遺物包含層であるVI層はボーリング調査では1.2 m以下に存在し、西に行くに従い、流水の影響により層位が複雑となり、トレンチで捉えた層位に明確に対応することが難しくなっていた。VI層下位には緑灰色シルト層 (VIII層) が検出され、これもまた流水の影響を受けていると考えられた。VIII層内からは繊維を含有する縄文土器の小片が確認されており、深いものは地表下3.9 mからの出土である。

#### 4. 出土遺物(図30・31)

平成11年度の調査では縄文土器と土師器がわずかながら出土したが、図示できるものは得られなかった。平成6年度の2 T出土遺物が今回調査の層位確定基準資料となったため、報告しておく。

図30は花積下層末～宮田Ⅲ群土器を中心とした時期に相当する。貝層より1・10・18が、VI層より2～8・11～15・17・19・21～23、それより上位から9・16・20が出土している。

図31の1～18は弥生時代中期後半の土器である。1・3・5・8～12・14・18がIV層からの出土で、その他はそれより上位からの出土である。桜井式に相当するが、2は一本描ヘラ描沈線であり、胴部下端区画も喪失していることから桜井式に後続するとされる天神原式相当であろう。19～21はロクロ高台杯 (椀) である。10世紀代の所産と考えられる。

#### 5. ま と め

平成6年に検出された貝層は前期前半の所産であり、隣接する宮田貝塚と同時期のものと考えられる。今回の調査により、貝層は低地部において局所的にしか存在せず、低位段丘斜面に主たる分布域が想定される。また、同時期の遺物包含層に対応する層が地表下1.2 m以下に厚みをもって存在することが確認された。堆積時期は確実ではないが、これらは流水の影響を受け堆積したのと考えられる。海進海退を含めた具体的な古環境変遷はボーリングのコアを今後、自然科学分析することにより捉えられよう。

また、弥生時代および平安時代の包含層は分布範囲を大まかに捉えることができた。これらの時期の低地部での出土は貴重であり、水田跡も含めた低地部への活動痕跡を示すものと考えられる。



图30 加賀後貝塚出土遺物① (S = 1/4 · 1/3)

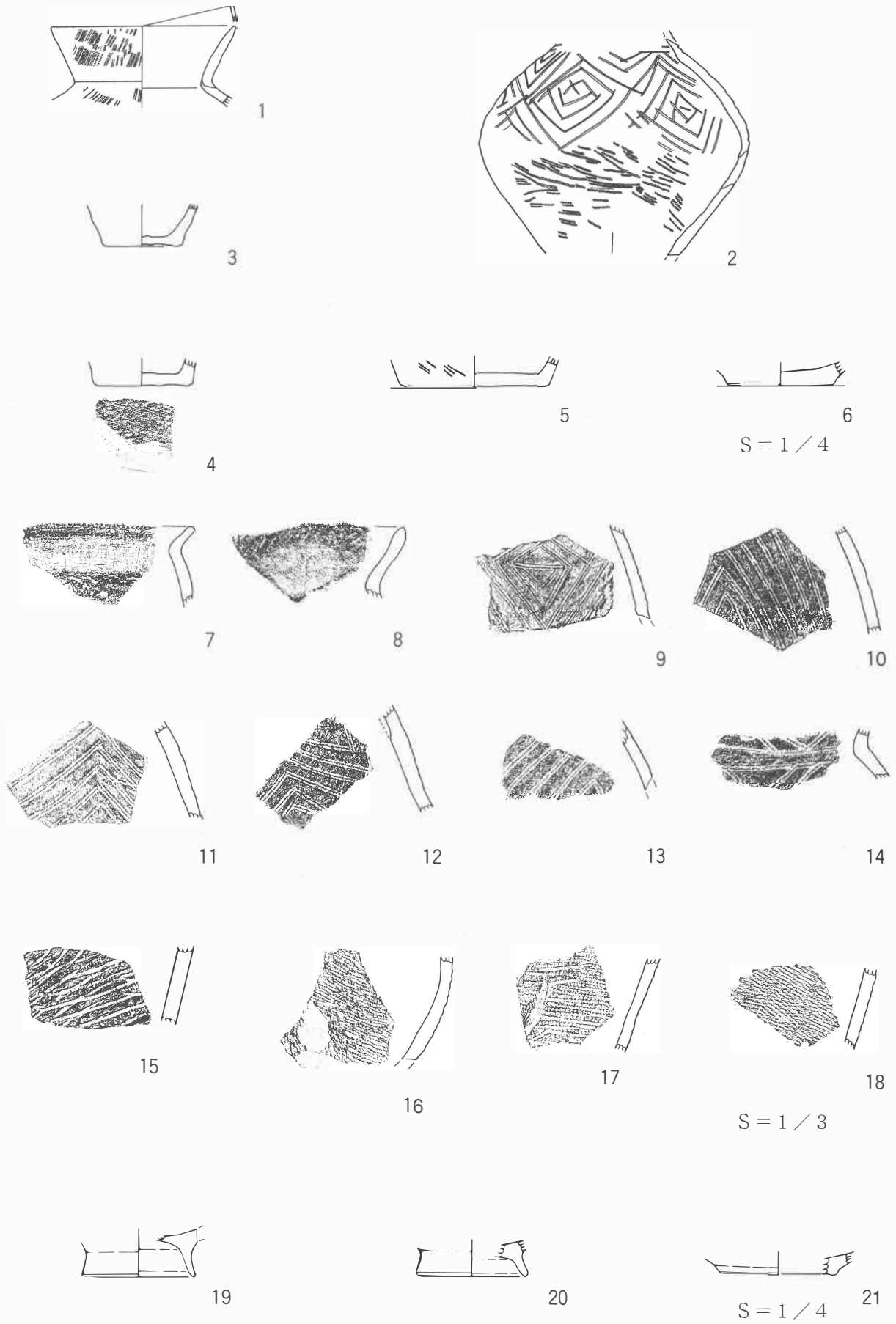


図31 加賀後貝塚出土遺物② (S=1/4・1/3)

## VI 東広畑B遺跡

調査地点	小高町小高字東広畑
調査内容	試掘調査
調査期間	平成11年10月6日～平成11年10月7日
調査面積	約80m <sup>2</sup>
調査理由	個人住宅

**遺跡の概要** 東広畑B遺跡は小高川を南に望む下位段丘上に位置する。遺跡は谷に向かって南側に緩やかに傾斜しており、標高16～20mを測る。平成6年度に表面調査が実施され、平安時代の土師器が散布することから、新たに登録された遺跡である。

谷を隔てた同一段丘の平坦面には東広畑A遺跡があり、縄文早期、弥生中期後半、古墳～奈良・平安時代までの土器が表採されている。

### 1. これまでの調査（図34）

平成6年に小高町教育委員会により試掘調査が実施されている。主に8・10・17・19T等で遺物が出土しており、対象地の南側の7～10・13～19Tを中心に要保存対象地区が捉えられた。奈良・平安時代の遺物が多く出土している。

平成8年には町道工事に伴い、小高町教育委員会による発掘調査が2地点で実施された。第1地点では、平安時代の住居址2軒と土坑4基検出されている。住居址からは鉄滓が出土している。第2地点では古墳時代前期の住居址が1軒、時期不明の土坑が4基検出された。該期の住居址は小高町内で初めての検出である。

### 2. 平成11年の試掘調査（図34）

開発箇所が平成6年の調査の対象外であったため、試掘調査を実施した。トレンチ番号は平成6年の調査の通し番号でつけた。20～23Tが該当する。

これらのトレンチはすべて削平されており、遺構・遺物は全く検出されなかった。

### 3. ま と め

東広畑B遺跡はこれまでの調査で古墳・平安時代の集落遺跡であることが確認されていた。今回の調査は谷に向かう傾斜面の上位に該当し、遺構等は検出されなかった。平成6年の調査結果でも傾斜面上位は同様の結果が得られている。畑等の耕作による影響も考えられ、一概にいえないが、これらの調査結果を踏まえ、東広畑B遺跡は傾斜面の下位に主体的な遺構の分布があるものと考えられる。



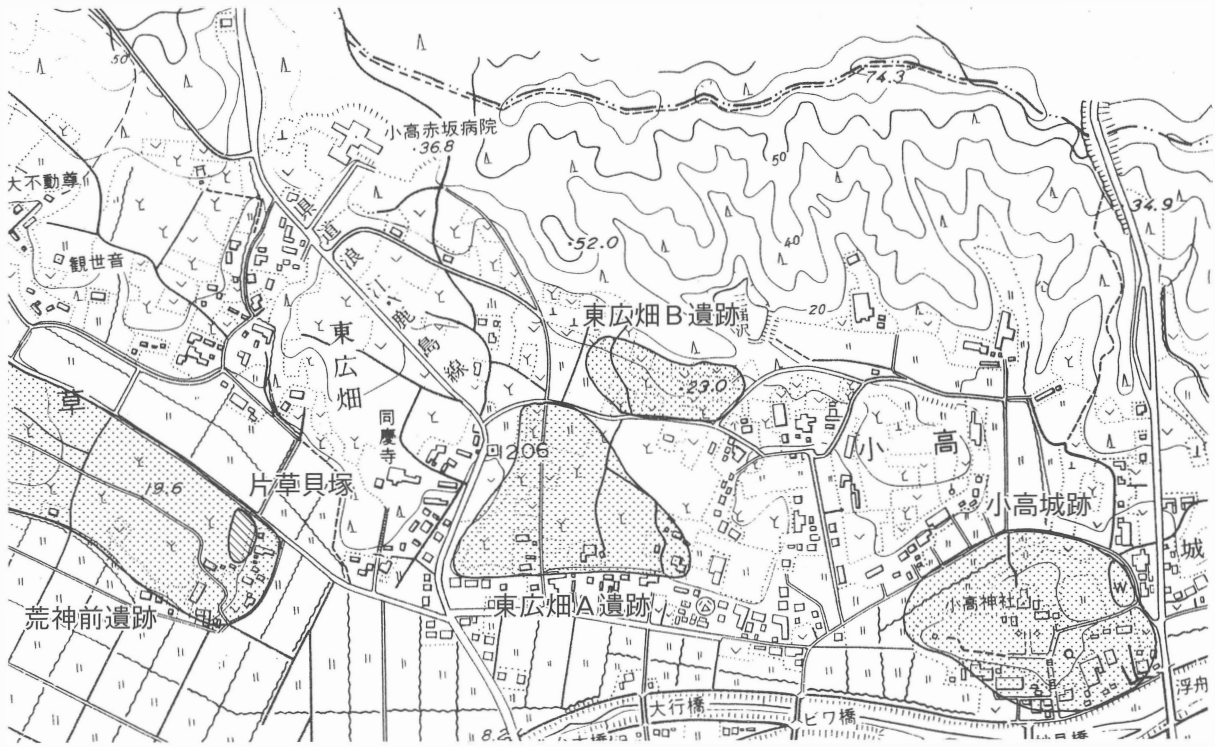


図32 東広畑B遺跡位置図 (S = 1 / 10000)



図33 東広畑B遺跡位置図 (S = 1 / 3000)



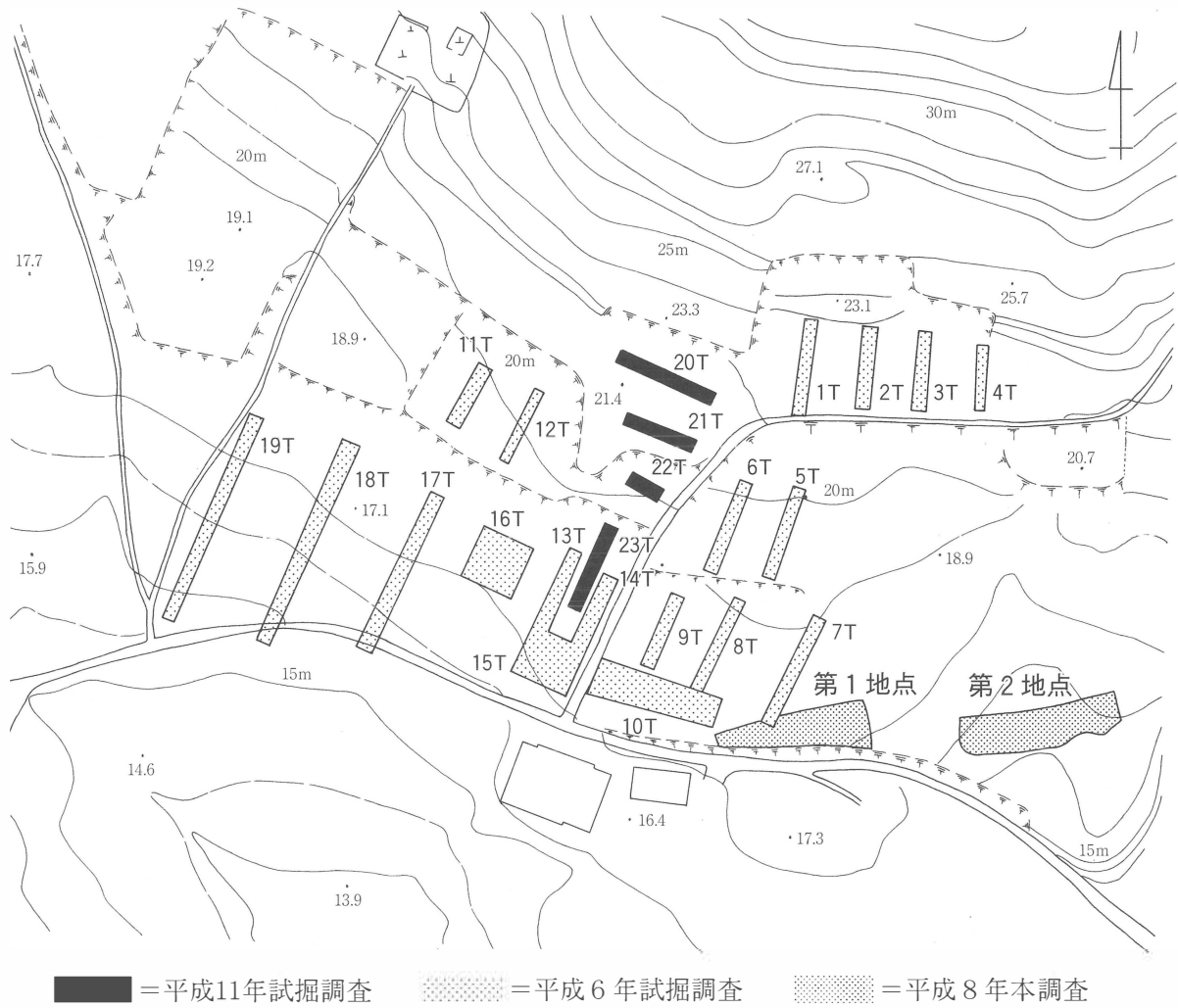


図34 東広畑B遺跡調査状況図 (S = 1 / 1000)

## VII 角部内南台遺跡

調査地点	小高町角部内字雁北・南台
調査内容	試掘調査
調査期間	平成11年7月6日～平成11年10月7日
調査面積	約385m <sup>2</sup>
調査理由	民間研修センター建設
遺跡の概要	角部内南台遺跡は小高川南岸の中位段丘上に位置し、現海岸線から200m離れている。段丘上は標高25mを測り、小字名によって北側を角部内北台遺跡、南側を角部内南台遺跡と称する。角部内南台遺跡には角部内南台南（東）貝塚があり、昭和61年に小高町教育委員会により発掘調査が実施され、縄文中期のブロック貝層を検出している。この貝層は縄文前～中期に主体があると推定されている。

### 1. 調査内容(図36)

今回の開発にあたり、表面調査を実施したところ、奈良・平安時代の遺物が確認され、本遺跡の範囲は西側に拡大した。調査対象地は拡大した本遺跡の西側部及びその縁辺部にあたる。表面調査遺物検出地点を中心にトレンチを設定し、実施した。

遺物が出土したトレンチは1・7・10・19～21Tである。段丘上平坦面は削平されており、遺構・遺物が出検されなかったが、埋没谷の覆土から多くの奈良・平安時代の土師器および鉄滓が出土した。また、19Tでは土師器甕を伴う土坑が検出された。これらのことから、谷部を中心として要保存対象区が設定された。

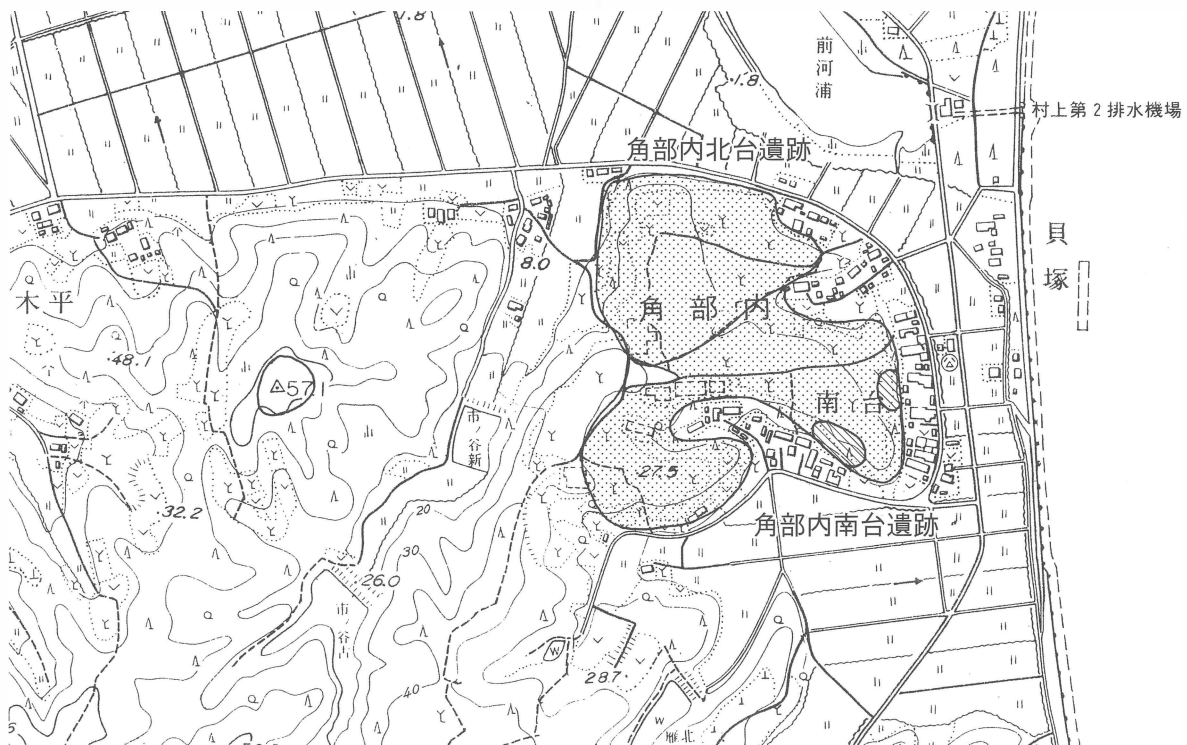


図35 角部内南台遺跡位置図 (S = 1 / 10000)

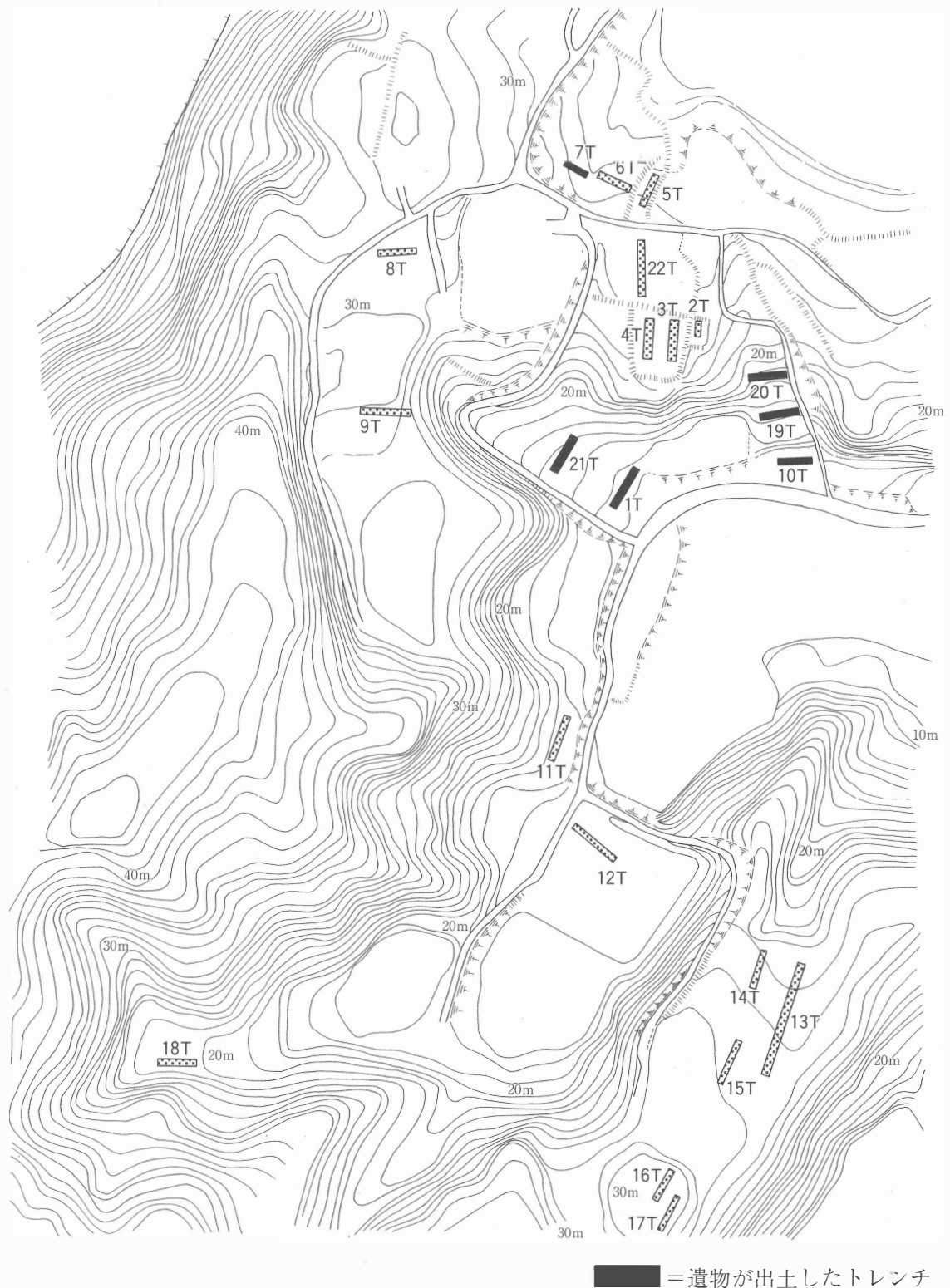


図36 角部内南台遺跡調査状況図 (S = 1 / 2000)

## 2. ま と め

今回の調査により、角部内南台遺跡の西側は谷部を中心として遺物が分布することが明らかとなった。段丘上は大部分が既に削平されていると考えられる。なお、この調査結果を踏まえ、平成11年10月～1月にかけて、小高町教育委員会により発掘調査が実施されている。

## VIII 大田和広畑遺跡

調査地点	小高町金谷字作迫
調査内容	試掘調査
調査期間	平成12年2月23日
調査面積	約140m <sup>2</sup>
調査理由	町道拡幅工事

**遺跡の概要** 大田和広畑遺跡は小高川とその支流川房川の合流地点を南に望む中位段丘（第3段丘）上に位置する。遺跡は東にむかって緩やかに傾斜する上位面（標高50～60m）と南西部の南側に傾斜する下位面（標高45～50m）が存在する。

小高町埋蔵文化財調査カード（昭和46年 調査員 竹島国基）には、現遺跡の下位面を遺跡の範囲としており、大木7b・9式および堀ノ内式が表採されたと記されている。

平成9年に常磐道延伸に伴う福島県文化センターによる表面調査が実施され、遺跡範囲が拡大した。大木8b～10・網取式が表採された。

このように本遺跡は本格的な発掘調査は実施されていないが、縄文時代中後期の遺跡と考えられている。

## 1. 調査内容(図36)

開発区域を中心にトレンチを4本設定し、実施した。いずれのトレンチからも遺構遺物はまったく検出されなかった。

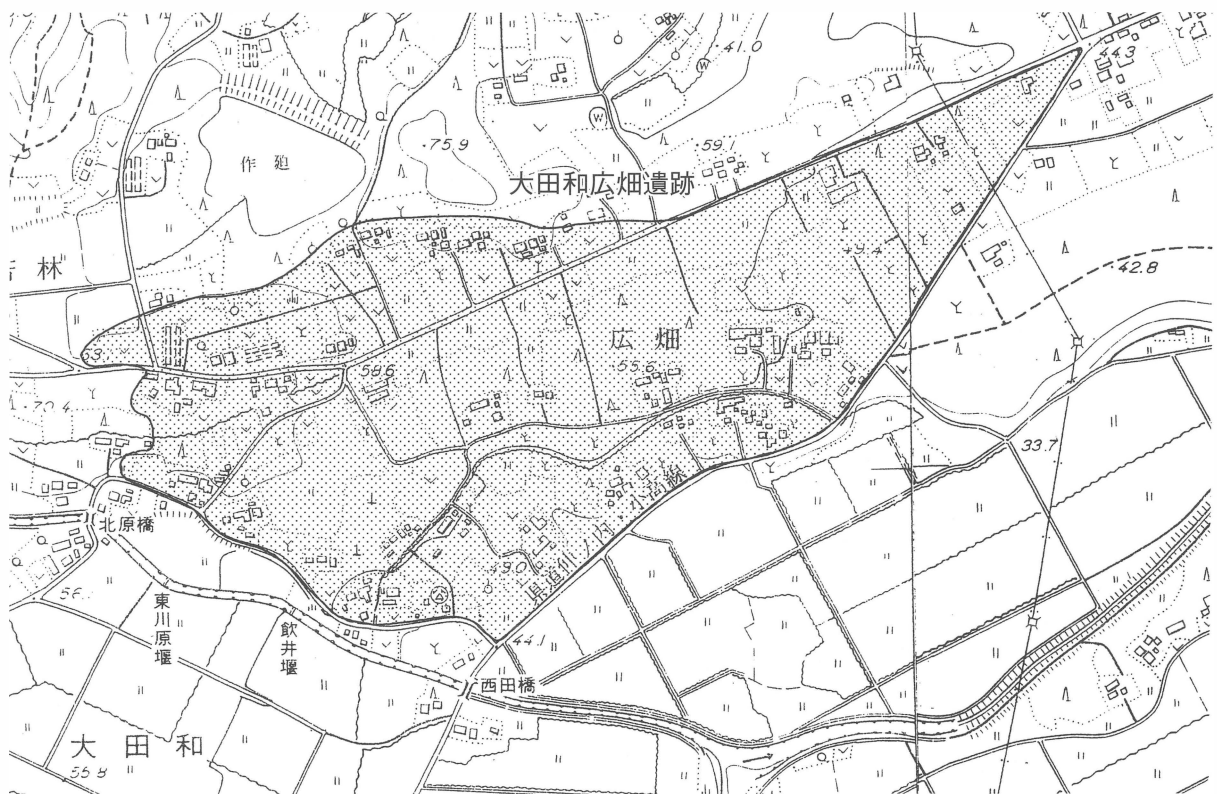


図37 大田和広畑遺跡位置図 (S = 1 / 10000)

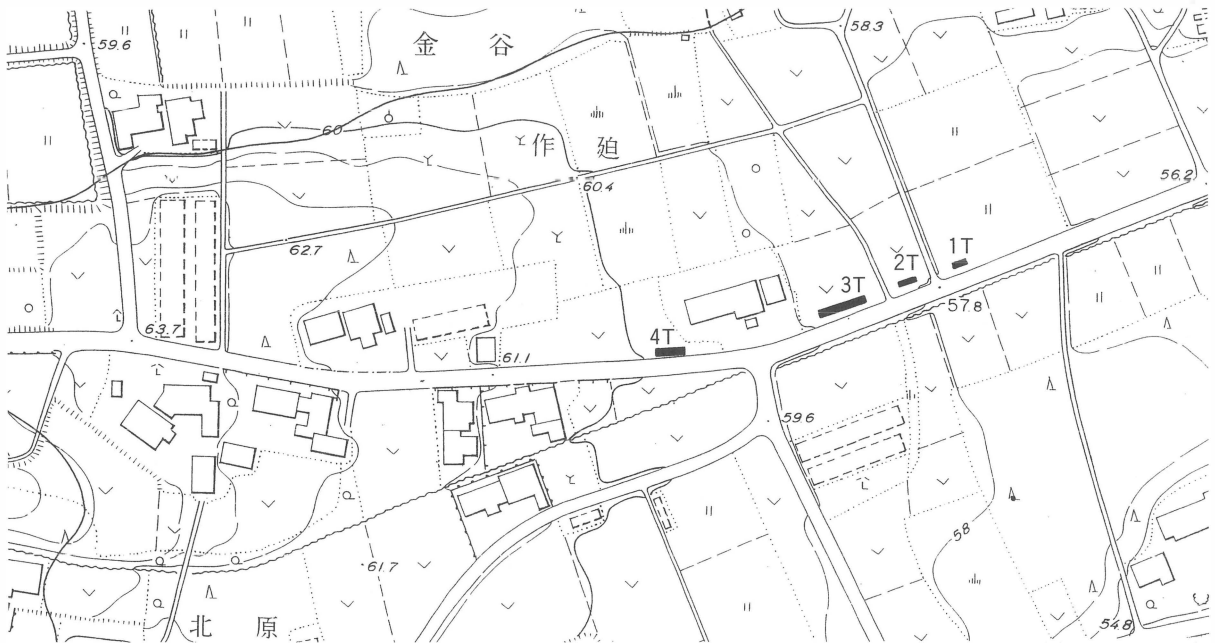


図38 大田和広畑遺跡調査状況図 (S = 1 / 3000)

## 2. ま と め

今回の調査はわずかな調査面積であり、遺跡の内容を把握することはできなかった。本調査区周辺にも遺物がわずかながら表採されることから、本調査区周辺にも遺構等が検出される可能性は残る。

当町内陸部における縄文時代の中期遺跡は本遺跡の2 km 北西にある大富西畑遺跡で住居址が確認されている。しかし、当町では中後期の遺跡数は早期～前期にくらべ減少していることが指摘できる。また、海浜部の丘陵上にある貝塚に伴う遺跡は前期以後ほぼ同一地点で継続して営まれるが、内陸部のものは前期と中後期の遺跡は分布を異にするようである。

このようなことから本遺跡は当地域の縄文時代を考える上で重要な遺跡であると考えられる。

### I～Ⅷ参考文献

- |            |      |  |
|------------|------|--|
| 小高町        | 1975 | 「小高町史」   |
| 小高町教育委員会   | 1975 | 「宮田貝塚」   |
| 小高町教育委員会   | 1988 | 「角部内南台東貝塚」                                       |
| 竹島国基編      | 1992 | 「桜井」 竹島コレクション考古図録第3集                             |
| 原町市教育委員会   | 2000 | 「荷渡古墳群」 原町市埋蔵文化財調査報告第23集                         |
| 福島県教育委員会   | 1991 | 「福島県の貝塚」   |
| 福島県教育委員会   | 1991 | 「請戸川地区遺跡発掘調査報告Ⅰ 大富西畑遺跡 四ツ栗遺跡」<br>福島県文化財調査報告第252集 |
| 福島県教育委員会   | 1995 | 「請戸川地区遺跡発掘調査報告Ⅲ 萩原遺跡 栗成沢遺跡」<br>福島県文化財調査報告第323集   |
| 福島県教育委員会   | 1998 | 「福島県内遺跡分布調査報告4」 福島県文化財調査報告第342集                  |
| 福島大学考古学研究会 | 1971 | 「浦尻貝塚」 福島大学考古学研究会発掘調査報告第1集                       |

## IX 浦尻貝塚・一里段古墳群の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

福島県相馬都小高町に所在する浦尻貝塚は、北に井田川が流れる低地を臨む相馬丘陵に位置している。丘陵南側から東側の台地は約12.5万年前の下末吉期に形成された海成段丘（岡ほか，1981）で、この段丘斜面に遺跡群は立地する。遺跡の発掘調査では、貝塚や水場遺構、古墳などが検出されている。SX01は湧水点付近を掘り込んで升状の遺構に導水して水を溜める構造であり、上位の土層からは縄文時代後期の土器が検出されたことから、SX01は縄文時代後期に構築された可能性があると考えられている。本報告では、遺構の構築年代について検討するためにSX01で用いられている木組の放射性炭素年代測定を行う。また、木組の樹種を特定することにより、当時の木材利用についての情報を得る。

小高町内の一里段古墳群1号墳では、発掘調査により木棺直葬と考えられる主体部が確認されたが、棺内覆土およびピット内覆土に火山噴出物（テフラ）と考えられる土層が検出された。本報告ではこれらの試料がテフラに由来するものであるかを確認し、テフラであればテフラの由来を特定し（テフラ分析）、古墳の構築年代に関する情報を得る。

### 浦尻貝塚41T検出の年代

#### 1. 試料

放射性炭素年代測定を行う試料は、SX01で用いられている木組の構築材3点である。1点は、木組の西側の辺（斜面上位側）に認められた杭材であり、杭1という試料名で扱う。他の2点は板状に加工された木材であり、木組の南側の辺にあたる板材を木材1、遺構内から出土した板材を木材2として扱う。また、これら3点の試料については樹種同定も行う。

#### 2. 分析方法

##### （1）放射性炭素年代測定

測定は学習院大学放射性炭素年代測定室の協力を得て行った。

##### （2）樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

#### 3. 結果

##### （1）放射性炭素年代測定

測定結果を表1に示す。表中の年代値は、A.D.1950年を基点としてそれより何年前であることを示す年数（BP）で、同位体効果による測定誤差を補正した年代値である。半減期はLIBBYの5570年を用いており、誤差は標準偏差1 $\sigma$ に相当する年代である。同位体効果の補正を行うために用いた同位体比は、標準値からのずれをパーミル（‰）で表している。 $\delta^{14}\text{C}$ の値は、放射線測定で求めた試料

炭素中の $^{14}\text{C}$ 濃度と現在の炭素の標準濃度を用いて算出された値である。 $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 原子比を質量分析器で測定し、標準にPDBを用いて同様に算出した値である。 $\Delta^{14}\text{C}$ の値は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0\text{‰}$ であったときの $^{14}\text{C}$ 濃度を計算した値である。

測定された年代値は、いずれの試料も中世～近世に相当する新しいものであった。

表1 放射性炭素年代測定結果

試料名	用途	樹種	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$\Delta^{14}\text{C}$ (‰)	同位体補正年代	Code-No
杭 1	杭	ウコギ属	$-33.3 \pm 6$	$-29.6$	$-24.4 \pm 6$	$190 \pm 50$	GaK-20685
木材1	板材	モミ属	$-41.8 \pm 7.1$	$-28.2$	$-35.6 \pm 7.1$	$290 \pm 60$	GaK-20686
木材2	板材	モミ属	$-62.8 \pm 7$	$-28.0$	$-57.2 \pm 7$	$470 \pm 60$	GaK-20687

## (2) 樹種同定

樹種同定結果を放射性炭素年代測定結果と併せて表1に示す。木材は、針葉樹1種類（モミ属）と広葉樹1種類（ウコギ属）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

### ・モミ属 (*Abies*) マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。傷害樹脂道が認められる試料がある。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は粗く、じゅず状末端壁が認められる。分野壁孔はスギ型で1～4個。放射組織は単利、1～20細胞高。

### ・ウコギ属 (*Acanthopanax*) ウコギ科

散孔材～紋様孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独または2～8個が斜～放射方向に複合して接線・斜方向の紋様状に配列し、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型、1～8細胞幅、数細胞高のものから広放射組織まである。

## 4. 考 察

測定された木組の材はいずれも中世～近世に相当する新しい時代の年代値を示した。3点ともほぼ近似した年代であることから、木材が採取され木組として利用されたのは中世～近世であると考えられる。今回の年代測定結果を考慮すると、水場遺構の上位にあたる縄文時代後期の土器片や平安時代の遺物を含む土層は、斜面上位の土層が流れ込みや崩落などによって二次的に堆積したものであると推定される。

木組の樹種は、杭はウコギ属、板はモミ属であった。杭に利用されているウコギ属は、東北地方では落葉低木のヤマウコギが低地の林内に生育する。自然木などの調査ではよく出土するが、木製品などに利用された例は少ない（島地・伊東, 1988）。そのため、周辺に生育していた種類を利用したことが推定される。板材に利用されているモミ属は、木理が通直で、板材への加工が容易である。また、比較的大径木も得られることから、大きな板材を得ることも可能である。板材が2点ともモミ属であることから、材質を考慮した上でモミ属を選択的に利用していた可能性がある。

木組遺構の出土例は各地で報告され、様々な形態があることが指摘されている（佐々木, 2000）。形状の違いは施設の使用目的・方法の違いを示していると考えられ、使用目的・方法と施設の各部を構成する木材の強度や耐水性・耐朽性などは密接に関わると考えられる。したがって、木組遺構の形態により用いられた樹種の種類構成は異なる可能性が考えられる。しかし、このような木組の種類構成を明らかにした例は少ない。そのため、今後さらに資料を蓄積したうえで検討したい。

## 一里段古墳群 1号墳のテフラの由来

### 1. 試料

一里段古墳群 1号墳では、墳丘の主体部付近をやや窪んだ状態に整地するのに用いられたⅥ層と、主体部の棺内覆土であるⅣ層にテフラと見られる土壤が集中して認められた。今回テフラ分析を行う試料は棺内覆土であるⅣ層と、Ⅵ層が流れ込んだピット内覆土からそれぞれ採取された試料番号 1 および試料番号 2 の計 2 点である。発掘調査所見では、試料番号 1 は主体部構築時、試料番号 2 は整地段階での流れ込みであると想定されている。

### 2. 分析方法

試料約 20g を蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象として観察し、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

### 3. 結果

試料番号 1 および 2 には、どちらにも、スコリアおよび火山ガラスは含まれず、軽石が多量に含まれている。認められる軽石は白色を呈し、発泡が不良である。いずれの試料にも、角閃石の斑晶を包有しているものも認められる。軽石の最大径は試料番号 1 および 2 のどちらも 1.5 mm である。試料番号 1 には軽石以外の砂分は少ないが、試料番号 2 には径 8 mm 大の粒径の大きな石英や長石の鉱物粒や石質岩片など軽石以外の砂分がやや多く認められる。

### 4. テフラの対比

試料番号 1 および 2 に認められた軽石は、軽石の特徴と遺跡の地理的位置から、榛名二ツ岳伊香保テフラ (Hr-FP: 町田・新井, 1992) に由来するものである。Hr-FP は、6 世紀中葉に榛名火山から噴出したとされ、給源から北東方向に分布主軸を持っている (町田・新井, 1992)。また同文献によれば、Hr-FP は給源から約 300 km 離れた仙台付近まで飛散していることも確認されている。

試料番号 1 は主体部構築時の流れ込み、試料番号 2 は整地段階での流れ込みと考えられている。試料番号 2 については軽石以外の砂分もやや多く含まれており、ピット内に流れ込んだ際にテフラ以外の土壤も伴ったものと推察される。また断面では、墳丘盛土であるⅡ・Ⅲ層にもテフラが含まれているが、周溝と推定される S D 0 1 からテフラは確認されていない。これらのことから、整地が行われた際には Hr-FP は既に降下していたといえる。したがって墳丘の構築は、Hr-FP が降下した 6 世紀中葉よりも後に行われたと考えられる。

## 引用文献

- 町田 洋, 新井房夫 (1992) 火山灰アトラス. 276p., 東大出版.
- 岡 重文・桂島 茂・垣見俊弘・相原輝雄・宇野沢 昭 (1981)  
福島県東海岸地域の段丘変形. 地質調査研月報, 32p, 275-292.
- 島地 謙・伊東隆夫編 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧. 296p., 雄山閣.
- 佐々木由香 (2000) 縄文時代の「水場遺構」に関する基礎的研究. 古代, 108p. 93-127.



## X 加賀後貝塚ボーリング調査報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

本遺跡では過去に試掘調査が実施され、縄文時代前期遺物包含層、弥生時代遺物包含層、土師器包含層などが確認された。そのうち、縄文時代前期包含層中では貝層が検出されており、その分布は段丘斜面から低地部にまで広がっていることが想定されていた。なお、この貝層は縄文海進時の汀線付近で形成されたものと推定されており、当時低地部で海進の影響がどのあたりまで及んだかについても、注目されていた。

### 1. 調査目的と調査経過

#### (1) 調査目的と経過

今回、加賀後遺跡に北面する低地部の土層の分布状況を明らかにし、試掘調査時に確認された貝層の低地における分布状況を把握することを目的とした、ボーリング調査が要望された。そこで、当社では事前協議を経て、平成11年12月20日から同月22日まで、技師4名を現地に派遣し、この目的を考慮したボーリング調査を実施した。

#### (2) 調査地点と調査器材

調査地点として、本遺跡の立地する低位段丘に近接し、平行する東西約100mmの測線上に7地点とこれに直交する測線上に1地点、計8地点を設定した。設定した全地点について、土層の堆積状況との貝層の分布状況を明らかにするように、ボーリング調査を行った。なお、今回のボーリング調査で使用した器材は、以下の通りである。

エンジン式PCライナー採土器（孔径46mm）

シンオール式採土器（孔径50mm）

トーマス式採土器（孔径2mm）

### 2. 調査方法

今回の調査ボーリングでは、コア採取を目的として、エンジン式PCライナー採土器および手動のシンオール式、トーマス式採土器を用いた。

エンジン式PCライナー採土器は、掘進はロッドの先端に取り付けたコア試料採取用コアチューブ内包のコア管を、エンジン打撃によって打ち込み、土中に貫入させて試料を採取するものである。

シンオール式採土器は、軟弱な泥質堆積物の採取を目的に考案されたもので、肉薄の真鍮製のコア管を土中に押し込んで堆積物を採取する。コア管の中にセットされたピストンを貫入後に固定することで、試料を脱落することなく採取することができる。

トーマス型ポローラーは、フィンのついた採土コア管を土中で回転させることで、孔回りの土層を採土管内のセルに採取する。本方法は、孔中の土層を掻き入れるために、堆積構造は乱されるが、上記2方法に比べ試料長の縮小がほとんどないという利点がある。

採取試料は、引き上げ後直ちにコア箱に納め、室内に持ち帰った後、開封して層相観察を行った。

### 3. 調査結果

遺跡の立地する低位段丘の北に近接する低地で、平行する東西約100mの測線上の7地点とこれに直交する測線上の1地点でボーリング調査を実施した(図28)。その結果採取されたコアの柱状図を、図39に示す。

#### (1) 上層の対比

柱状図をもとに、東西測線に沿う地質断面図を作成した(図39)。基本上層については、平成11年度までに実施されたトレンチ調査結果を総括して、I層からVII層までの区分がなされているので、今回の試料の柱状図および断面図作成にあたっては、基本的にこの分層に従った。

今回のボーリング調査で確認できた土層は、I層(表土:現水田耕作土層)、II層(青白色砂質シルト:土師器出土)、III層(青灰色から黒灰色砂質シルト層)、IV層(暗黒褐色粘土:泥炭質)、VI層(暗褐色シルト:縄文時代前期)、VIII層(緑灰色シルト)である。今回の調査で確認された最下位の土層は、第1地点、第2地点で観察された緑灰色の礫混じり砂層であるが、かつてのトレンチ調査の掘削深度は、本層まで及ばなかったものと思われる。

#### (2) 基本土層の設定

上記の通り、土層区分は基本的にかつてのトレンチ調査時に設定された区分に従った。なお、PCライナーによって採取されたコアは、貫入深度に対して20cm前後短いコアが得られている。この原因は、主に表土層である耕作土の空隙に起因すると考え、堆積層の地表面からの深度をもって層厚とした。実際には、下位の地層も打ち込み時の圧縮によって実際の層厚より多少短くなっていると考えられるが、表土層以深の土層についてはその補正は行わなかった。今回の調査で得られたコアで観察された基本土層は、以下の通りである。

I層(表土)現水田耕作土層で、黄褐色を呈する砂質シルト層である。表層下20cm~50cmで分布する。

II層(青灰色砂質シルト層)本土層は層相よりa, bの2層に区分され、調査地にはIIa層が広く分布している。コア所見では青灰色から緑灰色のシルト質砂で、細礫をわずかに含む。第9地点を除く地点で認められ、深度約20cmから70cmに分布する。層厚は50cm前後である。本層からは、第4地点で土器片が、第6地点では貝片が検出された。試掘で確認された、土師器包含層に相当すると考えられる。

III層(青白~暗灰色シルト層):本層は上位のII層に類似し、分布は判然としない。第2地点~第4地点の深度約50cmから70cmと調査地北の第9地点の2m以浅が本層に当たるとと思われる。

IV層(暗黒褐色粘土:泥炭質)黒色の腐植を多く含む粘土層で、深度約60cmから30cmに分布する。腐植量は地点により差があり、第6地点から第4地点では腐植が特に多く泥炭質を呈する。

V層(青灰色砂質シルト層)本層と明確に判定できる土層は、今回の調査においては認められなかった。

VI層(暗褐色シルト層)調査地の地下に広く分布が認められる。西側地域では層相の変化に富み、細分される可能性がある。なお、第6地点の本層中(深度160cm)より、貝片が検出されている。

VII層(貝層)以前に行われたトレンチ調査においてのみ確認された貝殻の密集する土層である。今回の調査では第1地点~第2地点付近がこのトレンチ位置に近接するが、本層は確認されなかった。

VIII層(緑灰色シルト層)第6地点から第5地点にかけて、VI層の下位に広く分布するやや硬質な緑灰色土層である。第4地点では粘土質であるが、他は砂質と層相は変化に富み、第2地点から第4地点では本層中にラミナ構造が認められる。これは、流水の影響を受けて堆積したことを示すも

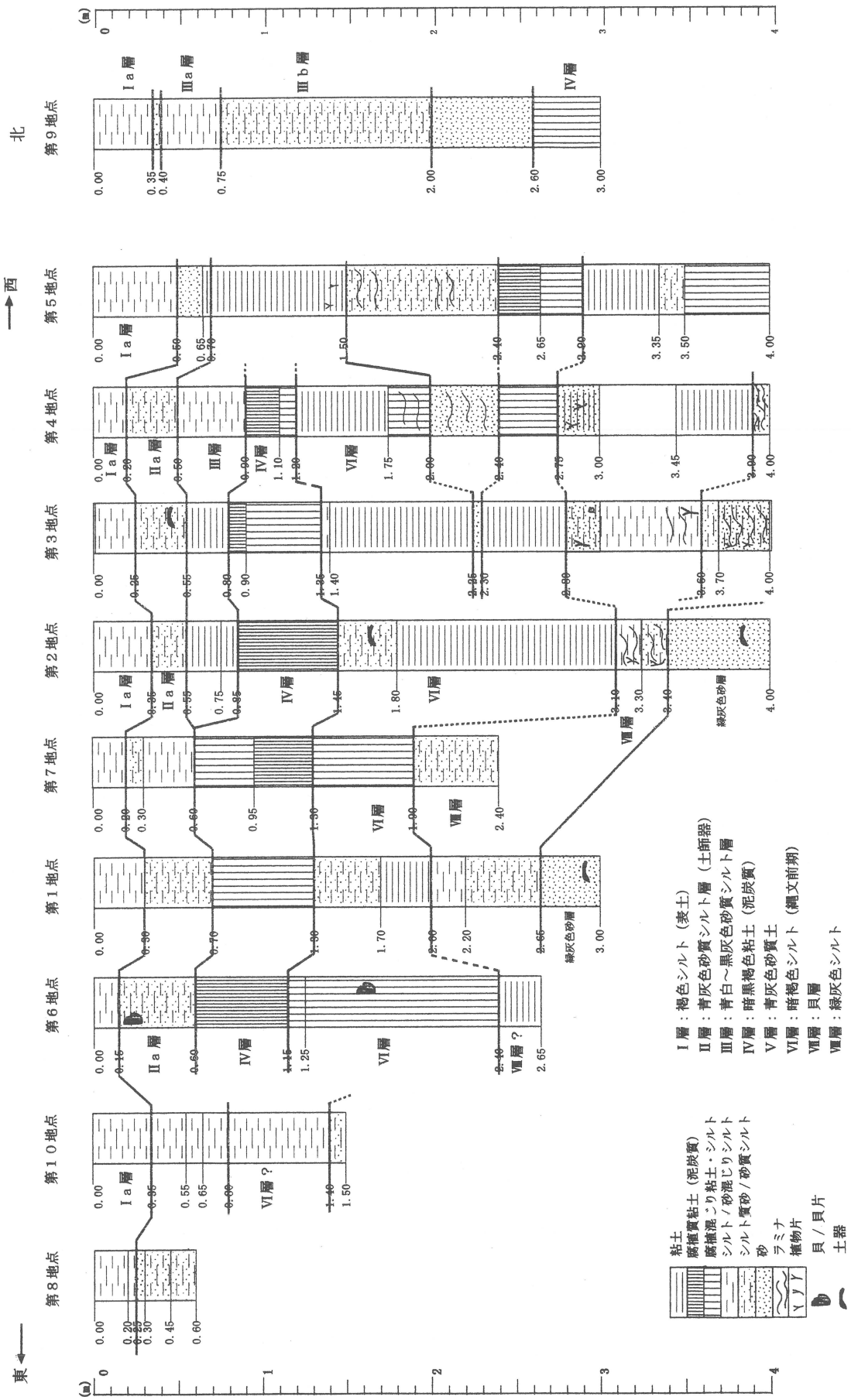


図 39 加賀後遺跡推定地下土層断面図

のと推定される。また、第1地点と第2地点では、最下部に緑灰色の細礫混じりの比較的淘汰の良い砂層が確認された。本層は更に細分できる可能性がある。第1地点（深度290cm）、第2地点（深度385cm）では、現地にてコア開封時に土器片が検出されている。

### （3） 土層の分布状況

調査地とした遺跡に北面する低地の土層分布をみると、西側地域ではⅡ層以深の層相が複雑になる点に気づく。第3地点より西方では、Ⅵ層中にラミナ構造を有する緑灰色の細～中粒砂層が挟まれ、西方に層厚を増している。この下位には黒色の腐植質粘土層が分布し、第4地点と第5地点では2～3枚の腐植質粘土層が認められる。

このように、低地西側地域は河川などの流水の影響を強く受けて、層相変化が複雑になっているものと推測される。また、砂質土層は青灰色～緑灰色を呈し、腐植質粘土層が黒～暗褐色を呈する傾向があり、これは主に上層中の酸化・還元状態が関係して、酸化状態で青灰色～緑灰色を呈し、還元状態で黒～暗褐色を呈しているものと推察される。なお、今回のボーリング調査では、かつての試掘調査地点に近接するように設定した地点（第1地点、第7地点）もあったが、貝層は検出されなかった。この結果より、貝層は遺跡の立地する低位段丘およびその斜面に、きわめて局所的に分布していたと推定される。

## XI 加賀後貝塚出土の動物遺存体

山崎京美

### 1. はじめに

土浦加賀後貝塚は平成6年に、9本のトレンチによる試掘調査が行われ、そのうち2 Tから縄文前期の貝塚が発見された。出土した貝類は破損していたり、殻の表面が磨滅した個体が多く、保存状態は良好とはいえない。しかし、貝類と共に検出された魚骨はきわめて多量であり、本貝塚の漁撈活動の活発さを物語っている。

ここでは、これまで明らかでなかった加賀後貝塚出土の動物遺存体の分析結果を報告する。

### 2. 資料について

筆者の元に持ち込まれた資料数はテンバコで2箱であるが、これらは貝層ごとに取り上げた後に水洗選別されたものであった。貝類は破損している資料がほとんどであり、遺存体の状態から貝塚は破碎貝層により構成されていたことを窺わせた。また魚骨はおびただしい量が検出されたが、今回同定できたのはそれらの中ではわずかの量であった。

### 3. 同定結果

#### 1) 同定の方法

種の同定にあたっては、貝類は『貝（標準原色図鑑全集 3）』（波部・小菅 1967）、『日本産軟体動物分類学二枚貝綱/掘足綱（波部 1977）、貝Ⅱ（二枚貝・陸貝・イカ・タコほか）』（波部・奥谷 1990）を元に行った。貝類以外の同定については、筆者所有の骨格標本を用いて行った。学名及び生態については、貝類は上記文献から、また魚類は『日本産魚類大図鑑』（益田ほか 1988）から引用した。

遺存体の計測にあたっては、殻長を波部（1977）に、魚類の歯骨高は赤澤（1969）に従った。また、貝類の集計にあたっては、巻貝は殻軸を保存する個体を原則としたが、イボキサゴについては臍盤のみ残存する個体が多いことから、臍盤数を集計した。また、二枚貝では主歯部分を保存する個体を対象とした。ただし、僅少種については破片であっても集計した。貝類以外の遺存体では、関節が保有されている骨を対象に同定を行った。

#### 2) 同定結果

今回の資料中で、同定できたのは以下の種である。

I 軟体動物門	<i>Phylum Mollusca</i>
i) 腹足綱	<i>Class Gastropoda</i>
イボキサゴ	<i>Umbonium (Suchium) moniliferum</i>
スガイ	<i>Lunella coronata</i>
カワアイ	<i>Cerithideopsisilla djadjariensis</i>
フトヘナタリ?	<i>Cerithidea rhizophorarum</i>
ウミニナ	<i>Batillaria multiformis</i>
ホソウミニナ?	<i>Batillaria cumingii</i>

ウミニナ属	<i>Batillaria sp.</i>
ツメタガイ	<i>Neverita (Glossaulax) didyma</i>
アカニシ?	<i>Rapana thomasiana</i>
レイシガイ	<i>Thais bronni</i>
イボニシ	<i>Thais clabigera</i>
アラムシロガイ	<i>Hinia festiva</i>
ヒダリマキゴマガイ	<i>Nakadaella micron</i>
キセルガイ科?	<i>Clausiliidae gen.et sp.indet.</i>
オカチョウジガイ	<i>Allopeas kyotoense</i>
ヒメベッコウマイマイ?	<i>Discoconulus sinapidium</i>
ヒメコハクガイ	<i>Hawaiiia minuscula</i>
マイマイ属	<i>Euhadra sp.</i>
ii) 斧足綱 <i>Class Pelecypoda</i>	
カリガネエガイ	<i>Barbatia (Savignyarca) virescens</i>
サルボウガイ?	<i>Scapharca subcrenata</i>
アカザラガイ?	<i>Chalamys farreri nipponensis</i>
コケゴロモガキ	<i>Ostrea circumpicta</i>
マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>
ヤマトシジミ	<i>Corbicula japonica</i>
ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>
オキシジミガイ	<i>Cyclina sinensis</i>
アサリ	<i>Ruditapes philippinarum</i>
シラトリガイ属	<i>Macoma sp.</i>
オオノガイ	<i>Mya arenaria oonogai</i>
II 脊椎動物門	
i) 魚綱	
アカエイ科	<i>Dasyatididae gen.et sp.indet.</i>
トビエイ科	<i>Myliobatididae gen.et sp.indet.</i>
エイ目	<i>Rajiformes fam.et gen.indet.</i>
板鰓亜綱目・科不明	<i>Elasmobranchii order et fam.indet.</i>
マイワシ	<i>Sardinops melanostictus</i>
ニシン科	<i>Clupeidae gen.et sp.indet.</i>
ニシン目	<i>Clupeiformes fam.et gen.indet.</i>
ウナギ	<i>Anguilla japonica</i>
アナゴ科	<i>Conguidae gen.et sp.indet.</i>
ウグイ属?	<i>Tribolodon sp.?</i>
ダツ目	<i>Beloniformes fam.et gen.indet.</i>
スズキ属	<i>Lateolabrax sp.</i>
マアジ?	<i>Trachurus japonicus?</i>

ニベ科?	<i>Scienidae gen.et sp.indet.?</i>
クロダイ属	<i>Acanthopagrus sp.</i>
マダイあるいはチダイ	<i>Pagrus major or Evynnis japonica</i>
タイ科	<i>Sparidae gen.et sp.indet.</i>
ウミタナゴ科	<i>Embiotocidae gen.et sp.indet.</i>
アイナメ	<i>Hexagrammos otakii</i>
コチ?	<i>Platycephalus indicus ?</i>
ヒラメ	<i>Paralichthys olivaceus</i>
カレイ科	<i>Pleuronectidae gen.et sp.indet.</i>
カレイ目	<i>Pleuronectiformes fam.et gen.indet.</i>
マフグ?	<i>Takifugu porphyreus?</i>
ii) 爬虫綱	
ヘビ亜目	<i>Ophidia fam.et gen.indet.</i>
iii) 鳥綱	
目以下不明	<i>Aves order et fam.indet.</i>
iv) 哺乳綱	
ハタネズミ亜科	<i>Microtinae gen.et sp.indet.</i>
齧歯目?	<i>Rodentis fam.et gen.indet.?</i>
タヌキ	<i>Nyctereutes procyonoides</i>
イノシシ	<i>Sus scrofa</i>
ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i>

以上のように、貝類では腹足綱が18種類、斧足綱が11種類、脊椎動物では魚綱が24種類、爬虫綱が1種類、鳥綱（種数不明）、哺乳綱は5種類が同定された。

### 3) 記 載

#### イボキサゴ

2Tより31,448点（うち幼貝が297点）、地点不明より5,665点（うち幼貝が651点）が検出された。本貝塚から出土した貝類の中で圧倒的に多い種である。殻を残す個体は稀で、多くは臍盤のみ保存されている個体が多い。幼貝が多く含まれていることは他の巻貝では見られない特徴である。本種は、潮間帯の砂底に極めて多く多産する。

#### スガイ

2Tより殻が10点、蓋が87点、地点不明より殻が9点、蓋が19点出土した。本種は潮間帯の岩礫底に普通の種である。

#### カワアイ

2Tより4点、地点不明より1点の合計5点出土した。本種は汽水域の潮間帯の砂泥底やアジモ帯に普通に棲む。

#### フトヘナタリ?

殻の表面が磨滅しているため断定することは困難であったが、フトヘナタリに酷似する遺骸が2Tより22点、地点不明より2点出土した。本種は、湾奥の潮間帯の小石や泥地やアシの生えた泥底に棲む。

ウミニナ

2 Tより11点（?を含む）、地点不明より3点が出土した。本種は殻の表面が磨滅している個体がほとんどであったため、体層の形態から同定可能なもののみウミニナとし、近似した個体はウミニナ属とした。本種は、潮間帯の砂や小石のところに普通に棲む。

ホソウミニナ?

2 Tより19点、地点不明より3点出土した。ウミニナと同様に体層から判断した。本種は、潮間帯の砂底に普通に棲む。

ツメタガイ

2 Tより1点、地点不明より3点出土した。本種は、潮間帯下の細砂底に棲む。

アカニシ

2 Tより、滑層から臍孔を残す破片が1点のみ検出された。本種は内海の潮間帯より水深20mの砂泥底に棲む。

レイシガイ

地点不明より、本種に特徴的なコブ状突起列が認められる破片が1点出土した。潮間帯の岩礫底に普通の種である。

イボニシ

地点不明から1点のみ検出された。本種は潮間帯の岩礫底に棲む。

アラムシロガイ

2 Tより5個体出土した。本種は潮間帯の砂礫底に普通の種である。

ヒダリマキゴマガイ

2 T及び地点不明より各2点が出土した。本種は、林縁生息種である。

キセルガイ科?

地点不明よりキセルガイ科に属すると思われる幼貝が1点検出された。殻高3.7mmほどの微小な貝で、左巻きで殻の表面には細かい襞がある。キセルガイは、陸産で木に登る種と落葉や石の間に棲む種とがある。

オカチョウジガイ

地点不明より8点（?を含む）が出土した。本種は庭園田圃の草や石の下に棲む。

ヒメベッコウマイマイ?

地点不明より2点出土した。本種は林縁生息種である。

ヒメコハクガイの一種

地点不明より5点が出土した。図鑑ではヒメコハクガイは北アメリカからの移入種と紹介されているが（たとえば波部・奥谷 1990）、縄文時代には現生種と別の土着種があったと指摘されている（黒住 1994）。しかし、今回の資料は所属時期が不明なことから、土着種と認定する根拠がない。そのため、学名は従来からの呼称に従った。なお、県内では塩喰岩陰遺跡においてすでに検出されており（山崎 1994）、本例で2例目である。ヒメコハクガイは人家近くに生息する習性を持っている。

マイマイ属

2 Tより、左巻きのマイマイ属の一種と思われる遺骸が1点出土している。



カリガネエガイ

2 Tより右殻の破片1点が出土している。本種は潮間帯の岩礫底に棲む。

サルボウガイ？

2 T及び地点不明より、左殻破片が各1点出土している。本種は、内湾の潮間帯下から水深10mの砂泥底に棲む。

アカザラガイ？

2 Tと地点不明より破片が各6点出土している。いずれも殻頂を欠くが、扇形をなすと思われる殻の表面には強弱のある放射肋を有し、肋上には鱗状突起が残存している。同属のアズマニシキガイに比べ放射肋も弱く、殻表の彫刻も穏やかなことから、アカザラガイとした。本種は、潮間帯から水深20mの岩礫に生息する。

コケゴロモガキ

2 Tより破片7点、地点不明より破片1点が出土している。殻の輪郭は円板形に近く、表面には細かな皺が縮れた状態となり残っている。本種は潮間帯下に棲む。

マガキ

2 Tの貝層より右？殻3点、左殻23点、同第1ピット貝層より破片2点、地点不明より右殻8点、左殻？1点が出土した。本貝塚のマガキはそれ程大きくなく、殻長が5cm前後の遺骸が多い。マガキは多少淡水の影響のある河口部の地物に着生する。

ヤマトシジミ

2 Tより右殻が1点のみ出土した。本種は海水の影響のある河口域（汽水域）に棲む。

ハマグリ？

2 Tより右殻5点（？を含む）、左殻1点、地点不明より左殻1点が発見された。本種は内湾の潮間帯や浅海の砂泥地に棲む。

オキシジミガイ

2 Tの貝層より右殻3点、第1ピット貝層より左殻1点が出土している。内湾奥部の潮間帯の泥底に棲む。

アサリ

2 Tより右殻124点（？を含む）、左殻158点、地点不明より右殻31点、左殻81点が出土している。本貝塚から検出された二枚貝の中で最も多い種である。大部分の殻は破損しているが、殻長の計測可能な個体は1.3、2.4、4.0、5.2cmと、本種は様々なサイズが含まれていることがわかる。アサリは、淡水の影響のある内湾潮間帯砂泥底にハマグリなどと共に棲む。

シラトリガイ属

2 Tより右殻1点が出土している。ヒメシラトリガイに似るが、破片であるためここではシラトリガイ属とした。

オオノガイ

2 Tより右殻32点、左殻44点、地点不明より左右殻各5点が出土した。アサリ同様、殻は破損している個体がほとんどであり、特徴ある殻頂が多く残っている。本種は、内湾干潟の泥深いところに棲む。

アカエイ科

2 Tより遊離した歯1点が出土している。

トビエイ科

2 Tより、短菱形と長菱形の歯板が7点出土している。

エイ目

2 Tより尾棘1点が出土している。棘を持つエイ類は、ガンギエイ科、アカエイ科、トビエイ科、ウシパナトビエイ科がある。ここでは、アカエイ科あるいはトビエイ科の可能性が高い。

板鰓亜綱

2 Tより椎体23点が出土している。椎体には少なくとも2種類のタイプがあり、エイ類やサメ類を含んでいると思われる。

マイワシ

2 T 2号トレンチより第1背椎骨3点が出土している。マイワシは沿岸の回遊魚である。

ニシン科

2 Tより第1脊椎骨4点、腹椎49点、尾椎188点が出土している。第1脊椎骨はマイワシと若干異なる特徴を持っているようであるが、ニシン科のどの種にあたるかは筆者には判断できなかった。

ニシン目

マイワシ、ニシン科とも異なる特徴を持つ第1脊椎骨が、2 Tより1点出土している。

ウナギ

2 Tより椎体8点と、ウナギと考えられる左前上顎骨1点が出土している。本種は、成魚は淡水で生活するが、産卵のため降海する習性を持つ。

アナゴ科

2 Tより右角関節骨1点、鋤骨1点、腹椎16点、尾椎23点が出土している。

ウグイ属?

2 Tより咽頭歯が1点出土している。

ダツ目

2 Tより顎骨の破片1点が出土している。

スズキ属

2 Tより右角関節骨4点、右角舌篩骨3点、右擬鎖骨1点、胸鰭第1棘の右が5点、左が4点、右歯骨6点、左歯骨7点、右主上顎骨9点、左主上顎骨10点、右主鰓蓋骨1点、破片10点、鋤骨5点、右前上顎骨8点、左前上顎骨6点、前鰓蓋骨破片1点、右方骨2点、左方骨1点、腹椎10点、尾椎4点、臀鰭第2棘12点と多くの部位が検出された。また、地点不明では左角関節骨3点、耳石1点、右方骨2点、左方骨6点が出土した。

多く検出された左歯骨の歯骨高は、2.9、3.6、3.8、7.0、7.2、8.7、9.3 mm と多様なサイズを含んでいる。これらから体長を推定してみると(赤澤1969)、歯骨高5 mm以下のサンプルは赤澤(1969)では対象とされていないが、おそらく20 cm以下の幼魚であると推定される。また、歯骨高7.0 mmから9 mm代の個体は40 cmから55 cm位の4、5才魚であると推定される。このように、スズキ属では幼魚から成魚までの各成長段階の個体が含まれている。

マアジ?

2 Tより腹椎2点と尾椎1点が出土している。

ニベ科?

2 Tより右前上顎骨1点が出土している。

クロダイ属

2 Tより右角関節骨1点、左右歯骨各1点、左前上顎骨5点（?を含む）、臂鰭第2棘3点、地点不明より右前上顎骨5点、クロダイと思われる左角関節骨1点が出土している。

マダイあるいはチダイ

2 Tより左前上顎骨2点が出土している。遺存体は2列の歯列を持っているが、小形であるため、これがマダイなのかあるいはチダイなのかの判断は難しかった。

タイ科

2 Tより歯164点、右方骨2点、尾椎4点、鱗棘11点が出土している。クロダイ属やマダイあるいはチダイに属すると思われる。

ウミタナゴ科

2 Tより右前上顎骨1点が出土している。

アイナメ

2 Tより椎体3点が出土している。

コチ?

2 Tよりコチと思われる腹椎と尾椎が各1点出土した。

ヒラメ

2 Tより左角関節骨1点、左主上顎骨1点、右前上顎骨1点、椎体3点、地点不明より椎体1点が出土している。

カレイ科

2 Tより左下顎骨1点、左主上顎骨1点、前上顎骨の破片1点が出土している。

カレイ目

2 Tより尾舌骨3点が出土している。これらは2タイプに分かれることから、カレイ目には2種の個体が含まれている。

マフグ?

2 Tより右前上顎骨1点、右歯骨1点が出土している。マフグに近似するが、他の種と比較できていないため断定しなかった。

ヘビ亜目

2 Tより脊椎骨が6点出土している。

鳥類

2 Tより右尺骨1点、地点不明より左脛骨1点と骨幹片4点が出土している。しかし、筆者には鳥類の同定能力がないため、今回は同定できていない。

ハタネズミ亜科

2 Tより左下顎骨1点が出土している。

齧歯目?

ネズミ科に近似する特徴を持った胸椎1点、2 Tより検出された。しかし、他科と比較できていないため、ここでは齧歯目と同定した。

タヌキ

2 Tより左上顎犬歯1点が出土している。

イノシシ

2 Tより下顎犬歯破片1点、基節骨1点、右?肩甲骨1点、中節骨1点、イノシシと思われる腸骨1点が検出された。哺乳類の中では本種が最も多く出土した。

ニホンジカ

2 Tより左下顎骨の関節突起が1点、左踵骨1点が検出された。

その他

2 Tよりイノシシあるいはニホンジカの肩甲骨破片が1点、哺乳類の肩甲骨? 1点、脊椎骨骨端が1点出土している。また、表には記載されていないが、未同定の多くの魚骨がある。これらの中には多量の椎骨や鱗棘、また頭部各骨があるが、現在の筆者の能力では同定できなかった。今後、より一層、同定の精度を向上させることにより、さらに多くの種が判明するであろう。

### 3. ま と め

以上のように、多彩な種を含む動物遺存体が今回の調査によって明らかとなった。本貝塚はこれまで貝層の所在が未確認であったことから(森 1991 a)、今回の試掘調査により初めて貝層の存在が確認でき、また動物遺存体の内容を明らかにできた意義は大きい。他章にて詳細な考察が行われるであろうが、ここでは動物遺存体の特徴をまとめてみたい。

まず、出土した動物遺存体の生態から、本貝塚を形成した人々の狩猟・漁撈・採集活動を行った環境を推定することができる。貝類からは、スガイ、レイシガイ、イボニシ、アカザラガイ、カリガネエガイの棲む岩礁や岩礫底、アラムシロガイの棲む砂礫底、イボキサゴやウミニナ類、アカニシ、ツメタガイ、コケゴロモガキ、サルボウガイの生息する潮間帯の砂底や砂泥底、またカワアイ、アサリ、ハマグリ、マガキ、ヤマトシジミの棲む淡水の影響のある河口付近、さらにフトヘナタリ、オオハガイ、オキシジミガイの棲む湾奥の干潟の泥地といった環境が、本貝塚の周囲に広がっていたと考えられる。これらの中で、最も多く利用したのは37,113点と多量のイボキサゴが検出された岩礁域、次いで244点のアサリが検出された淡水の影響のある沿岸部である。魚類では、淡水に棲むウナギや淡水から汽水域に棲むウグイ属、汽水域にあたる河口部や内湾沿岸の藻場地帯に生息するスズキ属の当歳魚、また多くの海水魚が検出された。これらから魚類でも貝類とほぼ同様の、淡水から汽水域、さらに沿岸までの幅広い漁場を持っていたと推定される。そして、中でもスズキ属が最小個体数10個体と最も多く、次いでクロダイ属が5個体と多く漁獲されていた。ただし、魚類には同定の偏りが反映されていることから、ここでは参考程度に考える。また哺乳類では、ハタネズミ亜科、齧歯目、タヌキ、イノシシ、ニホンジカが検出されたが、貝や魚類に比べ極端に少ない量である。あるいは、未調査区に多くの遺存体が埋存しているのかもしれない。

本貝塚の立地をみると、古宮田湾の奥部に位置し、湾に突出した台地上に立地する。海岸の後背には河川や森林地帯が広がっており、海の資源や山の資源を利用するのに好適な場所に占地し、狩猟、漁撈を行っていたと推定される。本貝塚のやや西北に位置する上浦宮田東貝塚からは、本貝塚と同様の種が同定されており(森 1991 b)、縄文時代の前期初頭の環境として、古宮田湾は湾奥まで海岸線が侵入し、豊富な魚貝類を生産していたと推測される。

ところで、遺存体の中で特筆されるのは、イボキサゴには幼貝と成貝があったことである。また、アサリも1.28~5.16 cm と大小のサイズが含まれていた。このことは、当時の人々は採貝方法として、砂ごとまとめて採るような技術や道具を駆使していたと推測される。今回の資料のみから具体

的な獲得方法を推定するのは困難であるが、他の遺物の分析と総合して見ることによって、本貝塚を形成した人々の生業の一端が明らかになるであろう。

### 参 考 文 献

- 赤 澤 威 1969 「縄文貝塚産魚類の体長組成並びにその先史漁撈学的意味」  
『人類学雑誌』77-4
- 黒 住 耐 二 1994 「柱状サンプルから得られた微小貝類遺存体」  
『国指定史跡 上高津貝塚 A 地点』土浦市教育委員会
- 玉 川 一 郎 1988 「自然遺物」『角部内南台東貝塚』小高町教育委員会
- 波 部 忠 重 1977 『日本産軟体動物分類学 二枚貝綱 / 掘足綱』北隆館
- 波郡忠重・小菅貞男 1967 『貝（標準原色図鑑全集3）』保育社
- 波郡忠重・奥谷喬司 1990 『貝Ⅱ（二枚貝・陸貝・イカ・タコほか）』学習研究社
- 益田 一ほか編 1988 『日本産魚類大図鑑』東海大学出版会
- 森 幸 彦 1991 a 「上浦加賀後貝塚」『福島県の貝塚』福島県教育委員会
- 森 幸 彦 1991 b 「土浦宮田東貝塚」『福島県の貝塚』福島県教育委員会
- 山 崎 京 美 1994 「塩喰岩陰遺跡出土の貝類遺骸」  
『東北横断自動車道遺跡調査報告25』  
六郎次遺跡・塩喰岩陰遺跡 福島県教育委員会、福島県文化センター

表2 一里段古墳群出土土器観察表1

挿図番号	器種	法量 (cm)	文様調整の特徴	胎土	色調	備考
10-1	土師器 杯	15.6 5.8 6.4	外面口縁ミガキ、体部～底部ヘラ削り。内面ミガキ。	やや粗 白色粒	にぶい褐色	
10-2	土師器 杯	(15.8) — —	外面口縁横ナデ、体部～底部ヘラ削り。内面ヘラ削り後ナデ。	密 小石	にぶい赤褐色	
10-3	土師器 杯	(9.6) 4.3 7.2	外面口縁横ナデ、体部粗いヘラ削り。内面ナデ。	密 小石	にぶい黄褐色	ミニチュア
10-4	土師器 鉢	(17.4) 11.6 7.4	内外面口縁横ナデ。外面体部ヘラ削り後ミガキ、底部ヘラ削り。内面体部～底部ナデ。	密	赤褐色	二次焼成有
10-5	土師器 鉢	17.4 — —	内外面口縁横ナデ。外面体部ヘラ削り後ナデまたはミガキ、内面体部～底部ヘラ削り後ナデ。	密	赤褐色	二次焼成有
10-6	土師器 杯?	— — 5.2	外面体部指頭押捺、底部ナデ。内面ヘラ削り。	密 小石	にぶい黄褐色	ミニチュア
10-7	土師器 鉢?	— — 5.6	外面体部ヘラ削り、底部ナデ。内面ナデ。	緻密 小石	にぶい黄褐色	
10-8	土師器 高杯	— — —	外面・杯部内面ミガキ、赤彩。内面脚部ヘラ削り。	緻密 小石	外 赤色 内 にぶい黄褐色	
10-9	土師器 高杯	— — 11.0	外面横ナデ。内面ナデ。	密 小石・白色粒	赤褐色	
10-10	土師器 杯	(13.4) 4.7 (3.8)	外面口縁横ナデ、体部～底部ヘラ削り。内面ナデ。	緻密 白色粒	外 橙褐色 内 褐灰色	
10-11	土師器 鉢?	— — 6.1	外面体部ミガキ、底部ナデ。内面ナデ。	やや粗	橙褐色	
10-12	土師器 鉢	(15.8) — —	内外面口縁横ナデ。体部外面不明。体部内面ヘラ削り後ナデ。	密 白色針状物 質	赤褐色	
10-13	土師器 壺	— — 2.8	外面頸部ナデ、体部～底部指ナデ後ミガキ。内面ナデ。外面・内面頸部、底部赤彩。	緻密 橙色粒	赤褐色	ミニチュア
10-14	土師器 高杯	— — —	外面杯部ナデ、脚部ヘラ削り。杯部内面ナデ? 黒色処理。脚部内面ナデ。脚部透かし孔有。	密 小石	にぶい褐色	
10-15	土師器 杯	6.0 3.2 3.2	外面口縁横ナデ、体部～底部粗いヘラ削り後指ナデ。内面ナデ。	緻密 白色粒	にぶい黄褐色	ミニチュア
11-1	土師器 杯	(14.6) 4.3 (5.0)	内外面ミガキ。	緻密 橙色粒	にぶい褐色	
11-2	土師器 杯	(15.8) — —	外面横ナデ後ミガキ。内面口縁ミガキ、体部～底部ヘラ削り後ナデ。内面黒色処理。	緻密	外 にぶい赤褐色 内 黒色	

挿図番号	器種	法量 (cm)	文様調整の特徴	胎土	色調	備考
11-3	土師器 甌	— — (8.6)	外面ミガキ。内面ナデ。	緻密 小石	明褐色	
11-4	土師器 鉢	(16.0) 6.8 12.0	内外面口縁横ナデ。外面体部ナデ、 底部木葉痕。内面体部～底部ヘラ削 り後ナデ。	密 小石・白色粒	にぶい褐色	
11-5	土師器 鉢	(14.0) 10.7 5.0	内外面口縁横ナデ。外面体部ヘラ削 り後ヘラナデ。内面体部～底部ナデ。	密 小石・白色粒	赤褐色	

表3 一里段古墳群出土時観察表2

挿図番号	文様調整の特徴	胎土	種別	備考
12-1	外面並行・弧状?1本ヘラ描沈線文→充填縄文(原体不明) →交点1本ヘラ描縦短沈線。口唇連続キザミ。内面並行ヘ ラ描沈線文、ミガキ。	緻密	南御山Ⅱ 式?	鉢?
12-2	外面縦走平行沈線文(1mm)、横区画平行沈線文。内面ナ デ。	密	桜井式	頸部
12-3	外面平行沈線(1mm)による重三角文	密	桜井式	
12-4	外面附加条第1種 RL+L・L。内面ナデ	密	桜井式?	

表4 中村平遺跡出土時観察表

挿図番号	器種	法量 (cm)	文様調整の特徴	胎土	色調	備考
16-1	土師器 杯	15.1 4.1 5.9	外面口縁横ナデ、体部～底部ヘラ削 り。内面ミガキ、黒色処理。	密 小石・白色針 状物質	外 にぶい褐 色 内 黒色	
16-2	土師器 杯	16.8 4.9 —	外面口縁横ナデ、体部～底部ヘラ削 り。内面ミガキ、黒色処理。	密 小石・白色針 状物質	外 にぶい明 褐色 内 黒色	
16-3	土師器 杯	13.2 4.1 —	外面口縁横ナデ、体部～底部ヘラ削 り。内面ミガキ、黒色処理。	密 小石・白色針 状物質	外 にぶい褐 色 内 黒色	
16-4	土師器 杯	(16.0) — —	外面口縁横ナデ、体部ヘラ削り。内 面ミガキ、黒色処理。	密 白色針状物 質	外 にぶい褐 色 内 黒色	
16-5	土師器 甕	(15.4) — —	内外面口縁横ナデ。外面ハケ目。内 面ナデ。	やや粗 小石・白色針 状物質	赤褐色	
16-6	土師器 甕	— — 9.4	内外面口縁横ナデ。外面体部ハケ目、 底部ヘラ削り後ナデ。内面ナデ。	密 小石	赤褐色	
16-7	土師器 甕	— — 7.4	内外面口縁横ナデ。外面体部ヘラ削 り、底部ヘラ削り後ナデ。内面ヘラ 削り後ナデ。	密 小石	にぶい褐色	
16-8	土師器 甌	23.6 12.7 9.4	内外面口縁横ナデ。外面体部上半ハ ケ目、体部下半ヘラ削り。内面体部 上半ミガキ、下半ヘラ削り・ナデ。	密 小石	にぶい褐色	
16-9	土師器 甌	24.6 — —	内外面口縁横ナデ。外面体部ヘラ削 り後ミガキ。内面ミガキ。	密 橙色粒	にぶい褐色	

挿図番号	器種	法量 (cm)	文様調整の特徴	胎土	色調	備考
16-10	土師器 甌	— — 8.2	内外面口縁横ナデ。外面体部上半ハケ目、体部下半ヘラ削り。内面体部上半ヘラ削り後ナデ、下半ヘラ削り。	密 小石	赤褐色	
16-11	土師器 甌	22.0 11.5 3.8	内外面口縁横ナデ。外面体部上半ヘラ削り後ミガキ、下半ヘラ削り。内面体部上半ナデ、下半ヘラ削り。	密 小石	にぶい褐色	
17-1	土師器 甕?	— — 5.6	外面体部ヘラ削り、底部ナデ。内面ナデ。	緻密 小石	にぶい黄褐色	
17-2	弥生土器 壺	— — —	外面平行沈線(1mm)による重四角文。内面ナデ。	密	黒褐色	桜井式

表5 北原貝塚遺跡群出土土器観察表

挿図番号	文様調整の特徴	胎土	種別	備考
20-1	外面平行沈線によるコンパス文、刺突文。内面ナデ。	粗 繊維・小石	宮田Ⅲ	
20-2	外面・底部0段多条?内面ミガキ。	粗 繊維	宮田Ⅲ	
20-3	口縁上下端キザミ、外面刺突2列。頸部 RL 縄文→平行沈線による重山形文。内面ナデ。	粗 小石・白色粒	大木5	口径 25.2
20-4	外面 L・R の羽状撚糸文(結束有)。内面ナデ	やや粗 繊維	宮田Ⅲ	
20-5	外面 LR 縄文→横位平行沈線文。内面ナデ。	緻密 繊維	大木2 a	
20-6	外面幅狭ループ文(RL)?内面ナデ。	密 繊維	宮田Ⅲ	
20-7	口縁鋸歯状突起。内外面ナデ。	やや粗	大木5	
20-8	口縁山形状突起、頸部 RL 縄文。内面ナデ。	やや粗	大木5	
20-9	口縁交互指頭押捺。外面直前段反撚 RRL。内面ナデ。	密 小石	?	
20-10	外面 LR 縄文。内面ナデ。	やや粗	大木5?	
20-11	外面 RL 縄文。内面ナデ。	粗	大木5?	

表6 加賀後貝塚出土土器観察表 1

挿図番号	文様調整の特徴	胎土	種別	備考
30-1	外面・底部ループ文。内面ナデ。	やや粗 繊維	宮田Ⅲ	
30-2	外面幅狭ループ文(LR)。内面ナデ。	やや粗 繊維	宮田Ⅲ	
30-3	外面口縁爪形文、平行沈線による鋸歯状文、爪形文。地文羽状ループ文(幅狭)。内面ナデ。	やや粗 繊維・白色針状物質	宮田Ⅲ	
30-4	外面幅狭ループ文(LR)。内面ナデ。	やや粗 繊維	宮田Ⅲ	
30-5	外面 RL 縄文(幅広)。内面ナデ。	やや粗 繊維・白色針状物質	宮田Ⅲ	
30-6	外面 RL 縄文(幅広)。内面ナデ。	密 繊維・白色針状物質	宮田Ⅲ	
30-7	外面 LR 縄文(幅広)。内面ナデ。	密 繊維・白色針状物質	宮田Ⅲ	



出土土器観察表

挿図番号	文様調整の特徴	胎土	種別	備考
30-8	外面 LR 縄文(幅広)。内面ナデ。	密 繊維・白色針状物質	宮田Ⅲ	
30-9	口縁縦位ヘラ描沈線・横位平行沈線文。内面ナデ。	密 繊維	宮田Ⅲ	
30-10	外面半截竹管による刺突文(重菱形文)。地文 RL 縄文。 内面ナデ。	密 繊維・白色針状物質	宮田Ⅲ	
30-11	外面ヘラ描沈線区画押圧縄文。	密 繊維・白色針状物質	花積下層 ～宮田Ⅲ	
30-12	外面幅広ループ文。内面ナデ。	やや粗 繊維	宮田Ⅲ	
30-13	外面羽状ループ文(幅狭)。内面ナデ。	やや粗 繊維	宮田Ⅲ	
30-14	外面幅狭 LR 縄文。内面ナデ。	やや粗 繊維	宮田Ⅲ	
30-15	外面幅狭 LR 縄文。内面ナデ。	やや粗 繊維・小石	宮田Ⅲ	
30-16	S 字状結節を伴う LR・RL 羽状縄文(幅狭)。内面ナデ。	密 繊維	宮田Ⅲ	
30-17	外面 LR・RL 羽状縄文(幅狭)。内面ナデ。	やや粗 繊維	宮田Ⅲ	
30-18	外面 LR・RL 羽状縄文(幅広)。内面ナデ、指頭押捺。	密 繊維	宮田Ⅲ	
30-19	外面 LR・RL 羽状縄文。内面ナデ。	やや粗 繊維・小石	宮田Ⅲ	
30-20	外面 LR・RL 羽状縄文(幅狭)。内面ナデ。	やや粗 繊維	宮田Ⅲ	
30-21	外面幅広 LR 縄文。内面ナデ。	密 繊維	宮田Ⅲ	
30-22	外面幅広 RL 縄文。内面ナデ。	密 繊維・白色針状物質	宮田Ⅲ	
30-23	外面幅広 LR 縄文。内面ナデ。	密 繊維	宮田Ⅲ	
31-1	口唇・外面口縁・肩部 LLR。内面ナデ。	緻密 白色針状物質	桜井式	口径 (13.4)
31-2	外面 1 本ヘラ描沈線による重四角文(上端区画有、下端区 画無、地文附加条第 1 種 RL+LL。内面ナデ。	密	天神原式	
31-3	内外面ナデ。	緻密 白色針状物質	桜井式	底径 6.6
31-4	内外面ナデ。底部 LR 縄文?	緻密 白色針状物質	桜井式	底径 6.6
31-5	外面附加条第 1 種? 底部木葉痕。内面ナデ。	密 小石・白色針状物質	桜井式	底径 10.6
31-6	内外面ナデ。	密 白色針状物質	桜井式	底径 (7.6)
31-7	口唇縄文(原体不明)。外面頸部ナデ、体部結節を伴う縄 文(原体不明)。内面ナデ。	密 白色針状物質	桜井式	
31-8	外面口縁 LR 縄文? 外面頸部・内面ナデ。	密 小石	桜井式	
31-9	外面平行沈線(1mm)による重四角文。内面ナデ。	密	桜井式	
31-10	外面平行沈線(1mm)による重四角文。内面ナデ。	密 白色針状物質	桜井式	
31-11	外面平行沈線(1mm)による重四角文。内面ナデ。	密 白色針状物質	桜井式	
31-12	外面平行沈線(1mm)による重四角文。内面ナデ。	密 白色針状物質	桜井式	

挿図番号	文様調整の特徴	胎土	種別	備考
31-13	外面平行沈線(1mm)による重四角文。内面ナデ。	密 白色針状物質	桜井式	
31-14	外面平行沈線(1mm)による重四角文(横位区画有)。内面ナデ。	密 白色針状物質	桜井式	
31-15	外面附加条第1種 LR+R。内面ナデ。	密 白色針状物質	桜井式	
31-16	外面0段多条。内面ナデ。	密	桜井式	
31-17	外面附加条第1種 RL+L。内面ナデ。	密 白色針状物質	桜井式	
31-18	外面 RLL。内面ナデ。外面 LR・RL 羽状縄文(幅広)。内面ナデ、指頭押捺。	密 白色針状物質	桜井式	

表7 加賀後貝塚出土土器観察表2

挿図番号	器種	法量 (cm)	文様調整の特徴	胎土	色調	備考
31-19	土師器 杯(椀)	— — (8.2)	外面・底部ロクロナデ。杯部内面ナデ。	密 白色粒	灰白色	
31-20	土師器 杯(椀)	— — (8.0)	外面ロクロナデ。底部糸切り後ナデ杯部内面ナデ。	緻密	黄褐色	
31-21	土師器 杯	— — (8.2)	外面ロクロナデ。底部糸切り後ナデ杯部内面ナデ。	密 白色粒	明褐色	高台杯

表8 加賀後貝塚の動物遺存体

出土地	出土層位	種名	部位名	左右	点数	備考
2 T	貝層	アカザラガイ?			6	破片
2 T	貝層	アカニシ?			1	
2 T	貝層	アサリ		右	107	
2 T	貝層	アサリ		左	122	
2 T	貝層	アサリ?		右	17	
2 T	貝層	アサリ?		左	36	焼けている1
2 T	貝層	アラムシロガイ			5	
2 T	貝層	イボキサゴ			31151	
2 T	貝層	イボキサゴ幼貝			297	
2 T	貝層	ウミニナ			2	
2 T	貝層	ウミニナ?			9	
2 T	貝層	ウミニナ属			16	
2 T	貝層	オオノガイ		左	44	
2 T	貝層	オオノガイ		右	32	
2 T	貝層	オキシジミガイ		右	3	
2 T	貝層	カリガネエガイ		右	1	破片
2 T	貝層	カワアイ			4	
2 T	貝層	コケゴロモガキ			7	破片
2 T	貝層	サルボウガイ?		左	1	破片
2 T	貝層	シラトリガイ属		右	1	
2 T	貝層	スガイ	蓋		87	焼けている2
2 T	貝層	スガイ	殻		10	
2 T	貝層	ツメタガイ			1	
2 T	貝層	ハマグリ		左	1	
2 T	貝層	ハマグリ		右	4	焼けている1
2 T	貝層	ハマグリ?		右	1	
2 T	貝層	ヒダリマキゴマガイ			2	
2 T	貝層	フトヘナタリ?			22	焼けている2
2 T	貝層	ホソウミニナ?			19	

加賀後貝塚動物遺存体一覧表

2 T	貝層	マイマイ属			1	左巻き
2 T	貝層	マガキ		左	23	
2 T	貝層	マガキ?		右	3	
2 T	貝層	ヤマトシジミ		右	1	
2 T	貝層	アイナメ	椎体		3	
2 T	貝層	アカエイ科	歯		2	
2 T	貝層	アナゴ科	角関節骨	右	1	
2 T	貝層	アナゴ科	鋤骨		1	
2 T	貝層	アナゴ科	尾椎		23	
2 T	貝層	アナゴ科	腹椎		16	
2 T	貝層	ニベ科?	前上顎骨	右	1	
2 T	貝層	ウグイ属?	咽頭歯		1	
2 T	貝層	ウナギ	椎体		8	
2 T	貝層	ウナギ?	前上顎骨	左	1	
2 T	貝層	ウミタナゴ科	前上顎骨	右	1	
2 T	貝層	エイ目	尾棘		1	
2 T	貝層	カレイ科	下顎骨	左	1	
2 T	貝層	カレイ科	主上顎骨	左	1	
2 T	貝層	カレイ科	前上顎骨		1	破片
2 T	貝層	カレイ目	尾舌骨		3	
2 T	貝層	クロダイ属	角関節骨	右	1	
2 T	貝層	クロダイ属	歯骨	右	1	
2 T	貝層	クロダイ属	歯骨	左	1	
2 T	貝層	クロダイ属	前上顎骨	左	4	
2 T	貝層	クロダイ属	臀鰭第2棘		3	
2 T	貝層	クロダイ属?	前上顎骨	左	1	
2 T	貝層	コチ?	尾椎		1	
2 T	貝層	コチ?	腹椎		1	
2 T	貝層	スズキ属	角関節骨	右	4	
2 T	貝層	スズキ属	角舌篩骨	右	3	
2 T	貝層	スズキ属	擬鎖骨	右	1	
2 T	貝層	スズキ属	胸鰭第1棘	右	5	
2 T	貝層	スズキ属	胸鰭第1棘	左	4	
2 T	貝層	スズキ属	歯骨	右	6	他に破片 1
2 T	貝層	スズキ属	歯骨	左	7	
2 T	貝層	スズキ属	主上顎骨	左	10	
2 T	貝層	スズキ属	主上顎骨	右	9	
2 T	貝層	スズキ属	主鰓蓋骨	右	1	
2 T	貝層	スズキ属	主鰓蓋骨		10	破片
2 T	貝層	スズキ属	鋤骨		5	
2 T	貝層	スズキ属	前上顎骨	左	6	
2 T	貝層	スズキ属	前上顎骨	右	8	
2 T	貝層	スズキ属	前鰓蓋骨		1	破片
2 T	貝層	スズキ属	尾椎		4	
2 T	貝層	スズキ属	腹椎		10	
2 T	貝層	スズキ属	方骨	右	2	
2 T	貝層	スズキ属	方骨	左	1	
2 T	貝層	スズキ属	臀鰭第2棘		12	
2 T	貝層	タイ科	歯		164	
2 T	貝層	タイ科	尾椎		4	
2 T	貝層	タイ科	鰭棘		11	
2 T	貝層	タイ科	方骨	右	2	
2 T	貝層	ダツ目	顎骨		1	破片
2 T	貝層	トビエイ科	歯板		7	
2 T	貝層	ニシン目	第1脊椎骨		1	
2 T	貝層	ニシン科	第1脊椎骨		4	
2 T	貝層	ニシン科	尾椎		188	
2 T	貝層	ニシン科	腹椎		49	
2 T	貝層	ヒラメ	角関節骨	左	1	
2 T	貝層	ヒラメ	主上顎骨	左	1	
2 T	貝層	ヒラメ	前上顎骨	右	1	
2 T	貝層	ヒラメ	椎体		3	
2 T	貝層	マアジ?	尾椎		1	

2 T	貝層	マアジ?	腹椎		2	
2 T	貝層	マイワシ	第1脊椎骨		3	
2 T	貝層	マダイ or チダイ	前上顎骨	左	2	
2 T	貝層	マフグ?	歯骨	右	1	
2 T	貝層	マフグ?	前上顎骨	右	1	
2 T	貝層	軟骨魚類	椎体		23	
2 T	貝層	鳥類	尺骨	右	1	
2 T	貝層	イノシシ	下顎犬歯		1	破片
2 T	貝層	イノシシ	基節骨		1	近位骨端、焼けている
2 T	貝層	イノシシ	肩甲骨	右?	1	近位端
2 T	貝層	イノシシ	中節骨		1	完形
2 T	貝層	イノシシ?	腸骨	右	1	
2 T	貝層	イノシシ or ニホンジカ	肩甲骨		1	破片
2 T	貝層	タヌキ	上顎犬歯	左	1	
2 T	貝層	ニホンジカ	下顎骨	左	1	関節突起
2 T	貝層	ニホンジカ	踵骨	左	1	完形、骨端遊離
2 T	貝層	ハタネズミ亜科	下顎骨	左	1	
2 T	貝層	哺乳類	肩甲骨?		1	近位端片
2 T	貝層	哺乳類	脊椎骨骨端		1	
2 T	貝層	齧歯目?	胸椎		1	
2 T	貝層	ヘビ亜目	脊椎骨		6	
2 T	第1ピット	オキシジミガイ		左	1	
2 T	第1ピット	マガキ		不明	2	破片
不明		アカザラガイ?			6	破片
不明		アサリ		左	61	
不明		アサリ		右	7	
不明		アサリ?		右	24	
不明		アサリ?		左	25	焼けている 2
不明		イボキサゴ			5014	
不明		イボキサゴ幼貝			651	
不明		イボニシ			1	
不明		ウミニナ			3	
不明		ウミニナ属			10	焼けている 2
不明		オオノガイ		右	5	
不明		オオノガイ		左	5	
不明		オカチョウジガイ			5	
不明		オカチョウジガイ?			3	
不明		カワアイ			1	
不明		キセルガイ科幼貝?			1	
不明		コケゴロモガキ			1	破片
不明		サルボウガイ?		左	1	破片
不明		スガイ	蓋		19	
不明		スガイ	殻		9	
不明		ツメタガイ			3	
不明		ハマグリ?		左	1	
不明		ヒダリマキゴマガイ			2	
不明		ヒメコハクガイ科			5	
不明		ヒメベッコウマイマイ?			2	
不明		フトヘナタリ?			2	
不明		ホソウミニナ?			3	焼けている 2
不明		マガキ		右	8	
不明		マガキ?		左	1	
不明		レイシガイ	破片		1	
不明		クロダイ属	前上顎骨	右	5	
不明		クロダイ属?	角関節骨	左	1	
不明		スズキ属	角関節骨	左	3	
不明		スズキ属	耳石		1	
不明		スズキ属	方骨	左	6	
不明		スズキ属	方骨	右	2	
不明		ヒラメ	椎体		1	
不明		鳥類	骨幹片		3	
不明		鳥類	脛骨	左	1	



写 真 图 版





一里段古墳群 1号墳 (墳丘清掃後)



墳丘土層断面





SD01



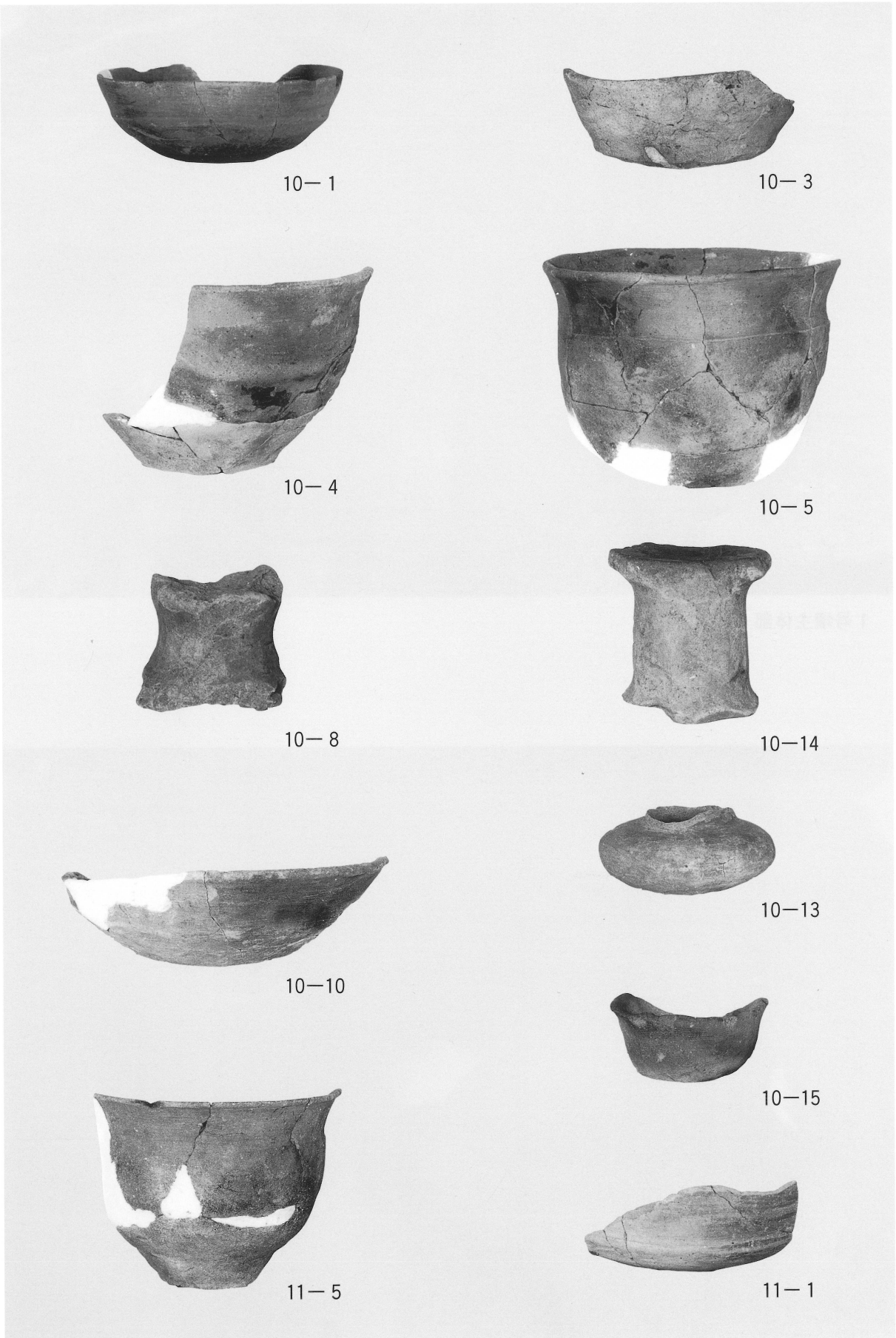
3T



1号墳主体部



墳丘内土器出土状況



一里段古墳群 1 号 墳出土土器

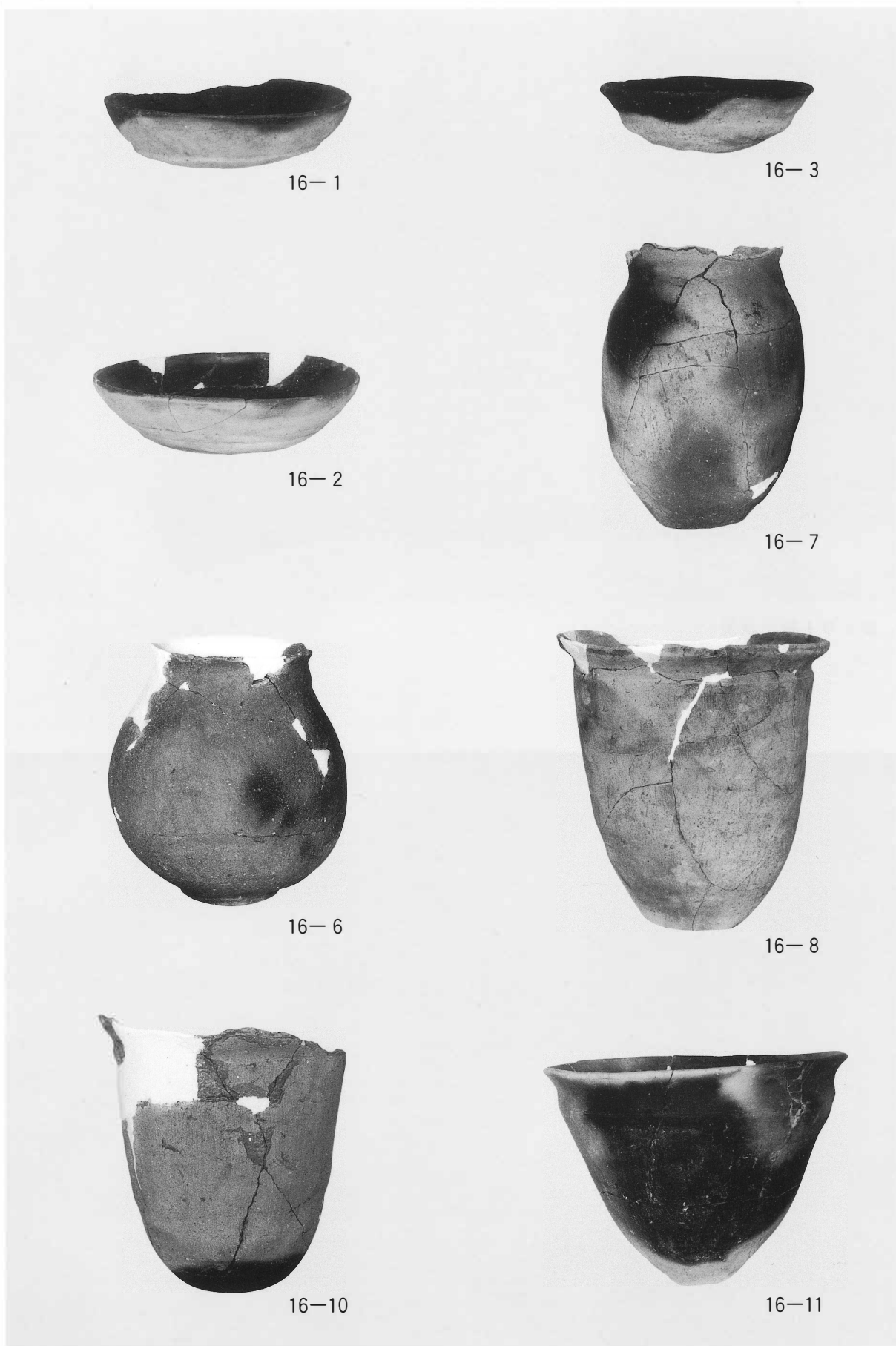




S 1 0 1 検出状況



S 1 0 1 土器出土状況



中村平遺跡出土土器



1 1 T住居址検出状況



5 0 T S K 0 1

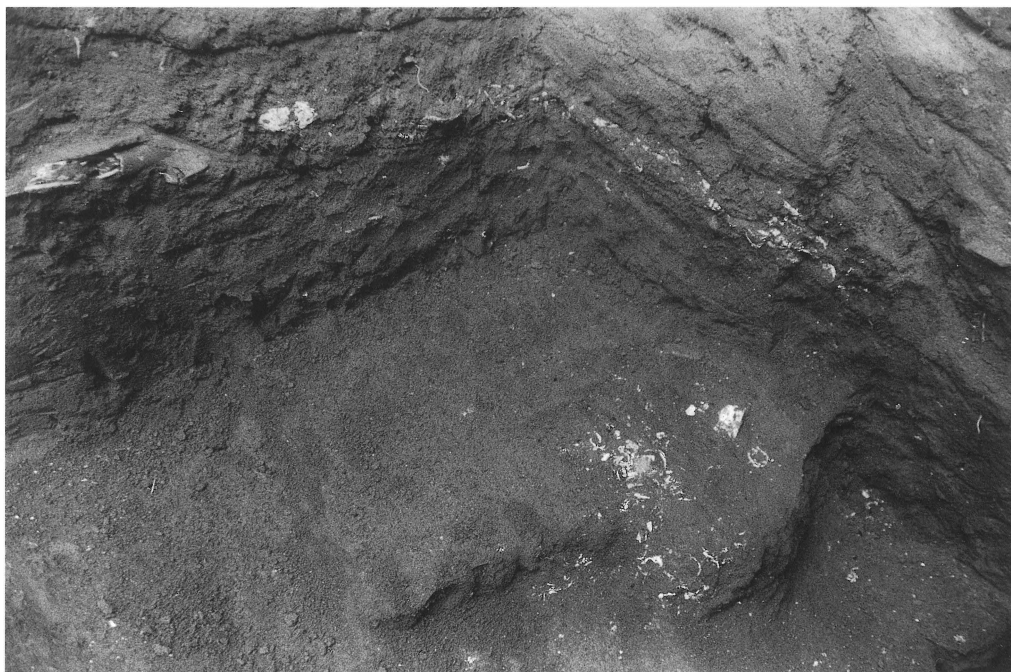


3 1 T 遺物包含層

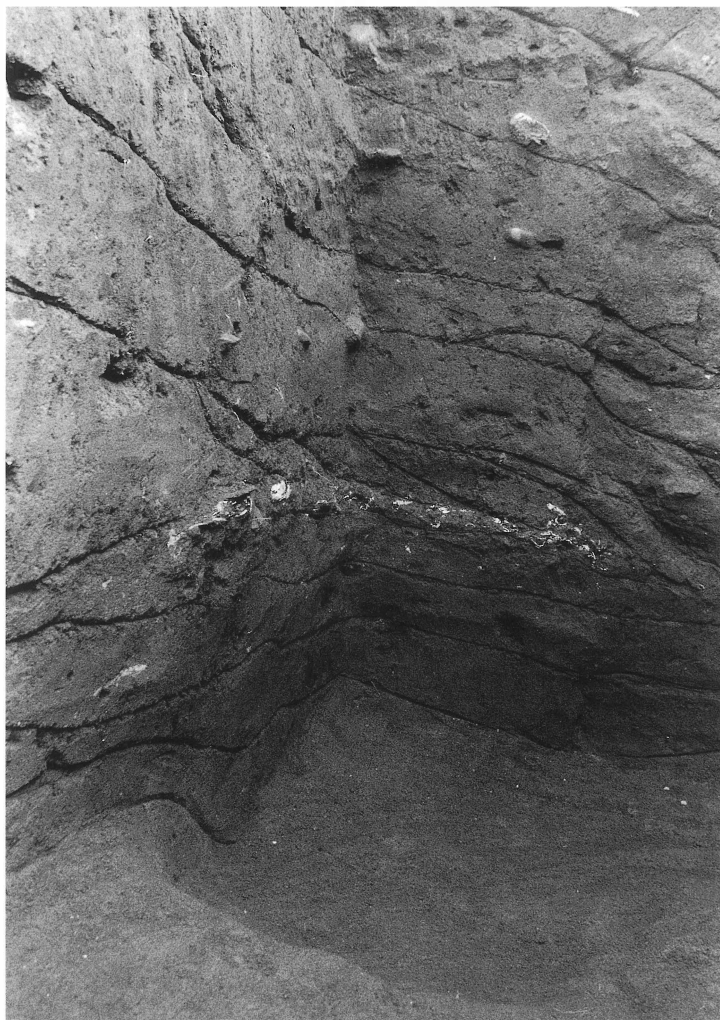


3 1 T 土器出土状況





31 T 貝層 (上位Ⅲ層貝層、下位Ⅳ層貝ブロック)



31 T 遺物包含層・貝層





3 8 T 遺物出土状況



3 8 T 貝層断面



S X 0 1 調査状況



S X 0 1 調査状況



1 4 T 調査状況



ボーリング調査

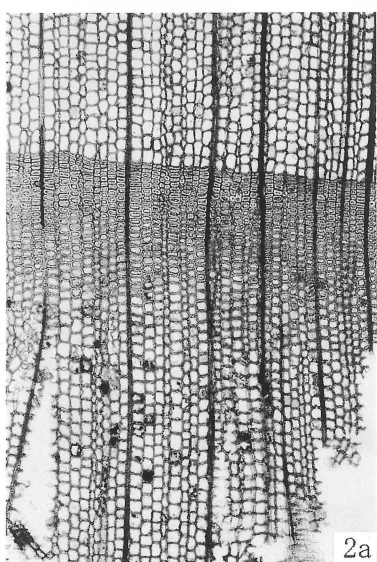




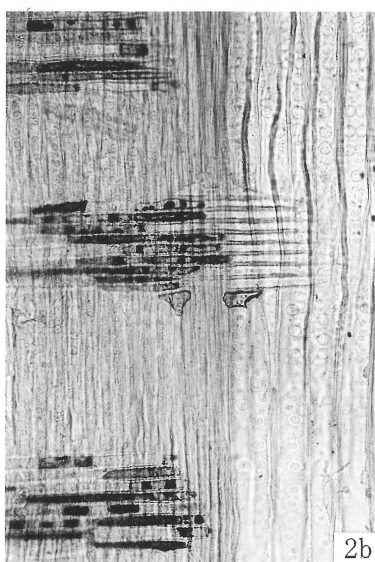
2 mm

(1)

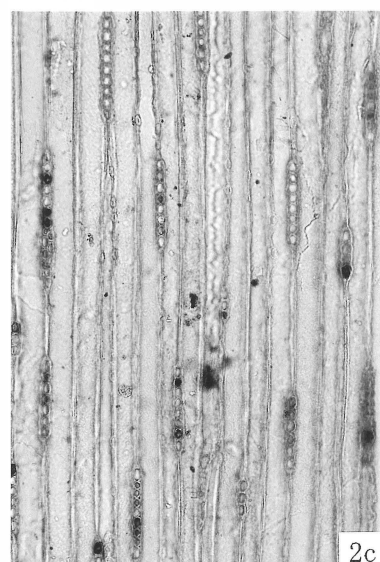
1



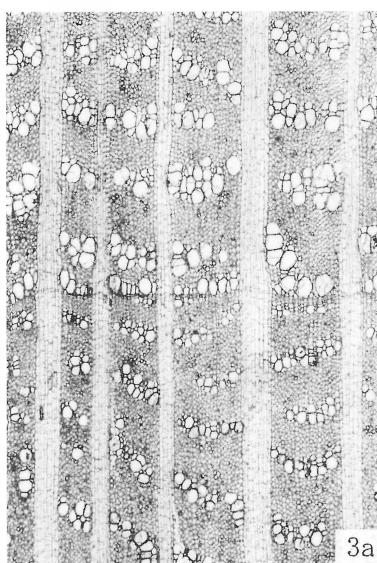
2a



2b



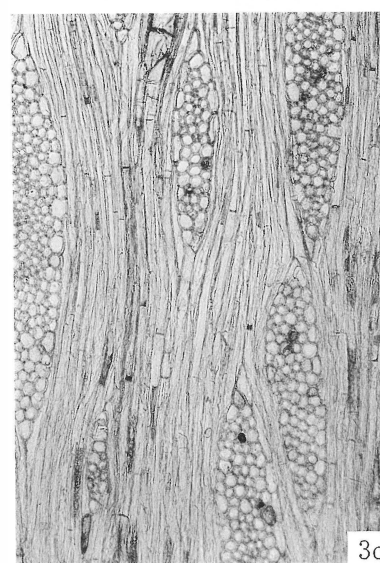
2c



3a



3b



3c

200 μm

200 μm

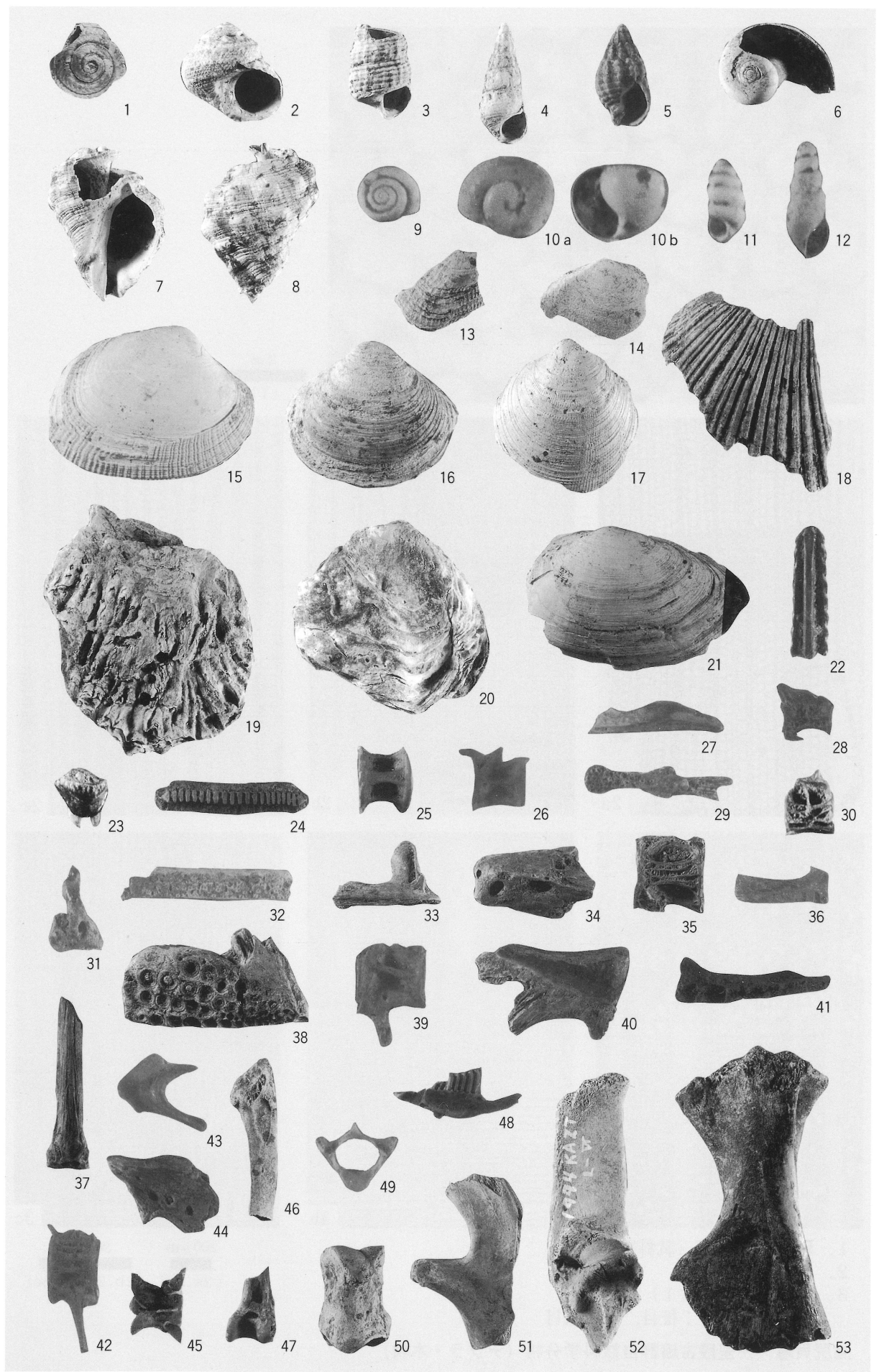
(2a, 3a)

(2b, 2c, 3b, 3c)

1. Hr-FP の軽石 (試料番号 1)
  2. モミ属 (杭 1)
  3. ウコギ属 (木材 1)
- a : 木口, b : 柁目, c : 板目

浦尻貝塚・一里段古墳群自然科学分析 (テフラ・木材)

図版 14 加賀後貝塚出土動物遺存体



〔図版14説明〕

- |    |                |    |                  |
|----|----------------|----|------------------|
| 1  | イボキサゴ (×1)     | 28 | ウナギ椎体 (×2)       |
| 2  | スガイ (×1)       | 29 | マアナゴ鋤骨 (×2)      |
| 3  | カワアイ (×1)      | 30 | マアナゴ椎体 (×2.5)    |
| 4  | ウミニナ (×1)      | 31 | ウグイ属?咽頭歯 (×2)    |
| 5  | アラムシロガイ (×1.5) | 32 | ダツ目顎骨 (×2)       |
| 6  | ツメタガイ (×0.7)   | 33 | スズキ属右前上顎骨 (×1)   |
| 7  | イボニシ (×1)      | 34 | スズキ属左歯骨 (×1)     |
| 8  | レイシ (×1)       | 35 | スズキ属椎体 (×1)      |
| 9  | ヒメコハクガイ科 (×5)  | 36 | ウミタナゴ科右前上顎骨 (×2) |
| 10 | マイマイ属 (×5)     | 37 | スズキ属臀鰭第2棘 (×1)   |
| 11 | ヒダリマキゴマガイ (×7) | 38 | クロダイ属左前上顎骨 (×1)  |
| 12 | オカチョウジガイ (×5)  | 39 | タイ科椎体 (×2)       |
| 13 | カリガネエガイ (×1)   | 40 | マフグ?右歯骨 (×1.5)   |
| 14 | シラトリガイ属 (×1)   | 41 | ヒラメ右前上顎骨 (×1.5)  |
| 15 | アサリ (×1)       | 42 | ヒラメ椎体 (×2)       |
| 16 | ヤマトシジミ (×1)    | 43 | カレイ科尾舌骨 (×2)     |
| 17 | オキシジミガイ (×0.7) | 44 | カレイ科左歯骨 (×2.5)   |
| 18 | アカザラガイ (×0.5)  | 45 | ヘビ亜目椎体 (×1.5)    |
| 19 | コケゴロモガキ (×0.5) | 46 | 鳥類右尺骨 (×1)       |
| 20 | マガキ (×0.7)     | 47 | 鳥類左脛骨 (×1)       |
| 21 | オオノガイ (×0.5)   | 48 | ハタネズミ亜科左下顎骨 (×2) |
| 22 | エイ目尾棘 (×1.2)   | 49 | 齧歯目?胸椎 (×4)      |
| 23 | アカエイ科歯 (×2.5)  | 50 | イノシシ中節骨 (×0.7)   |
| 24 | トビエイ科歯板 (×1.5) | 51 | ニホンジカ左下顎骨 (×0.6) |
| 25 | 軟骨魚類椎体 (×2)    | 52 | ニホンジカ左踵骨 (×0.6)  |
| 26 | ニシン科椎体 (×3)    | 53 | イノシシ右腸骨 (×0.7)   |
| 27 | ウナギ?左前上顎骨 (×2) |    |                  |

報告書抄録

ふりがな	おだかちょうないまいぞうぶんかざいちょうさほうこく1
書名	小高町内埋蔵文化財調査報告 I
シリーズ名	小高町文化財調査報告書
シリーズ番号	第2集
編著者名	川田強 山崎京美 パリノサーヴェイ株式会社
編集機関	福島県相馬郡小高町教育委員会教育総務課
所在地	〒979-2111 福島県相馬郡小高町仲町二丁目 82 番地
発行年月日	2001. 3. 30

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡				
いちりだんこふんぐん 一里段古墳群1号墳	小高町片草字一里段 7-1	07563	8	37° 34' 10"	140° 58' 31"	400	土砂採取
なかむらだいらいせき 中村平遺跡	小高町小屋木字 一本松58-6		85	37° 32' 58"	140° 58' 56"	10	個人住宅
きたはらからつかいせきぐん 北原貝塚遺跡群	小高町浦尻字北原		55	37° 30' 54"	141° 02' 08"	150	県道工事
うもりかいつか 浦尻貝塚	小高町浦尻字西向・ 台ノ前・大塚・南台・ 小迫		52・53・ 54・114	37° 31' 00"	141° 01' 40"	1500	町道工事
かごかいづか 加賀後貝塚	小高町上浦字加賀後		33・34・ 35	37° 31' 11"	140° 59' 30"	310	ほ場整備
ひがしひろはた いせき 東広畑B遺跡	小高町小高字東広畑		67	37° 34' 06"	140° 59' 13"	80	個人住宅
つのべうちみなみだいらいせき 角部内南台遺跡	小高町角部内字雁北 ・南台		95	37° 32' 29"	141° 01' 29"	385	民間研修セン ター建設
おおたわひろはた いせき 大田和広畑遺跡	小高町金谷字作迫		24	37° 32' 46"	140° 56' 49"	140	町道工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
一里段古墳群1号墳	古墳・集落	弥生中期・古墳後期	古墳・住居址	土師器	6世紀代の古墳および住居址
中村平遺跡	集落	弥生中期・古墳末	住居址	土師器	7世紀代の住居址
北原貝塚遺跡群	集落・貝塚	縄文早期～中期	—	縄文土器	
浦尻貝塚	集落・貝塚・ 古墳・城館跡	縄文前期～晩期・ 古墳・平安・中世～近世	貝塚・土坑・ 遺物包含層・ 古墳・住居址・ 木組遺構	縄文土器(前期 ～晩期)・貝輪・ 貝刃・石器・ 糞石	縄文前期～中期の斜面貝 塚・遺物包含層 中世以降の木組遺構
加賀後貝塚	貝塚・散布地	縄文前期・弥生中期・平安	貝塚	縄文土器(前期) 土師器	
東広畑B遺跡	集落	古墳前期・奈良～平安	—	—	
角部内南台遺跡	貝塚・散布地	縄文前期～中期・ 奈良～平安	土坑	土師器・ 須恵器・鉄滓	
大田和広畑遺跡	散布地	縄文中期～後期	—	—	

小高町文化財調査報告書第2集

---

小高町内埋蔵文化財調査報告 I

2001年3月 発行

発行 福島県相馬郡小高町教育委員会  
福島県相馬郡小高町仲町二丁目82  
☎ (0244) 44 - 4114 (代)

印刷 株式会社 まつざき印刷  
福島県双葉郡浪江町高瀬根木内100  
☎ (0240) 34 - 6655 (代)